
Valbatous【バルバトス】

師祇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Valbatus 【バルバトス】

【Nコード】

N6399U

【作者名】

師祇

【あらすじ】

地球から遠く離れた星のお話。「何となくムカツク」という訳のわからない理由で世界を滅ぼそうとした魔神バルバトス。それを止めるため、なりゆきで女盗賊ノア（16歳）が、王子様やら医者やら記憶喪失の少女やらなんかを集めて頑張る・・・という話。自称王道ファンタジー・・・かと。

用語・登場人物紹介

用語解説

・ファル

ネコが人間へと進化した種族。猫耳に尻尾が特徴。柔軟な身体能力に優れ、剣や斧が得意。優性種意識が高い者が多い。

・メリン

ウサギが人間へと進化した種族。長いウサ耳が特徴。魔法力が総じて高い者が多い。ファルと同じで優性意識が高い者が多く、ファルとは比較的に仲が良い。魔神バルバトスによって、故郷を破壊されている。

・デム

猿が人間に進化した種族。蔑称エテ公。地球の人間に似ていて、外見の特徴も特殊能力もない。総じて独善的かつ臆病者が多く、ファルやメリンからは軽視されている。ただ中には稀に優秀な者もいて、一部のデムは優遇されているケースもある。

・ボーズ星人

進化を止め、自我を放棄し、退化を選択した元人間の種族。ノツペリとした非個性的な顔に、ツルツとした頭をしている。語尾にボーをつける者が多い。優柔不断であるが、争いを望まない平和主義者たち。火に非常に弱い。発見された時に異星人だと思われたので星人との名がつく。能力はデム以下だが、中には哲学的な思考力を持つ者もいる。総体数は、上記三種族に比べてかなり少ない。

・魔神バルバトス

『ムカツク』からという理由で世界を滅ぼそうとした恐怖の魔神。30メートルの体躯に、鉄仮面と三本の鉄爪、そして無敵の筋肉が武器。誰も止めるがでなかつたが、二十年前にスタッドの聖魔法によって封印される。

登場人物紹介

ノア 16歳

主人公。デムの男勝りな女の子。得意武器はダガー。赤いショートカットの髪。バツカレス盗賊団の紅一点。幼い時に、バツカレス親分に宝と間違えてられて拐われたのが縁で盗賊になる。盗賊といつても強きを砕き、弱きを助ける義賊。お宝には目がないが、面倒見の良く、正義感に厚い。欠点は思慮に欠け、無鉄砲、向こう見ずなところ。体型はまだまだ成長中、かつアスリート寄り。男の好みは、男集団の中で育ったせいかわ、マッチョで強いヤツ。いまでは命を助けられたスタッドに、仄かな恋心を抱いている模様。

スタッド 42歳

二十年前に魔神バルバトスを封印した英雄。元はデムの考古学者で、とくに目立つような人でもなかつた。丸眼鏡をかけ、無精ヒゲ、登山服にリュックサクといった出で立ち。常に朗らかな容姿から、冴えない人物と思われがちだが、その右手には聖剣エイストを有しており、見た目とは裏腹に強力な聖魔法を使用する。種族の平等主義をデムの中で一番先に述べ、見捨てられていたボーズ星人なども高く評価していたり、常人ではちよつと考えられない価値観を持つ。現在では、フラフラして行方は誰にも解らない。ひよつとしたことから偶然に、瀕死の重傷を負ったノアを助けることになる。

メルメル 16歳

メリンの少女。記憶をなくしていて、ボーズ星人たちに保護される。退化の大森林で迷ってる時にノアと出会う。強力な魔法力を持つが、とても心優しく、軽視されているボーズ星人と仲良くしていたり、魔物とも出来れば争いたくないと考えている。ウサ耳で童顔。しかも、清纯派と思わせるや、ノアと比べものにならないナイスバディというまさに世の中の男どもの理想（妄想）を体現したかのよう。人を傷つける魔法しか使えないことを疎んでいる節があり、人を助ける技術をもつ医者バーボンに惹かれる。

ミヤオ 14歳

ファルの少女。幼い頃に捨てられ、デムの隠居人コネミに気まぐれで拾われ育てられてきた少女。辺境の地にいたため、かなりの世間知らず。男性という存在を、「頭が光っていて、腹が出ているもの」という誤った認識をもっている。天然で明るいつ真爛漫な元氣少女。一部のお兄様がたが大好きな、ネコ耳、八重歯、尻尾はもちろんな標準装備。でも、天然なフリって計算が高いからできるの・・・おつとと。ある調べによれば、スタイルはノアよりも上らしい。

レイ 16歳

デムの国であるジャスト城の将来を囑望された優秀美麗な王子。妹のマレルも類い希なる美しさを持つが、実はその妹に恋愛感情を抱かれているのは本人以外ではよく知られた事である。王国剣技も一通り習得しており、それなりに腕っ節も強い。完璧とも思える王子様像であるが、実は女の子に惚れやすいという欠点を持つ。好きな女の子にはストーカーのようになってしまう、身分の差を越えてノアたちの仲間に入る。現在、お熱なのはメルメル。まあ、本人の想いはメルメルには殆ど届いていないのはお約束である。

バーボン 25歳

優秀なデムの医者。かつてはその技術を認められ、ファルの首都レ

ムジンで働いていた。が、種族差別を否定するような主張をしたため、その反感者との争いで、レムジンでの地位と、右目と左腕のみならず、妻まで失うこととなる。いまでは種族平等の理想を捨て、ジャスト城下町の町医者として、細々と診療を営んでいる。ノアたちバツカレスとは古い知り合いであり、特にノアにとっては兄のような存在。ノアには盗賊という危ない仕事は辞め、本当に幸せになつて欲しいと願っている。

ボーズ太郎 およそ58歳

ノアたちとの出会いにより、自我を持ったボーズ星人。基本的には臆病であるが、時にはメルメルのために命を張ったりすることもある。スタッドの力で、隠されていた古代魔法の力に目覚め、癒しの魔法や補助魔法なので仲間達をサポートする。お調子者で、軽はずみなことを言うこともあるが、皆が気づかないところを的確にいたりもする。存在感が薄く、気づいてもらえなかったりすることも多い。

オ・パイ 48歳

暗殺拳を極めたデムの男。死至突しとつと呼ばれる一撃で敵をあの世に葬る。秘宝を盗みにはいったノアを瀕死に追い込む。一年前にジャスト城に大臣として就任してから、国費をかなりの節制し、国民への重税を課したり、盗賊やボーズ星人などへの残虐な対応など、思うがままに非道に国を操っている。だが、実力は最上なので、国王を初めとして誰も止められないでいる。かなりの現実主義者で、スタッドやバーボンの主張を世迷い言と考えてる節がある。ある野望のためにノアたちと激しく敵対する。

アホンとダラ それぞれ25歳

オ・パイ直属の配下。小柄で口うるさいアホンに、大柄で無口なダラの凸凹コンビ。通称二人合わせて、アホンダラ。やることなすこ

と、へまばかりであるが、オ・パイにとっては扱い易らしく、た
びたび用いられている。ノアたちにとっては一応、障害となる敵。
まあ、一応であるが。

第一章 女盗賊ノアと秘宝エルマドール

ここは地球よりも遙かに遠く離れた星。

でも、ありがちなことに、そりゃよくもまあ、環境は地球に酷似した世界です。

この星が地球と違うのは、この星には人間に似た三つの種族が存在しているということです。

ネコが進化した『ファル』族。ウサギが進化した『メリン』族。そしてサルが進化した『エテ公』・・・いや、失礼。もとい、『デム』族という種族です。

三種族はそりゃ仲良く・・・まあ、毛深くて知性の低いデムは差別されてましたけどね。まあ、それなりに良好関係にありました。

そして、この世界には『バルバトス』という神様がいました。

特徴を言い表すならば、巨大、仮面、筋肉、鉄の三本爪・・・といったところでしょうか。

その気性の荒い神様は、ある日、突然に『なんかムカツク』というような十代の暴走にありがちな行為で世界を滅ぼそうとしました。

もちろん、この世界に必死に生きている三種族。ただ黙って滅ぼされるわけではありません。体技に優れたファル族は剣を持ち、魔力が高いメリン族は魔法を使い、特筆すべき能力もないデム族は・・・まあ、わーわー騒いでいただけなんですけど・・・まあ、とりあえず抵抗しようと、戦おうとしました。

しかし、バルバトスは『魔神』と呼ばれるほど強力な神様です。ドス紫色に輝く無敵の筋肉で、「そりゃ！ ふんりゃ！」と言わんばかりにバツコンバツコンと三種族を千切っては投げ、千切っては投げして叩きのめしました。そして、風の吹くまま、気の向くまま、バルバトスはあっちゃこつちゃの国々を吹き飛ばしていきました。

バルバトスの止まらない暴走。為す術もなく三種族は家の中でブルブルと震えていました。そんな中、デムの中でも一際に変人と呼

ばれる男がいました。その名前を『スタッド』と言います。この男、考古学者であったのですが、魔神バルバトスが暴れる中、なんと一人でフラフラと遺跡巡りをしていたのです。

ある日、この魔神バルバトスと考古学者スタッドは森の中でばったりと出くわしてしまいます。もう、森のクマさんより最悪なケースです。

昼飯を終えたバルバトスは、爪楊枝をシーシーさせながら（仮面しているのに不思議ですね！）、「こしゃくな、人間！ 死ねえい！」と悪役にありがちな台詞を言いながらスタッドに殴りかかりました。魔神バルバトスは30メートルはある巨大さです。そんなヤツに殴られたら、ひ弱なDEMなんてひとたまりもありません！

でも、スタッドは怯えることも、逃げることもませんでした。

迫りかかる鉄の爪を前に、無精髭をポリツとなで、丸眼鏡の奥の細い目はいつものように穏やかでした。そして、小さく呟いたのです。

『聖結界エミトン』

スタッドの手のひらからは魔法陣が飛び出し、それが魔神バルバトスを包み込みました。そして全自動洗濯機に飲み込まれる野球部の汗くさいシャツのように、グルグルと回転しつつ収縮して消えてしまいました。なんと、名もなく、力もないあのエテ公が・・・あの魔神バルバトスを封じ込めてしまったのです！！

その一部始終を目撃していたある村のババアは、「スタッドが遺跡巡りをしていたのはのお、実はバルバトスを封印するためのパウワーを探していたのであって、偶然、道ばたで魔神に出会ったのはスタッドの計算だったじゃ！」と自身の勝手な推測による自慢話によって、スタッドがバルバトスを倒したという噂は世界中に広まりました。

こうしてファルからもメリンからもエテ公・・・DEMからも、スタッドは英雄として担ぎ上げられたのです。

いまから致しますのは、それから、二十年の月日がたった頃のお話です・・・。

三種族は、基本的に住む場所が別々です。ここはエテ公たちの住まう城『ジャスト城』。デムたちが築いた城の中では一番に大きい物です。っていうか、バルバトスに壊されて、他に城なんてもうないんですけどね。

その付近の森に、エテ公からも見放されたエテ公たちが住んでいました。まともな定職にも就かず、いつもフラフラして、必要とあればジャスト城やその城下町から拝借・・・泥棒してくるっていう集団です。この人達を、バツカレス盗賊団といました。

月を見上げながら、赤ら顔で酒瓶をあおる・・・ボロボロのバンダナに、ガチムチの体格、腰にはギリリと光る大きめのダガーが差してあります。バツカレス盗賊団を率いる首領バツカレス親分です。「ウイー。飲みすぎちまったかな。いや、まだいけるな。今日は良い月夜だ。ガツハツハ！」

そう上機嫌で言いながら、酒瓶を再び口に含みます。上に上げて、バツカレスは渋い顔をしました。口から酒瓶をはずし、逆さにするのとポタポタとしか出てきません。

「チツ。おーい！ ノア！！ 酒だ！！ 酒をもてこーい！！」

野太く大きな声で、バツカレスが小屋に向かって言いました。この小屋は盗賊団のアジトなのです。そこから、赤い髪をした小柄な少女が出てきました。両手に抱えているのは、大きな酒樽です。

「親分！。飲み過ぎだよ」

呆れた顔をして、赤い髪をした少女は言いました。それでも、酒樽はバツカレスの前に置かれます。

「うるせいやい！ ノア！ お宝ゼ口でこれが飲まずにいられるってのか！」

酒樽の上蓋をバカンと拳で殴りつけて割り、バツカレスはそれを丸ごと持ち上げてゴックゴックと飲み始めました。口の箸から酒がポタポタと滴ります。赤い髪の少女・・・ノアは、それを見てちよ

つと引きました。

「ぶつはー！ うめえー！ うますぎるぜー！」

「んだよー。これじゃ、盗賊団の頭じゃなくただの酔っぱらいじゃないか。盗賊なら盗賊らしくもう一度チャレンジすりゃいいじゃないか」

ノアはふくれっ面でいいました。女の子なのに、あぐらでどっかりと親分の隣に座ります。

実は、バッカレス盗賊団は今日、お宝を盗りにジャスト城に乗り込んだのですが・・・失敗してしまっただです。それで、バッカレスはやけになつて酒をガバガバ飲んでいるわけなのです。

「もう一度、チャレンジだと？ 阿呆ぬかすな。先月、今月と収獲ゼロなんだぞ。クソ、それもこれも、あのジャスト城のクソ大臣のせいだな！」

ウーツと怒りの息を吹き出しながら、バッカレスの顔がますます赤くなります。

「大臣？ ああ、なんだか最近に就任したとかいう？ 暗殺拳の使い手で、なんだか王様の警護も任されているんでしょ」

「ああ。それに頭もキれる。あいつの策で、いくつも俺の部下がやられたことか！ それに、こんな辺鄙な場所にアジト作らなきゃいけないのもヤツのせいだ！」

「えー。親分より強いわけ？」

「馬鹿いうな！ 俺は盗賊だぞ？ 戦士じゃねえ。真つ正面からやり合うのは筋じゃねんだよ！」

バッカレスはどんと、机がわりにしている切り株を叩きました。

「ちきしょう。あいつさえいなければ、秘宝エルマドルもすでに俺の手にあつたのになあー」

「秘宝エルマドル？」

ノアが小首をかしげると、バッカレスは何かを思いついたかのようになやりと笑いました。

「そうだ。ジャスト城に眠る、最高のお宝だ！ これがありゃ、な

に不自由なく暮らせる！」

「へえー。すつげーな！」

ノアの目はキラキラと光りました。そりゃ女の子ですもの。そりゃ盗賊ですもの。光り物大好きです！

「で、だ！ ノア。赤ん坊のオメエを拾ってはや16年。俺のもてる技術のほとんどは教えた！ もう一人立ちしてもいい頃だ！ 一人前の証として、一人で秘室エルマドールをかつぱらってこい！」

「一人前・・・やる！ アタシやるよ！！」

短絡的な思考回路がカチツと入りました。ノアはバツと立ち上がり、腰からバツカレスのよりは一回り小さいダガーを抜いて構えます。

それを盗み聞いていたらし二人の男が、アジトから慌てた様子で飛び出てきました。

「む、無茶です、親分！」

「ノア一人にそんな危険なことを！！」

血相を変えた顔で、二人はそれぞれバツカレスに詰め寄って言い放ちます。

一人は神父の格好をしたシュタイナ・・・盗賊なんですけど、諜報活動のためこんな格好しているんですね。バツカレスの右腕とも呼ばれる二十歳の男です。

もう一人はノアと同じ年。主に倉庫番をしていて、オレンジ色のニット帽をかぶっているのが特徴のヤグルです。

「な、なんだテメエら！？」

ノアは驚いて目をパチパチとさせました。そんなノアなんてお構いなしで、二人の男はバツカレスの腕を左右から揺すぶります。

「バツカレス親分！ いまのジャスト城がいかに危険かご存じでしょう！ あの暗殺大臣のせいで、この僕もケガを負ったんですよ！」

シュタイナが片腕をめくる。そこにはひどい青痣がありました。腕っ節の強いシュタイナがケガをするなんて相当です。

「そうですね！ もし、どうしても行けというのなら俺も！ ノアがいくら親分の一番弟子だからって・・・」

そう抗議する二人に、バツカレスの鉄拳が二人に落ちました。ゴツンゴツン！

「うるせー！ ピーピー、男の癖にさえずるな！ ノアはもう一人前だ！ ったく、テメエらみたいな心配性な奴らがいるから、今までノアを連れて盗みにはいることもできなかったんだろ！ 寛大な俺も、もう限界だ！ この件はノアに任す！ ノアが適任だ！」
バツカレスは真つ赤な顔でそう言いました。完全に酔っぱらっています。バツカレス親分の悪い癖です。

「お、親分。・・・いつもは、親分がノアを連れていきながらなのに・・・」

「うるせー！！」

バツカレスが吼えると、「ひい」とヤグルは腰を抜かしました。シユタイナは苦い顔をします。ですが、ノアは、大丈夫だとVサインをしました。

「盗賊ノア！ いっちょ秘宝エルマドールを見事うばいってきてやる！！」

こんな適当な成り行きで、ノアはジャスト城に単独忍び込むこととなりました・・・。

実はこれはノアにとって大チャンスでした。盗賊団が盗みに入る時、ちよつとでも危険な事があると、ノアは女の子だからという理由で参加させてもらえなかったのです。いくら親分の娘みたいなものだからといって、いくら盗賊団の紅一点だからといって。こうも過保護にされることにノアはちよつとイライラした気分を感じていました。

即決行。それがノアのスタイルです。そしてましてや、ジャスト城の側も、今日の昼来て、夜もまた盗みに入るなんて思っていないかもしれません。だとすれば、今夜がチャンスじゃありませんか。

愛用のポーチに、薬草やらロープやらの必需品を詰め込みます。そんな準備をしている間、シュタイナは複雑そうな顔をして、壁にもたれ掛かりながらノアを見ていました。

「ノア。酔っぱらった親分が今まで無茶苦茶というのは知っているだろう？ 今日とはくにひどいよ。考えなおしてくれ」

兄貴みたいな存在のシュタイナです。ノアはいつもするようにニツと笑いました。

「大丈夫大丈夫。その暗殺大臣とかいうのとは戦うつもりないし。危なければすぐ逃げるって」

そう言いながら、ノアはチラツとシュタイナの腕を見ました。きつとあの暗殺大臣につけられた傷なんでしょう。ノアに心配させまいと、シュタイナは昼間にケガをしたことを黙っていたのです。

「そんなに簡単にすむ相手じゃない・・・あいつは別格だ」

そう苦々しくシュタイナは言いますが、ノアはすでにポーチを腰に巻いています。こうなったノアは、誰にも止められません。親分と同じで、こういうところは頑固なのです。それを知っているシュタイナは大きく溜息をつきました。

「ヤグル。無駄のようだよ。力づくで・・・っていつでも、お前の力じゃノアは止められないだろ」

シュタイナが扉を開くと、扉の後ろに隠れていたヤグルが前のめに倒れました。

「・・・の、ノア、俺も一緒についていくってのは？」

ヤグルが顔を紅くして言いますが、ノアは強く首を横に振りしました。

「それじゃ、一人前って認められないだろ。ヤグル。それに、一緒に行ったら逃げるときに足手まといだよ」

ノアがはつきり言うのに、ヤグルはしょぼんとした顔をしました。でも、実際にはヤグルの実力は誉められたものではありません。だから、いつも倉庫番をしているのです。

ノアに足手まといなんて言われてしまったら、男としてのメンツ

もたちません。まあ、理由はそれだけじゃないんですけどね。ヤグルの目はノアをジッと見やっています。何か言いたげに、口をモゴモゴさせます。ですが、言う勇氣はせずに、がっくりと肩を落としました。

「じゃ、じゃあ・・・せめてこれを持っていつてくれ。きっと、役に立つから！」

ヤグルは、ポケットの中から小さな球状の物を取り出しました。球といっても完全な球体でなく、何かガムテープのような物でグルグル巻きにしたものです。一見してゴミに見えます。ノアはそれを指でつまんで首をかしげました。

「なにこれ？」

「あの・・・危なくなったら、投げてみて。そしたら、解るから」
ヤグルが両方の人差し指を付き合わせながらモジモジと言います。ノアは「ふーん」といつて、それを胸元に入れました。それを見て、ヤグルはカツと赤くなります。ええ。ノアについて行きたがったのは、そういうわけもあるんです。

「・・・とりあえず、危険なことはいしないで。無理だと思ったらすぐ逃げるんだよ」

シユタイナが柔らかくそう言います。ヤグルもコクコクと頷きました。ノアはあっけらかんと笑って「大丈夫大丈夫」って答えました。

実は、本当に大丈夫ではないことが先に待ち受けているんですけども。そんなこと、今のノアが知る由もありませんでした・・・

俊足の足で、盗賊の森を抜け、エルジメン橋を通っていきます。そして寝静まったジャスト城下町に入りました。

武器屋も防具屋も道具屋も閉まっていますし、町中にはほとんど誰もいません。時々バツカレスに内緒で行く、馴染みのアクセサリ一屋にもシャッターが下りていました。煌々と灯りがついているの

は唯一酒場だけです。

見張りの兵士が松明をもつてうろついています。暗闇に慣れているノアは、上手に死角をくぐってジャスト城へと向かいます。

ジャスト城はそれほど大きな作りではありません。三階建てで、一階に兵士たちの待機所や厨房に食堂。二階に王間や王子たちの部屋、そして三階に式典場に使用される大広間などが設けられています。それでも、初めて見る城はノアにとっては大きい物でした。

ポカンと口を上げて月明かりの中、しばし見とれてしまいました。ですが、ポーツとしているわけにもいきません。観光に来たわけではないのです。

堀にかかっている橋の向こうでは、見張りの兵士が二人たっていました。が・・・なんと二人揃って居眠りしています。城下では兵士が巡回していますし、きつと気が抜けていたのでしょうか。それは、ノアにとっては好都合でした。

足音を忍ばせて橋を渡り、閉じている城門の上をめがけてフックのついたロープを投げます。見事、覗き窓の端にそれが引っかかります。身軽なノアはヒョイと飛び上がり、スルスルと器用に、まるで猿・・・ああ、デムって猿が進化した種族なんです。・・・ツルツルした壁を器用に登っていきます。

シユタツと二階の空中庭園に到着しました。大変、順調です。ノアは思わず笑みが零れそうになりました。ですが、ハツと背中に人の気配を感じます。慌てて、大きな鉢植えの裏に身を隠しました。チラツと気配を感じた方を見やると、庭園の真ん中。石作りのテーブルに両肘を寄せ、憂鬱な表情で月に見とれている金髪の少女がいました。幸い、ノアには気づいていないようです。

フワフワした豊かな巻き毛、ヒラヒラの純白のドレス。神々しいまでの装飾が施された、金でできたブレスレットにイヤリング。それだけで、ノアはすぐに、彼女がこの城の王女であるマレルであると気づきました。

歳は確か十二歳ぐらいでしたでしょうか。あんまり森からでない

世間知らずのノアも、この国の王様や王女様の顔はさすがに知っています。そして、自分の着ているボロボロの胸当てと腰当てを見て、自分とは対称的だなあと、ノアは自分でちよっとおかしく思っていました。女の子として羨ましいという気持ちと同時に、それ以上に女の子らしくない自分の姿がちよっと滑稽だったのです。でも、盗賊として一人前に、バツカレス親分のようになりたいたいと思っっているノアの気持ちを優先すれば、それは笑い飛ばせるぐらいの嫉妬でした。

「・・・はあ、お兄様。いつになったら私の気持ちに気づいてくれるのでしょうか」

マレルが口にした言葉に、ノアは釣り上がりのがちな目を少しだけ大きく開きました。自分の聞き間違いだと思ったのです。

「・・・お兄様。お慕いしています。ああ、お兄様」

マレルは月を見上げながら、祈るようにそう呟きます。ノアの二の腕に鳥肌が立ちました。

「・・・うわー。なんだよ。兄妹で、かよ。アタシには理解できないなあ」

ノアは首を横に振り、マレルの注意が向かないよう静かに城内の方に向かいました。

大きな窓は今日は暑いので開けっぱなしです。不用心ですね。でも、最近のニュースでも、城の要人の誰かが狙われたというような話はありません。優秀な暗殺者が大臣になってからというもの、平和なのです。なんせバツカレス盗賊団を追い返してしまっぐらいの実力の持ち主なのですから！ だから、見張りの兵士が居眠りしていたとしても納得・・・いきませんが、まあ、そういうものなのです。なにせ無能なエテ公・・・デムの城なんですものね。

ノアが窓から入ったところは、どうやら王子の部屋でした。マレルの兄であるレイ王子です。眉目秀麗、博識明瞭かつスポーツ万能。そんな優秀なデムの王子は、確かノアと同じ年でした。

レイはノアの侵入にも気づかず、青いナイトキャップをかぶり、

枕を抱きかかえてムニヤムニヤと眠りの中でした。枕を抱いて、よだれを出している姿は・・・ちよつと王子様には相応しくありません。

バルコニーで手を振っているレイの姿をノアも見ることがありますが、自分の好みの顔でないものの、それなりに格好良く、女の子にもてそうな顔だとは思いますが。事実、キヤーキヤという黄色い声援が飛んでいたのです。

そんな格好いい王子が、よだれを出して枕を抱えている姿を見たら、どんな女の子でも幻滅してしまうでしょう。ノアは声を立てずに小さく笑ってしまいました。

「まぬけ面だなあ・・・まったく。報われるかしらないけど、妹さんの気持ちも汲んでやれよ。お・う・じ・さ・ま」

ノアはピンと王子の平たいおでこをデコピンしました。金色の眉が苦痛に歪みましたが、それでも目を覚ますことはありません。ノアはまた笑いが込み上げてきました。

王子様との運命的な出会いも・・・ノアにとってはドキドキの物語にもなりません。ノアの好みは、バツカレスのように強い男性です。マツチヨガイです。シュタイナのような心配性な男も、ヤゲルのように気弱な男も興味が湧きません。レイ王子のように綺麗な顔立ちも、どちらかという苦手なのです。

ノアはそそくさと、王子の部屋をでました。出た瞬間、何やら悲鳴のような物が聞こえます。ノアは自分が見つかったと思いきくと反応してしまいました。でも、どうやら違うようです。

「ゆるしてくれえー。ゆるしてくれえー」

その声は、許しを請うているようです。声のする部屋に向かうとどうやらそれは王様の部屋のようでした。

「わかったー。お前の言うとおりに政策をするー。だから、怒鳴らんでくれー。すまんー」

その嘎れた声からして、どうやら王様が言っているようです。でも、誰かと会話しているという感じではありません。それは寝言の

ようです。なにやら、しきりに低姿勢に誰かと話しているようでした。

王様・・・このジャスト城の王様はとても気弱な人だと有名です。そりゃ、女王様が気が強すぎるせいもあるでしょうけど。ですから、まだ若年のレイ王子に、国民の多くは望みをかけています。今の王様は統治者としては及第点。もっぱら大臣の言いなりになっているのだとの噂です。

そういえば、城に入ってから違和感。気づきました？ 普通、王族の住まいともなれば、ビロードのカーテン。高価なメルシー毛皮を使った絨毯。巨大なドラゴンの剥製。天才芸術家が生み出した無数の彫刻。勇猛果敢な勇者の甲冑などなど。そういった装飾品が所狭しと並び立つものです。ですが、ジャスト城は簡素・・・というより、殺風景。申し訳ない程度のツボみたいなものが廊下にポツンとあるだけです。

経済対策として、無駄な国費を節制する新大臣の案だそうです。さすがに国宝であるエルマドルは手放していません。しかし、盗賊団としては盗み甲斐もなくありません。しかし、それだけに大臣の発言力が強いのがうかがえるわけです。

ああ。言うの忘れていましたけど、バツカレス盗賊団は義賊なんです。お金があるところしか盗りにいきません。そして、貧しい人々への施しもちゃんとやっています。税金などを納められない人々が時々、路頭から迷いに迷って、バツカレスたちのいる盗賊の森にフラフラと来るときがあります。まあ、もしかしたら最期の場所を探してのことかもしれません・・・。そんな人をバツカレスは助け、働ける人には仕事を探してやり、どうしても見つからない人に至っては、自分たちの仲間にしてしまいます。そんなこんなで、大きくなくなってしまったのがバツカレス盗賊団というわけです。

迷ってくる人の数もここ最近では増えてきました。新しい大臣になってからのことです。それも、盗賊がやれそうにない老人まで。

国だけでなく、国民にも厳しい大臣の政策には、反対の国民も多いことでしょう。でも、それもこれも王様が弱いことが原因だと揶揄されています。

特に誰かに見つかることもなく、ノアはあつという間に三階にきました。国宝だったら、やっぱり一階などには置きません。でも、あんな警備の薄い二階に・・・まあ、王族がいるのに警備が薄いつても問題なんです。そこに秘宝エルマドルがあるとも考えられません。ということ、ノアは三階に目を付けていたわけです。

三階の大広間。王族の結婚式や、まず来ることがないファルやメリンがもし仮に来たときのために応接する部屋。そんなあまり使われていない場所です。ここも経済政策で、装飾品の類はほんの少ししかありません。

魔神バルバトスの像・・・ではなくて、なんかよく解らない女神の像。んー、おそらくは女王様を象つたものなのかもしれません。それが大広間の奥にありました。ステンドグラス越しに差し込んでくる月明かりで照らされています。表情はちょっと厳しげ。気弱な王様にビシツと言うような顔です。

「怪しい・・・怪しすぎる」

ノアはその像をみてピーンとききました。側によって、ペチペチと叩いてみます。

「こういう像には何かが隠されている。アタシの盗賊の勘がそう言っている！」

自信満々にそう独りでいいます。つてか、この部屋にはこの像しか変わった物がないので・・・当然じゃないかとも思つのですが。すでにノアは勝利のポーズをとっていました。

「どういう仕掛けかな？ とりあえず、うおりゃああ！」

ノアはおもむろに像の首を掴み、グイツとひねりました。いや、これが生身の人間ならば完全に折れてます。猪突猛進の極みです。

しかしながら、このなんの考えなしの行動が功を奏することもあるものです。ガキンと首の中の部品が外れる音がして、顔の部分が

手前に折れました。そして顔がなくなつた首に、赤いスイッチが現れたのです。

「ビンゴ！」

ノアはパチンと指を鳴らします。そして、なんの躊躇いもなしにスイッチをバシンと叩きます。でもシーンとして何も起きません。

「なんだろ？ なにも・・・うわぁ、うわわわ！」

油断していたノアの周囲の空間が突如として歪みます。慌てて逃げようとしたノアを取り込み、魚眼レンズか、万華鏡を通して見たようにグニャグニャと歪みます。

シュッポン。間抜けな音をさせて、ノアの姿は跡形もなく消えてしまいました。後には何もなかったように静寂の中に像が佇むだけです・・・。

真つ暗闇。ノアはゆるゆると起き上がります。意識が消えたわけではないようです。何やら瞬時に別の場所に移動してきたようです。辺りを見回りと、頼りないガラス戸のような床の上にいるようです。あるのは暗闇だけ。このガラスの床から、その下がどれだけ深いのかもわかりません。下手をしたらもはや城内じゃないのかも知れません。盗賊を捕まえるためのトラップだったのかも・・・。そんな事を考えると、ノアの全身の血が氷ついたかのようにになりました。頭の芯から冷えて、気が遠くなります。

しかし、こんな所で倒れるわけにはいきません。とりあえず、ここがどこなのか確認して脱出しなければ。そう自分を奮い立たせて顔を上げます。

そういえば、辺りは真つ暗なのに、どうしてガラスのような床だと解つたのでしょうか。そう。どこからか光源が来ているのです。それは、ちょうどノアが顔を上げた瞬間にわかりました。

小さな光の点。脈打つように震えるそれは、今のノアにとって希望の光に見えました。ヨロヨロと危ない足取りで光の方に向かいます。

最初、小さな光だと思ったものはとてつもない大きさでした。この部屋がどれだけ広いのか皆目検討もつきませんが、ノアが十歩進む毎に、倍の大きさになっていくのです。不思議と光量は変わりません。なんだかロウソクの灯火に近く、やはりそれは明滅していません。ドツクン、ドツクン！ 光が大きくなるに連れて、なにやら音まで聞こえてきます。地を揺るがすような忙しない音です。ノアはお腹の底が揺れて、気持ちが悪くなってきました。決して心地よいものではありません。

「なんだよ・・・これ」

すぐ側までみたノアは愕然としました。大きさは小さな太陽と言っても良いくらい。もしかしたらジャスト城と同じくらいはあるかも知れません。そんなものかどうして城の中に収まるのでしょうか？ いや、それより、これはいったい何なのでしょう。不気味な赤黒い色を波立たせ、まるで生き物のようにドツクンドツクンいつてます。ノアは言い知れぬ不安に包まれました。

「・・・ネズミが。ようやく来たか」

敵意のこもった低い声がして、慌ててノアはダガーを抜いて構えます。

あの太陽みたいなもののインパクトが強く、思わず注視していたために気づきませんでした。不気味な太陽を背に、まるでそれを護ろうとせんばかりに立ちはだかる男がいることに。

浅黒い顔に、ノアより釣り上がったキツネのような細く冷たい目。そして濃い緑色のゆつたりした不思議な服を着ています。ローブのように見えますが、下は綿のパンツで動きやすそうです。いわゆるカンフーパンツですね。まあ、この世界にカンフーはないでしょうが、「誰だ!？」

ノアは猫科の猛獣のように全身の毛を逆立てました。逆手に持ったダガーの剣先を向けますが、相手はまったく怯む様子もありません。

「誰だ? 少なくとも盗人が吐く台詞ではないな。それは、こちら

「が問う事だ」

目を細め一歩進みます。ノアが武器を構えてるのに、相手は丸腰で、しかも後ろに手を組んでいるのです。有利なはずのノアの方が、なぜか気圧されていました。

「フ……。まあ、よからう。私はジャスト城の大臣オ・パイだ」

ノアは目を丸くしました。相手の顔をまじまじ見やります。

「あ、アンタが暗殺者の大臣か!？」

ノアは信じられませんでした。背は高くはあるものの、細身でバツカレスの半分も横幅はありません。暗殺者なんていうぐらい……。まあ、ノアの価値観で強い男というのは基本的にマッチョタイプだったのです。

「盗賊の小娘。昼間の賊の仲間か。まだあれだけ痛めつけられても懲りんとみえるな……。それまでにこの国宝が欲しいか？」

痛めつけられたというのはシユタイナの事でしょう。しかしノアの関心は、その後の台詞に向きました。

「国宝？ エルマドールのことか!？ どこにある!？」

そうです。自分は秘宝エルマドールを奪いに来たのです。目的を達成しなければなりません。オ・パイは、嫌らしくニヤリと口元を笑わせました。

「どこにある？ 目の前にあるではないか」

「え?」

言っている意味がわからずノアは眉を寄せました。

オ・パイは小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、両手を広げました。

「私の後ろにある『これ』だ！ これこそがジャスト城の国宝エルマドール！」

驚愕の事実が判明しました。なんと、あの不気味な太陽こそが秘宝だったのです！ ノアはあんぐりと口を開きました。

「な、な、なんだよ〜！ 親分のバカヤロー！ あんなの盗めつこないじゃないかよ!」

がつくりと肩を落とします。それは、とてもノア一人に抱えられ

る代物ではありません。それどころか、盗賊が皆が束になっても持ち上げることすら無理そうです。そんな大きさなんですから。

「徒労だな。物の真の価値が解らぬからそうなる。・・・さて、後悔はすんだか？ ネズミはやはり根から駆除せねばな」

「さつきから人のことをネズミ呼ばわりしやがって！ オツパイなんて変な名前の野郎なんかには負けないよ！」

オ・パイの額に青筋がたちます。

「・・・私はオ・パイだ。やはり低脳なネズミは力づくで廃する他ないな！」

オ・パイが襲いかかってきます。やはり素手だけあって、徒手空拳なわけです。下手な刃より鋭そうな手刀がビュンと振るわれます。ノアはそれを寸前でかわしました。

「ちやいやあ！」

休む暇も与えまいと、オ・パイは素早い動作でしやがみ込み、ノアに足払いを仕掛けます。両足ともに刈られ、すってんころり。ノアの小さなお尻がガラス床に落ちます。

「いってー！！！」

骨盤から電気が走りました。涙目に、叫びます。ですが、オ・パイは止まりません。

「ほらほら、どうした！ 次から次へと行くぞ！ しえいやあ！」

オ・パイの無数の連打。拳ありーの、二本拳ありーの、掌打、手刀、抜き手のおまけ付きでのオンパレード。尻餅をついたままのノアは、お尻をズリズリ後退させながら猛攻を受けます。ただでさえ薄着なのに、このままじゃお尻の皮が剥けてしまいます。

しかも、オ・パイは加減して遊んでるだけのようです。連打も片手でしか打っていませんし、その気になれば蹴り技をノアに叩きつけるなんて造作もないでしょう。余裕の笑みは、ノアを明らかに嘲笑っています。

ノアは悔しくて唇を噛みました。尻もちをつきながらダガーで防御する姿はなんと滑稽ではありませんか。でも熾烈な攻撃は止み

そうにありません。必死なのです。少しでも気を抜くと、パシンと顔を払われてしまいます。わざと手加減しているのです、それだけでは気絶することすらできません。

ちなみに鋭利なダガーの刃先で防御しているわけですが、素手のはずのオ・パイは物ともしません。もうで拳が金属でできていうかのようです。ガキン、ガキンと重低音が響きます。

「フン。暇つぶしにもならん。わざわざ、ここまで誘き寄せて私の相手をさせた意味がないではないか……」

オ・パイがピタリと攻撃を止めます。ノアは両手をダラリと落としました。もうヘトヘトです。お尻の皮も剥け、ジンジンとした痛みが鈍く感じられます。鼻先から血がツーと流れ落ちます。悲しくもないのに、痛みで涙が零れました。

オ・パイは、三つ編みにした黒髪をピュンと後ろに払いました。無情の瞳で、満身創痍のノアを見下します。

「……さっきの威勢はどうした？ もうお仕舞いか。面白くもない。死ね」

オ・パイが片手をあげ、人差し指だけピンと伸ばします。

「大臣という要職になってからというもの、なかなか人殺しもできん。せいぜい、良い声で泣き喚き、私の渴きを癒せ！」

目にも止まらぬスピードで、オ・パイの人差し指がノアの胸元を突きます。

「……死しこつ至突」

オ・パイがゆっくり指を離しました。その瞬間、ノアの身体がビクンと跳ね、全身の血管が浮き上がって、どす黒くなります。

「きゃ……あああー！」

血を吐きだし、全身を襲う激痛に身を寄せてノアはのたうちまわります。

オ・パイは満足そうに笑いました。

「……これが暗殺者の所以だ。地獄の苦しみの中で、己が愚かさを呪い、そして死ぬがよい」

しかしながら、その言葉も悶えるノアには聞こえていません。目を白黒させて痙攣しています。

「・・・む？」

コロンと何かがノアの胸元から転がり落ちました。胸元を突いたとき、胸当ての隙間から出てきたのです。オ・パイは片眉を上げ、それを拾おうとしました。

その瞬間、小さな玉状の物から、ブシューと煙が勢い良く吹き出します。ヤグルがノアに渡したあれです。そう、あれは煙玉だったのです。

「煙幕とは小癩な！」

オ・パイは煙を吸い込まぬように、口元を抑えながら身を庇います。

ようやく煙が収まった時、オ・パイは目を見開きました。なんとさつきまで目の前にいたノアがいないのです。

「死至突を受けてなお動くか・・・。フン。ネズミらしくしぶといな。まあ、長くはないだろうが」

オ・パイは秘宝エルマドールをチラツと見てから、ザツと踵を返して立ち去りました・・・。

ジャスト城と盗賊の森を繋ぐエルジメン橋。ノアは身体を引きずりながらそこまでやってきていました。自分でも、どこをどうやってここまで逃げてきたのか解らないのです。気づいたら、この橋の欄干を辿って歩いていました。

動悸が早く、時おり信じられない激痛に襲われます。しかし、生きたいという気持ちでノアを動かしていました。

「・・・は、ハハハ。アタシ、死ぬのかな」

橋の真ん中で、ついに動けなくなつて膝をつきました。もう一歩も進めそうにありません。ここまで逃げれたのも奇跡と言ってもおかしくないくらいなのです。

あと少して、皆が待つアジトが見えてくるというのに。ノアは朦

朦とする意識に、バツカレスやシユタイナ、ヤグルの顔が浮かびます。心細くなり、涙ぐんでしまいます。

川では、雲に隠れて幾分か弱くなった月光を浴び、鯉に似た魚がノアを見上げて口をパクパクとさせました。まるで、死に行くノアを馬鹿にしているみたいです。

「・・・チキシヨ。まだアタシは死にたくないよ」

「これはヒドイね」

ふいにノアの背に呑気な声がかかりました。誰だろう？ 振り向きたくとも身体がいうことをききません。

「死至突つて技を受けているね。このままじゃ死んじゃうねえ」

あつけらかなと言うその口調は、まるで人事で、ぜんぜん深刻そうではありません。

「治療魔法は専門外だけど。まあ、応急手当なら」

ノアの頭にポンと手があてられます。痛みに朦朧としてる中、その手の温かい感触がとて心地よく感じられました。

その手が、ブーツと温かさを増します。聖なる光がノアの身体を駆け巡ります。ショートカットにした赤い髪一本一本から、指の先足の末端に至るまで。どす黒くなった血管が、シューツと浄化され正常に戻りました。

痛みに耐えていたノアは、フツと気が弛み、その場に倒れこみます。その時、仰向けになったノアの虚ろな瞳に、その声の主の姿が映りました。

ボサボサの茶髪に、ド近眼の分厚い丸眼鏡。生え放題の不精髭。

ボロボロの作業服に大きなりゅっくさっく。顔は場にそぐわないほど朗らかで、ニコニコした笑みを浮かべています。

「もう大丈夫だよ。死んで良い命なんて一つもないんだから・・・」
そんな男の言葉は、意識を失ったノアには辛うじて聞こえた程度です。

そして、言い知れぬ安堵にホツとし、ノアはゆっくりと眠りの世界に落ちていきました・・・。

第一章 女盗賊ノアと秘宝エルマドール（後書き）

十年以上昔に、かつて私がやっていたアマチュアRPG作成チーム『ターリムプロダクション』のゲーム内容を新しく小説にリメイクして直したものです。

私の不手際でゲームデータなくしてしまいました（汗）。十代の記憶を辿りながら、書き起こして残していければなあ、というほぼ自己満足の作品ですね。もしゲームプレイしてくれた人に見ていただけたらとても嬉しいですね

もし、もし稀有な方でゲームデータをお持ちの方いましたら、ぜひ御一報いただければ！

第二章 記憶をなくしたメリンの少女メルメル

蝋燭が何本も並んだお手製の無影灯をグツと寄せます。傷を確認し、銀色のバッドからピンセットを掴みました。ガチャツという重厚な音が響き渡ります。消毒液に浸したガーゼを掴み、丁寧に傷口を消毒していきます。

ちょっと大きい裂傷には、針と糸を取りして手早く縫いつけてしまいます。慣れた手つきで、シウルシウルとあつという間に塞いでいきます。

片目にはめた拡大鏡を外し、少し垂れた感じの目が油断無く全身を点検します。治療が全て終えたことを確認すると、白衣の胸ポケットから煙草を取り出し口にくわえます。照明の蝋燭を利用し、火を付けました。

「傷口は浅いが……。女子供にやる仕打ちじゃねえな」

フーツと紫煙を吹き出し、ガタツと椅子から立って、窓の側でシヤッターを開きました。朝靄の奥から、朝日の光が差し込みます。

その光が治療を受けていた人物……。ノアの顔に当たりました。

「……う、ここは」

ノアは眩しそうに目を開きます。なぜか自分はダイニングテーブルの上に寝かされています。ここはどこだろうと、ノアは頭を少し振りながら上体を起こしました。

「起きたか。ま、ほとんど心配はねえだろうが、もう少し休んでおけ」

くるりと振り返り、窓辺に立つその男がそう言いました。その顔を見て、ノアは驚きに目を見開きます。

「バーボンおじさん！？ なんで？」

「おじさん……。つてのはやめてくれよ。これでも、まだ二十五だぜ」

白髪まじりの髪をガシガシと掻き、バーボンは苦笑しました。

右目に眼帯、左腕には鉤状の義手。深い目の下のシワに、不健康そうなやせ細った身体。ヨレヨレの白衣を着たバーボンは、ノアがおじさんと言ってもおかしくないぐらいです。とても、二十五歳の若さには見えません。

「あ……アタシ、どうしてここに？ 傷を……治してくれたの？」

傷口の包帯を見て、バーボンが治してくれたのだとノアは気づきました。

バーボンはジャスト城下町の外れに住む町医者です。バツカレスとも古い知り合いで、盗賊のようなならず者とも縁がある顔の広い人物です。ノアとも、もちろん面識がありました。昔から怪我をしたり病気になったりする度に、バツカレスに担がれてこのバーボンの元に来ていたのです。

「夜中に駆け込んでくる患者はごまんといるが、さすがに玄関前で倒れているのは初めてだったぜ。しかも、よく知った顔がな」

「そんな……アタシ、だって、エルジメン橋にいたのに」

ようやくノアの頭が回り始めました。ジャスト城に秘宝エルマドールを盗みに入り、大臣オ・パイにやられて、命からがらエルジメン橋にまで逃げ延びたのです。

しかし、バーボン医師が治療を行っている自宅兼診療所は、ジャスト城下町の北側です。盗賊の森やエルジメン橋があるのは南方なので、まるで正反対の方向なのです。ノアが自力でバーボン診療所に来てきたとは考えにくくことでした。

「……また危ないことに首をつっこんだんだろうが」

バーボンは溜息をつきながら、ダイニングチェアにドツカと乱暴に座りました。ノアがダイニングテーブルに寝ているので、まるでこのまま食事でもしそうな感じですよ。

「今回は本当にやばいところだったぜ。死至突……生命の根幹を打ち砕いてしまう最悪の殺人技だ。だが、俺の前に治療したヤツがいるな。それも魔法の類だ。そうじゃなきゃ、俺でも治してやれん」

バーボンが、果物のバスケットに入っていたカルテを取り出し、ペラツとめくって言いました。

診察室で煙草を吸ったり、ダイニングテーブルを寝台にしたりするぐらいにいい加減なところが目立つわけですが、患者の記録だけはきつちりとついているのです。

「・・・魔法」

ノアは首を少し傾げました。そして、思い出します。這々の体で逃げてきたノアが、エルジメン橋で出会った男のことを。

ボサボサの茶髪に、丸縁の眼鏡の奥から覗く優しい瞳。乗せられた温かい手。そして、放つ癒しの光によって苦痛を取り除いてくれたこと。

その男のことを思い出した瞬間、ノアの顔から火がでるんじゃないかってほどボツと赤くなりました。なぜだか解りませんが、胸がキョツとして、ドキドキと鼓動が早くなります。

「な、なんだ？ まだどこか痛むのか？」

バーボンがノアの顔を見てギョツとしました。熱でもあるのではないかと、ツルツルしたノアのおでこに手を当てます。ですが、ノアはブンブンと首を横に振りました。

「ありえない！」

「え？」

ノアが叫び、バーボンが目を瞬きます。

ノアは自分自身が信じられませんでした。あの眼鏡の男は、ノアの好みとは真反対です。マツチヨでもないし、強そうにも見えません。ましてや、たぶん四十歳は越えてる中年です。でも、なぜか、あの自分を見る優しい瞳がなぜか忘れられません。ポンと乗せられた手の温かさなど、今でもハッキリ思い出せるぐらいです。いくら、瀕死の状態を助けられたからといって、そんなすぐに好意を抱くものでしょうか。ノアは自分の感情が理解できずにただ首を横に振りました。

そんなノアの心情なんて知る由もないバーボンは、訳がわからな

いと言わんばかりに両手を上げました。

「魔法！ そう、ここに来る前に魔法で治療をしてくれた人がいたんだ！ きつと、その人がアタシをここにまで連れてきてくれたんだよ！」

まくしたてるかのように言うノアに、バーボンは天井をにらんで少し考える素振りをします。

「・・・死至突を治す魔法つてのは俺も知らない。だから、お前を治したヤツにすごく興味があつたんだが。魔法に長けるメリンにだつて、そんな魔法を使えるヤツなんていないと思うぜ」

バーボンはかつて天才的な医学の専門知識を認められ、ファルやメリンにも認められた数少ないデムであつたのです。そのためジャスト城周辺しか知らないノアなんかよりも、遙かに多くの人脈を持つているのです。医療関係だけだつたら、メリンの魔法使いの知り合いもかなりいます。そんなバーボンをして、死至突を治せる人を知らないのです。

「あれは誰なんだろう・・・。ここらじゃ、見ない顔だつたよ」

「どんなヤツだつたんだ？」

「んー、なんか、パツとしない、冴えない感じ」

ノアは思つたままを言いました。確かにそのまんまですが、第一印象と聞かれたらそんな感じでしか答えようがありません。ノアの言葉には、なんでこんな印象の相手にドキドキするんだろうという自分への疑問も含まれていました。

「なんだそりゃ・・・。雰囲気じゃわかんねえよ。その外見的特徴とか、何か持ってたとかないのか？」

理詰めで考える医者らしく、バーボンは論理的な意見を求めます。ノアは、うーんと頭を捻りました。あの時の状況を深く思いだします。

「丸い眼鏡をかけてて、大きなリュックサックをもつてて・・・なんだか、探検家みたいだった。服装も登山服みたいで」

「リュック？ 登山服？・・・旅人か何かか？ 他には？」

決め手に欠けると言わんばかりに、バーボンは眉を寄せながら、ちよつと苛立たしそくにテーブルの端を指でタンタンと叩きました。ノアは口をモゴモゴと動かして、さらに思い出します。

「そんなこと言われたって・・・アタシ、あるとき死にそうなくらい辛かったし。あ！あと、右手！右手が何か・・・変だった！爪の先から、刺青・・・みたい模様してた！」

ノアがようやく思い出して言うと、バーボンの目が大きく開きました。

「右手？刺青・・・まさか、聖剣エイスト？いや、そんな。だが、リュックを背負った登山服姿・・・」

バーボンがアゴに手を当てて思案します。ノアは不満そうに頬を膨らませました。

「おじさん！？なんだよ、一人で考えてなくてアタシにも教えてよ！誰なの！？知ってるの？」

ノアがダイニングテーブルから降り、バーボンの腕を掴んで揺すぶりました。

「あ、ああ・・・。だが、にわかには信じがたいが。だが、お前を治した魔法。仮に聖魔法だったら使い手を一人だけ知っている」

「誰？教えてー！」

バーボンは言ってもいいものかと少し逡巡しましたが、ノアの必死な目を見て、ついには口を開きました。

「二十年前、魔神バルバトスを封じた英雄スタッドだ」

ピタツと、ノアの動きが止まります。

「え？えー！えー！あ、あの人、英雄？あの、英雄スタッド！？」

ノアは悲鳴に近い感じで叫びました。バーボンは咄嗟に自分の耳を抑えます。しかし、間に合わず、ノアの甲高い声のせいで耳の奥がキーンと響きました。

いくら自分が生まれる前の話とはいえ、この世界を救ったスタッドのことは、世間知らずのノアでも知っています。でも、絵本とか

の物語にでてくるような人物です。普通の人なら、いくら同じ時代に生きているとはいえ、そんな超有名人が自分と関わりを持つなんてまず考えられません。そう思っていたのは、ノアも例外ではありませんでした。

まあ、その英雄が冴えない容姿をしていたので、そのギャップに驚いたつてもあるんですが。ほら、絵画とかだと、有名人ってのはどうしても美形になるじゃないですか。そうじゃなくても、お話できかされる英雄ともなれば、妄想が後押しして、ちよつとその主人公を格好良くしてしまうものです。ましてや二十年前といえば、スタッドも二十代そこそこです。どうしても、物語の主人公って、その活躍した時の場面だけ語るもんだから、ずっと歳をとることなんてないって思っちゃうんですよね。そんなことあるわけないんですけれども……。

「ああ。可能性としては……ある。二十年前に世界を救った後からほとんど誰にも見られていないけどな。俺が昔、ファルの首都レムジンにいたときに、確かヤツの論文で『退化神殿』について書いてあったものがあつた。遺跡調査で訪れているとすれば、この辺をうろついてもおかしくはない」

「たいか……しんでん？」

「このジャスト城下街から、東に抜けた『退化の大森林』のどこかにあるって噂の遺跡だ。考古学者として、遺跡には目がないって話だからな。それに、その辺は俺たちファル、メリン、デムの三種族以外の『第四の種族がいる』ってようなスタッドの記述もあつた。進化した種族じゃなく、誰にも相手されなくなった『退化した種族』らしいが……本当にいるのなら、スタッドがそいつらと共にしているのかもな」

「バーボンがそう言うのに、ノアの目がキラキラと輝きました。バーボンはしかめっ面になります。」

「……まさかとは思うが」

「うん！ アタシ、その退化神殿ってところに行ってみる！」

バーボンは自分の顔を抑えました。そして首を横に振ります。

「おいおい。何を考えている？ 退化の大森林は、迷いの森だ。それも、初めてはいえるヤツは間違ひなく迷う。それに、魔神バルバトスが封印されたとはいえ、配下の魔物どもはまだそういう未開の地には残っているんだ。危険すぎる場所だぜ」

「それでも、アタシは・・・行かなきゃ。スタッドに会わなきゃいけない！」

ノアは、スタッドに会って自分のドキドキの理由を確かめなければならぬと思っていました。もちろん、そんなことは恥ずかしくないで、口が裂けても言えませんが。

「なぜだ？ なんのために会う？」

バーボンに冷静に問われ、ノアは言葉につまります。それでも、ノアはグツと拳を握りました。

「お礼を、お礼を言わなきゃ・・・いけない！ アタシ、まだ、なにも言っていない！！」

我ながら、言い訳がましい理由だと思いました、バーボンは特になにもいいませんでした。ただ、小さく溜息をつきます。

「お礼なら・・・治療してやった俺にも言ってもらいたいもんだが、バーボンが皮肉っぽく言うのに、ノアはバーボンにもまだお礼をいっていないことに今気づきました。」

「あ、ご、ごめん。バーボンおじさん、あ、ありがと・・・」

ノアがしどろもどろと礼を言うのに、バーボンはフツと面白そうに笑いました。

そして、急にバーボンは真面目な顔つきをします。

「・・・ノア。正直、今日お前がズタボロで倒れているのを見かけて、俺はハラワタの底が煮えくり返る思いをした。バツカレスの馬鹿が何を考えているかはしらねえが、俺はお前の幸せを願っている。危ないことはしてほしくはねえんだ」

「・・・うん」

ノアはしんみりとして、コクリと頷きました。バーボンがこうい

う風に言うということは、本当に心配してのことだからです。

バーボンはノアが小さい頃から、お世話になってる人です。バツカレスが無責任なところがある分・・・まあ、酔っぱらって城に一人で盗みに入れていうぐらいなんですからすでにお分かりでしょうが・・・このバーボン医師がノアの兄的存在、保護者のような役割を果たしていた部分も大きいのです。バーボンにとっても、ノアに対してはただの患者ではない以上の思いがあるのです。

「本当は盗賊なんて世間に顔向けできない稼業やめて、俺のところ
で助手としてでも働けば・・・」

「バーボンおじさん！」

ノアが言葉を遮ったので、バーボンは少しだけ苦い顔をします。

「・・・昔の思い忘れちゃったの？ 『人は定規じゃ計れない』。
どんな仕事をしようと、アタシはアタシだよ？ ノアだよ」

ノアが言うのに、バーボンはガシガシと頭を掻きました。そして、
また煙草を取り出して火をつけます。

「昔の俺の台詞なんて・・・出すなよ。チツ。だが、そうだな。ノ
アの仕事に俺が口だしていいはずねえな。悪い、今は忘れてくれ」

ノアは、バーボンの眼帯と義手を悲しげに見ました。バーボンは
気まずそうに、眼帯の方の目を、ノアからそらします。

「アタシは・・・大丈夫だって。また怪我したら、おじさんが治し
てくれるし」

ノアがガッツポーズをとると、バーボンは満更でもなさそうにか
すかに笑います。

「つたく、バツカレスもお前も勝手に言いやがる・・・ま、い
ずれにせよ、俺が治せないような傷なんかは負ってくるんじゃないぞ」

そうやってバーボンは立ち上がり、書棚から四つに折りたたんだ
古い紙をとって持ってきます。そしてそれをノアに手渡しました。

「これは・・・？」

「退化の大森林の地図だ。ま、地元の露店で買ったやつだからな。
正確かどうかは知らないが」

「あ、ありがと！」

「どうせ、言ってもきかないだろうからな。だが、決して無理はするんじゃないぞ」

「うん！」

ノアは心からバーボンに感謝し、大きく頷きました……。

心配してるであろうシュタイナとヤグルヤ、酔いが醒めて軽率な事を言ってしまったと後悔してるバツカレスに、今までの報告をしようかと悩んだノアですが、そここうしてる間にスタッドに追いつけなくなつては事です。報告は後回しにし、すぐに退化の大森林に向かいます。

鬱蒼としげる木々。もう昼近くだというのに、太陽の光はわずかな木漏れ日が申し訳ない程度に僅かに地を照らしています。

ひねくれたようにグニヤグニヤと曲がって生えている幹や枝。足を容赦なく絡みとるように群生してる蔦、砕けた岩の上にはびっしりと苔。油断してるとすぐに転びそうになります。加えてどこまで行っても同じ風景が延々と続きます。迷いの森といわれるのも納得がいきます。ノアのお腹がグウーと一際大きな音をたてました。ちよつと恥ずかしかったですが周りには誰もいません。リスがキキキと鳴きましたが、まさかノアを笑ったわけでもないでしょう。

「お腹すいた〜。チエ、失敗したな。バーボンおじさんとこで何か食べさせてもらえば良かったな」

ノアは立ち止まって頭をガシガシかきます。

しかし、花柄のエプロン姿のバーボンが、菜箸でなくピンセットを使い、怪しげなピーカーから紫色の液体の調味料を、そして、これまた形容しがたいモザイク必須の不気味な肉にかけてる姿を思い浮かべ、ノアの全身に鳥肌がたちました。

そういえば、以前にバーボンの手料理を食べて、ノアは最悪最低の腹痛をおこしたのです。独身で医学以外まったく無知の男の手料理など、凶器以外のなものでもありません。そんな失礼なことを

ノアが思ったせいで、いまごろ、バーボン先生は大きなクシャミをしているかもしれせん。

「なんか食べるものないかな？」

ノアは上を見上げます。果物でも実つてればこれ幸いなのですが、こんなところに・・・あら、あつた。

ちよつと開けた場所で、一本だけ大きな木があります。他の木は葉っぱだらけなのに、それだけは如何にも美味しそうなピンク色の実がたわわに実っていました。まさに食べてみるって言わんばかりです。

普通は怪しいと思うものですが、そこはノアのことです。ましてや今は空腹状態。ただてさえ少ない理性が働きません。よだれを垂らさんばかりの、可愛い女の子にはちよつとほど遠い、そんな危ない顔つきで、いつもより素早い動作で走りました。どれくらい早いかといえば、かの有名缶詰キャットフードを見た瞬間の猫なみです。まっしぐらなわけです。

尺取り虫の動きのように跳ね上がり、東京タワーに昇る巨大サルのように豪快によじ登り、あっという間にその木を制覇します。

そして念願の木の実をもぎとりました。思ったより大きく、バスケットボールぐらいはあるんですが。それを両手に掴んでかぶりつこうとしました。

その時です。だいたいこのタイミングなんですよね。絹を引き裂くような女性の悲鳴が木霊しました。

ノアはもっていた木の実を落とす、目を丸くしました。今の声は切羽詰まった時の人間の悲鳴。差し迫った危機をつけてるのです。サツと腰のダガーを抜きます。

高いところにいるのが幸いしました。ノアは眉のところに手を当てて遠見を試みます。

いました。見つけました。ピンク色の長い髪をした少女。こんな森深くには不釣り合いなヒラヒラしたドレスを着ています。逃げようとする少女を追いかけるのは、木・・・？ はい。間違い

ない木です。根っこを足のようにして、枝を手のようにワサワサ動かし、鳥がつついて空けたような空洞の目を持つ木です。ノアが初めて目にする魔物です！ 名前は…ほくねんじん 朴念仁とでも呼んでおきましょう！

ノアは身軽に木から飛び降り、ピンクの髪の少女めがけて走りましました。

「まてまてまてーい！」

少女と朴念人の間に割って入り、勢い余って、片足で三歩ほどトントントンと、最後に前に手がでていたので、それはまるで歌舞伎役者の見栄きりのようです。顔をグルリと回して睨みをきかせました。完璧です。朴念仁も怯えて…というよりは呆れてたのかもしれないが、ピタリと動きを止めました。

「魔物にとつちや、人間を襲うのは自分かもしれないけど、この義賊ノア様の目に入ったとあっちゃあ、見捨てることはできないね！」言葉が通じのかどうかは解りませんが、朴念仁は自分に邪魔をされたことだけは解ったようのでガサガサと頭を振ります。

「あ、あなたは…」

「いいから逃げなよ。こいつはアタシに任せといて！」

ノアは振り向きもせずと言います。

朴念仁が腕…のように見える四本の枝を広げました。ノアに掴みかかるうとします。

「へ！ トロいよ！」

ノアはわずかに身を屈めたかと思うと、シユタタと駆け出し、襲いかかる四本の腕を切り落としてしまいました。高性能高枝鋏でもこうはいきません！

朴念仁は、無くなった自分の手を物悲しそうに見やりました。

「ウオオオオオオオローン！！」

口らしき丸っこい穴の奥から、とんでもない悲鳴を上げます。自分の頭上に巣を作っていた鳥が驚いて、バサバサと飛び去りました。「うわ！ なんて、声を出すんだ!？」

ノアが迷惑そうな顔で、朴念仁の胴体を切りつけます。

「ウオオオオオオローン！！！！！！」

さらに大きい悲鳴をあげ、ノアはたまらずに耳を抑えました。

「ダメ！ その子は傷つけると仲間を・・・」

ピンク色の髪の少女が言うが早いのか、ドドドドツという地響きと共に朴念仁の群れが姿を現しました。仲間の悲鳴をききつけ集まってきたのです。数は十・・・いや、二十四はいるでしょうか！

「つとつと！ こりゃ、多勢に無勢だよッ!?」

振り回される腕をかわし、ノアは間合いを取りつつ、一体一体ずつ相手をしていきます。ですが、ノアがダガーを振るたびに・・・

「ウオオオオオオローン！」

「ウオオオオオオオオオオローン！！！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオローン！！！！！！」

朴念仁は次から次へと断末魔をあげ、その度に敵の数が増えていきます。ノアはまだ戦えましたが、なにせ朴念仁の悲鳴のすごいこと。頭がガンガンしてきて、さすがに攻撃の手も鈍くなっていきます。

「つつ、このままじゃ・・・」

朴念仁の群れに押しつぶされ、さすがのノアも目を白黒させました。

「『火の精霊よ、赤き粉を盛大に散らせて、篝火を猛る風で靡かせよ・・・ファイヤーストーム！！』」

響き渡る不思議な呪文が聞こえたかと思うと、シャーッと赤い軌跡が朴念仁の足下に描かれました。それが魔法陣を描ききると、猛烈な突風が吹き荒れます。チツとどこかで種火がつき、それに引火しました。まさに炎の竜巻です。炎の風が靡き、朴念仁を飲み込んでいきます。悲鳴をあげようにも、炎が酸素を燃やしてしまうので声は響きません。朴念仁は哀れにもグズグズと無言のまま崩れていきます。炭へと化していきます。

「うわ、うわわわッ！ あっちー！ あっちやちやちや！！」

朴念仁と共に炎に巻き込まれたノアは飛び上がりました。このままでは一緒に灰になってしまいます。

「あっちゃっちゃちゃ！・・・あ、あれ？」

飛び上がっていたノアですが、不思議なことが起きているのに、ようやく気づきます。周りの朴念仁は次々と崩れていくのに、ノアの身体は燃えないのです。確かに炎に包まれているのですが、熱くも痛くもないのです。そういえば、周囲が燃えて空気が薄くなっているはずなのに、呼吸も楽にできます。

「な、なんだ？ これ・・・」

「魔法です。対象をこの子たちにしましたから、私たちはダメージを負うことはありません。安心してください」

後ろから少女にそう言われ、ノアは初めてそこで振り向きましました。ピンクの髪とまったく同じ色の瞳。とっても可愛い、とっても愛らしいとはこういうことを言うのでしょうか。黙っただけでも保護欲をそそられ、何がなんでも守らずにはいられない存在。そう形容するに相応しい少女でした。

パッチリと開いた目に長い睫。ほのかに朱を帯びた頬、そして食べ頃のサクランボのように艶やかな魅力的な唇。そんな娘が、これまた絵本のお姫様のような、フリルの沢山ついた可愛いドレスを着ているのです。可愛いに可愛いの乗法で、ノアが男の子だったら、そりゃもう一目でノックダウンしてしまっただことでしょう。あまり自分が女の子であるという自覚が少ないノアも、何かよくわかりませんが完全に負けたような気がしました。

ですが、ノアが一番に目がいったのはそこではありません。ピンク色のロングヘアの上に、二本の白い耳。ピョンピョンと楕円形のそれが生えているのです。音のする方向にわずかにピクピクと動いていることから、それは作り物の類ではないのです。そう、この長い耳は、ウサギが進化したメリンの特徴なのです。

「・・・メリンの女の子？」

ノアがあんぐりと口を開けます。ノアだって、遠目にはメリンや

ファルを見たことがあります。ですが、メリンやファルは知能の低く野蛮なエテ公ことデムを嫌っている節があります。それゆえ、側で見たり、ましてや話すような機会なんてまずありません。一般人にしてもそうなので、ましてや盗賊なんて日の当たらない仕事をしているノアたちならばなおさらです。

そのメリンの少女は、ノアに向かってニコリと笑いました。ですが、すぐに目を伏せ、悲しそうに眉を寄せます。それを見て、なぜかノアの胸は少し痛みました。メリンの少女の目は、燃え尽きた朴念仁たちに向けられています。

「・・・ごめんなさい。私が、あなたの足を間違つて踏まなければ、襲つてくることはなかったのに。熱かつたでしょう。でも、こうするしか他に私にはなかったのです。本当にごめんなさい」

メリンの少女はポロツと涙を零しました。そして、積み重なった炭をわずかにどかします。すると、その下に小さな新芽がありました。よくみると、朴念仁がいた場所に、それぞれ小さな新芽が芽生えているのです。これは朴念仁たちの数の分だけあるんじゃないでしょうか。

「また大きくなるには時間がかかってしまいますね。でも、次に大きくなったときは・・・どうか魔物になりませんように。大きな、大きな立派な木に成長して下さいね」

メリンの少女は跪いて、両手を組んでそうお祈りをします。

ハンカチで目の端を拭い、メリンの少女はゆっくりと立ち上がります。そして、ノアに向かって再びニコリと笑いました。

「危ないところをありがとうございました。申し遅れましたね。私はメルメルといます」

そう言つて、メルメルは深くお辞儀をします。それだけで、優しく礼儀正しい子だと解ります。

「あ、アタシは・・・ノア。えっと、ジャスト城の外れの森に住んでいる盗賊なんだけど」

結果的に助けられたのは自分なので、ノアは複雑な気持ちでいま

した。気まずそうに鼻の下を擦ります。

「じゃすと城？　とうぞく・・・？」

たどたどしく復唱し、メルメルはちよつと小首を傾げます。よく見ると、唇はちよつと三ツ口になっているみたいです。上唇の真ん中が少し切れていました。

「え？　知らない？　アンタ、メリンなんだろ？」

ノアは不思議に思つて尋ねます。

メリンは、盗賊の森を越えた先に住んでいます。もしこの退化の大森林に来たとなれば、どのルートを利用したにしてもジャスト城は通過せねば来れません。

「えつと・・・私、少し前からここに住んでいて」

「え！？　ここに！？」

ノアはますます驚いて目を丸くしました。こんな危険な森にいただけでも不思議なのに、住んでいるというのだから余計に驚きです。

「あ、あの・・・その、私、ちょうど一年ほど前からの記憶が・・・なくて。辛うじて覚えているのは、名前だけなので」

メルメルはしょぼんとした様子で言います。二つの白い耳が、力無くパタンと前に倒れました。

「え、記憶が・・・ない？　記憶喪失なの？」

「はい。一年前、どうしてかこの森に倒れていまして・・・。そこを『ボーズ星人』さんたちに助けてもらったのです」

「ボーズ星人？　な、なにそれ？」

怪しげな名前に、ノアは訝しげな顔をします。

「ここに古くから住んでいる・・・原住人さんです。とても優しい人たちで、こんな私も受け入れて一緒に住まわせてくれているのです。今日は木の実をとるお使いにでて・・・道に迷ってしまつて」

ノアはフーンと顎をなでました。バーボンが言っていた第四の種族というのは、そのボーズ星人と呼ばれる怪しげな原住民かもしれないと思つたのです。

「うーん・・・。よし、なら、アタシと一緒に家を探してあげるよ。」

正直、アタシも道に迷っちゃってさあ」

「本当ですか!？」

メルメルは嬉しそうに手を叩きます。

「ああ。そのポーズ星人つてのに聞けば、もしかしたら退化神殿の場所もわかるかも知れないしね」

ノアの言葉に、今度はメルメルが目を大きくしました。

「退化神殿? あ。そこです! 私が住んでいる場所は!」

「えーッ!? な、なら・・・スタッドって知っている!? アタシ、その人を捜しにきたんだけど!」

ノアはガシツとメルメルの肩を掴みました。驚いて、メルメルの耳がピヨンと立ち上がります。

「え? スタッド・・・さん? 私は・・・知りませんけれど。そういうえば、長老様だったら・・・何か知っておられるかも。お客様がどうとか仰っていたので。私、そのためのお持てなしの木の実をさがしていたので」

「おお! おお! いいね! なんか、スタッドに近くなってきた!」

ノアはテンションがあがってきて、ガツポーズを取ります。

「ああ、でも、良かった・・・。ノアさんのような人に出会えて良かった。私、これからどうしていいかと心細かったので」

メルメルは胸に手をあてて、心底ホツとしたような顔をします。

「ノアでいいよ! 歳だっておなじぐらいでしょ?」

丁寧なメルメルに、ちよつとノアは歯がゆさを感じていたので。もつとフレンドリーでいいよと、ノアはニカツと笑います。

「え? 呼び捨てでいいんですか・・・? たぶん、私は十六歳だと思えますが」

「じゃあ、同い年じゃん。じゃあ、アタシもあんたのことメルって呼ぶからさ! アタシのこともノアって呼び捨てで呼んでよ」

メルメルは嬉しそうに、ニッコリと微笑みました。同年代の、しかも女の子の友人なんていなかったのですから当然です。

「はい！ ノア、どうか、仲良くしてくださいね　よろしくお願
いします！」

「うん！ メル。よろしくね」

こうして、メルは思いがけず、ノアの旅の仲間となりました。

「あ、そういえば・・・木の実さがしていたって言ったよね？ ア
タシ、あそこで見かけたんだ！」

ハツと思いだし、ノアは猛ダツシュでさっきのピンク色のバスケ
ットボールみたいな果実をもってきました。

「ほら！ メル！ おもてなしだったら、これぐらい立派なのが
いでしょ！」

ノアはニカツと笑い、それにかぶりつこうとしました。そうい
え、お腹が空いていたのです。

「あ・・・。ノア。それ、朴念仁さんの毒の実・・・ですよ。食
べたら、三秒であの世です」

メルが蒼い顔をして言うのに、ノアはそのままの姿勢で硬直して、
ポロツと木の実を落としました・・・。

第二章 記憶をなくしたメリンの少女メルメル（後書き）

バーボンとメルメルの登場です。サブタイトルをメルメルの方にしたのは、やっぱり男の名前より受けがいいだろうと狙ったことですw 申し訳ない、バーボン先生！ ってことで。好きなキャラなんですけどねえ。ま、ちよい役ではないので。次回たぶん活躍してくれることと思います。

ゲームでは、朴念仁はただの雑魚キャラです。我ながらネーミングセンスが気に入っていたので派手に動いてもらいました。でも、実際はメルメルのファイヤーストームで一発なんですけどねw そこはゲームも小説も同じです。

第三章 七人のボーイズ星人

ノアとメルが揃えば鬼に金棒でした。朴念仁以外の魔物にも出くわしまして、下着だけを身につけた変態バンパイアや、その手下の吸血コウモリ。捨てられたシートに怨念が宿ったゴーストなどが出てきましたが、いずれもノアが一撃を加えるか、ノアがフアイヤーストームを放つと蜘蛛の子を散らすように逃げていきました。迷うような森も、一人では絶望に膝を抱えていたことですが、二人なら鼻歌まじりに楽々踏破してしまいます。

「あら、ノア。ここ、さつきも通った道ですよ」

「ホントだ。じゃ、もう一度ダガーで印つけちゃえ」
なんて、あっけらかんとした様子で、アハハ、ウフフと笑い、また木に手近な幹にドカツと目印をつける始末です。

そんな機嫌良く進んでいた二人ですが、メルの耳がピクツと跳ねて何かを捉えました。慌ててノアの肩を叩きます。

「なに？ メル？」

「しっ！ 喋らないで・・・気づかれます」

メルは真面目な顔つきで言います。ノアもキュツと口を引き締めて頷きました。そして、メルが指さす方向を見ます。

水辺に座った毛むくじゃらの一頭の魔物。ゴリラの風貌をしていて、口がワニのように裂けています。そこからは凶悪な牙がのぞいていました。ガリガリと木の皮を食べています。座っている側には、巨大な棍棒が置かれていました。かなり強そうに見えます。

「な、なにあれ？ あれも魔物なの？」

「ええ。メルシーという子です。あの子には、私の魔法も効きにくいんです。それにちよつと乱暴者で、人間の姿をみると必ず追ってきます。ここは見つかからないように行きましょう」

ノアは素直にコクリと頷きます。無駄な争いはしないに越したことはありません。あんな棍棒で殴られてはたまりませんし。

抜き足差し足忍び足で、ソロソロと二人は音をたてないようにその場を過ぎ去ります。しかし、ノアの鼻腔に何かがよぎりました。

牛乳を拭いてロッカーの中に放置した雑巾。バツカレスの半年間はきつぱなしの湿った靴下。納豆とクサヤと腐った卵をかきまぜたような臭いともいいまじょうか。もう臭いというレベルを越えて、痛い・・・いや、痛苦しいのです!!

「くっさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ノアは涙と鼻水を同時に放出しながら声をあげました。いや、あげざるをえないような強烈な異臭だったのですから仕方ありません！

「の、ノア!？」

メルが慌てます。耳がピーンと立ちました。

つて、メルがなぜこの異臭に反応しなかったかといいますが・・・デムに比べてメルリンはかなり嗅覚が良いのです。良すぎるがあまり、あまりに強烈な異臭には麻痺して感じとれなかったという恐るべき理由があるのです。

もちろん、そのノアの悲鳴にメルシーが気が付かないわけがありませんでした。ムクリと起きあがり、ガバツと牙をむき出しにします。

「ウオウオウオウオウオツ!!」

威嚇の声を上げ、胸をボンボコ叩きならしました。それから、右手で棍棒を掴み、振り回します。左手にはツボのようなものを掲げていました。

「や、やばい! 逃げよう!!」

「え、ええ!!」

ノアはメルの手をとってかけ出します。しかし、メルシーはその巨大な体格にしては俊敏でした。人間のようないく本足で走ってくるのです。

「ぐえー! ください! ひどい! なんじゃこりゃああ!!」

ノアは逃げながら、涙をこぼしつつ、鼻水を垂らしつつ叫びまし

た。なんか、メルシーが近づいてくるにしたがって異臭まで寄ってくるのです。異臭の原因は間違いなくメルシーでした。

「臭い？ えつと・・・私はわからないのですが。もしかして、発酵したメルシーの乳の匂いなんですか？」

メルはゼエゼエいいながら、そう言います。

「メルシーの乳!？」

「ええ。あ、あれです！メルシーならば必ず自分の絞り出した乳をもってるんです！」

メルはメルシーの持つツボを指さしました。ノアがそっちの方をチラリと見ます。

「うげええええー！ー！ー！」

間違いありません。あれからです。あれから強烈な異臭が放たれているのです。あのツボの口が、ノアたちの逃げている方向に向くたび・・・まあ、つまりはメルシーが走るときの動作で左手を下げたとき、その巨烈な悪臭がプー！ー！ーと香ってくるのです！

「あ、あんな状態のヤツなんて戦えないよッ！ー！」

敵が強い、強くない以前の問題です。あの異臭を嗅ぎながら戦うなんて不可能です。

メルもコクリと頷き、ザツと踵を返して瞬時に魔法を唱えました。

『連なる霜。我が言霊に従い、立ち塞がる凍てつきし飛礫となれ・・・』

・ブリザード!ー!』

ファイヤーストームとは違う魔法です。

青い軌跡が伸び、魔法陣を描きます。ヒューツと周囲が冷たくなつたかと思うと、地面から強大な霜柱が起きあがり、それが無数の飛礫となってメルシーに襲いかかります。

バシバシッとメルシーの黒い毛に氷の塊が付きませんが、その走りは止まりません。雄叫びをあげ、ブンブンと棍棒を振り回しています。どうやら、寒さに強いようです。

「うう、やっぱり足止めにもなりませんか・・・でも、ファイヤーストームもあの子の毛を焼くのがせいぜいですし。ライトニングも

効果ないでしょうし。ああ、せめて上級魔法が使えれば」

メルが精神力を使い果たしてガクツと膝をつきそうになるのに、ノアはパシツとメルの手を取って再び駆け出しました。

「ゼエゼエ。しつこい！ このままじゃ、追いつかれる！！」

ノア一人だったら、何とか逃げ切れたでしょう。でも、いまはメルと一緒にです。メルは魔法が強い種族らしく、やはりデムやファルに比べて体力に劣るのです。

「つたく、あにやってんだ」

呆れたような声がありました。それと同時に、その声が出た方から何かが放り投げられました。それはメルシーの前でガシャンと割れた音がします。

シューツという音と共に、清潔そうな消毒液の香り。ミントに近い匂いです。最低最悪な公衆便所に、美しい一輪の百合の花が咲いたのをノアはイメージしました。ノアを悩ましていた悪臭が消えたのです！

「ンガ！？」

メルシーは割れた瓶を見て、不可思議そうな顔をします。

「よくも俺の可愛い妹分を追いかけまわしてくれたな。嫁入り前だぜ。傷物になつたらどうしてくれる？ がさつだが、獣にくれてやるわけにはいかねえな」

「ば、バーボンおじさん！？」

なんと、木陰からバーボン医師が姿を現しました。ノアとメルに軽くウインクします。

こんな森林の中でもいつもの白衣姿です。フックの義手アタッチメントをガチャリと取り外し、蛇の尻尾のような鞭になった義手と取り替えます。

「おら、俺が相手だ。こいよ！」

バーボンが右手をの人差し指をクイツと動かして挑発します。

「ンウホンウホーツホツ！！！！」

メルシーは憤り、棍棒を振り回してバーボンに襲いかかりました。

バーボンはニヤリと笑い、胸ポケットから薬品の入った試験管を取り出します。それをメルシーの顔面に引っかけました。ジユアツという嫌な音が響きます。

「ンギヤアアアー！！ 又ガガガッ！！」

襲いかかるうとしていたメルシーは、目をやられて、痛みに滅茶苦茶に暴れまくりまします。

「おらよッ！」

バーボンがメルシーの攻撃を避け、鞭を振るいます。ビシュツ、ビシュツ！ ずいぶんと慣れた鞭捌きです。剛毛の部分は狙わず、顔や腹や内股といった比較的皮膚の弱い部分に狙いを定めます。

「キイーキイー！」

メルシーが嫌々と首を横に振ります。視力が奪われ、弱点ばかり狙われて、ダメージを受けているのです。もう為す術はありません。「さて、終わりだな」

バーボンが、露骨な髑髏マークの描かれた試験管を取り出しました。明らかに危険な色です。

「もう、止めて下さい！」

「メル！？」

哀れにも頭をかかえているメルシーをかばうように、メルがバーボンの前に立ちはだかりました。

「あん？」

「もうこの子は戦えません！ 戦えない子に、これ以上に何をしますか！？」

バーボンはメル顔をジッと見ます。しばらく見て、「ふむ」と言いながら試験管を胸ポケットに戻しました。代わりに煙草を取り出して火を付けます。

「優しいメリンのお嬢さんに言われちゃしょうがない。赦してやるよ」

バーボンがメルに向かってニツと笑います。メルはフウと安堵の溜息をつきました。

そしてメルは、グズグズと泣いているメルシーの頭を優しく撫でました。

「メルは優しいね……。朴念仁の時も、手加減したんでしょ？ 芽までは奪わなかったし。今回も自分を襲ってくる魔物をかばうなんてさ」

ノアの言葉に、メルは首を横に振ります。

「この子たちも……。不安なだけなんです。私たちと一緒に。迷子みたいなもののだと思います。怖くて。寂しくて。だから、知らない人がくると、近寄ってきて欲しくないから……。きつと乱暴しちゃうんです。本当は、私。こんな魔力なんて……。いらぬ。これは人を傷つける力です。人を癒すことはできないの」

メルは、メルシーの額に自分の額を当てました。抵抗することもなく、メルシーもされるままにしています。つぶれてしまった目を、メルは悲しそうに見つめました。まるで自分が治してあげられない無力さを詫びるように……。

「……治せる。一時的に視力を奪っただけだ」

バーボンは心外だと言わんばかりにそう言いました。ノアもメルも目を丸くします。

「この薬を使えばな。これだって……。一時的に気絶させる薬だ。命までとろうなんて思わねえよ。医者が殺しをしちや洒落にもならねえ」

バーボンは、さっきの髑髏マークの試験管を差して言います。

髑髏マークなのは、ちよっとした冗談のつもりだったのです。まあ、一応は劇薬なので扱いを注意せよ、という意味合いでしかなかったのです。

バーボンは腰のポーチから、治療用具と、いくつかの薬を取り出します。そして、それをメルシーの目に塗布しました。鞭の傷跡も、丁寧に消毒液を塗って包帯を巻いてやります。

あまりに手際よく治療しているので、メルは感心してそれをジッと見つめていました。あまりに真剣に見つめられるので、バーボン

は居心地が悪そうに時折に咳払いをします。

「すごい……。誰かを、治せる、癒せる技術」

「あー。こんなのは別に凄くはねえよ。医術はちゃんと勉強すれば、誰にでも出来る。だけど、誰かを癒したいとか、誰も傷つけないって気持ち。これは誰もがもっているわけじゃねえ……。メリンのお嬢さん。お前さんの誰かを慈しむ心ってのほぅが貴重なんだ。俺はそういう心を持った子こそ、医学を学ぶべきだと思っね」

薬箱をパタンと閉め、バーボンは小さく笑ってメルをポンと叩きました。メルの顔が真っ赤になります。

「ウガー」

メルシーがゆっくり立ち上がります。

「お。薬縫ったばかりだしな。まだ目はぼやけているはずだ。あんまり動かないほぅがいいぞ」

バーボンがそう言います。メルシーは解っているのか解っていないのか、コクコクと頷きました。

「ウガウガ」

メルシーは左手に持っていたツボをズイツと差し出します。

「礼のつもりか？ いらんよ」

バーボンは手を横に振ります。受け取ってもらえないと見ると、今度はメルの方にそれを向けました。

「いいえ。私も……。私がおかをしたわけじゃないですし」

メルにも受け取ってもらえないので、メルシーは心なしか寂しげな顔をします。そして、奥の切り株に座っていたノアに目をつけました。自分が見られていると知って、ノアは思いつきり首を横に振ります。

「いらない！ 絶対にそんなのいらない！！」

「ウガウガウガ！」

拒否するノアでしたが、メルシーは嬉しそうにノアの目の前にそのツボを置きます。

「い、いらないって言うているだろ！ な、なんでだよ！？ なん

で、アタシ!!?」

「ウガウガウガ」

なぜかメルシーは喜んで、ツボを置いたまま森の奥へと帰っていき
ました。

「ちょ！ おい！ こんな置いていくな！ なんで、アタシの時
だけ!!? コラ！ 待て!!!」

側にあるツボを見て、ノアはガツクリと肩を落とします。

「なんだよー。これ、どうしろっていうんだよー」

「・・・乱暴なメルシーが自ら乳をあげるなんて珍しいことなんで
す。拒否したのに渡す時は、確か・・・」

「奴ら、一番に餓えてそうなヤツを助ける習性があるんだよな。行
き倒れの動物を、メルシーが助けたって論文をみたことがある」
そうバーボンが続けました。

「だ、誰が一番に餓えてそうだ！ ふざけんなよ!!」

ノアがふて腐れるのに、バーボンとメルは顔を見合わせてプツと吹
き出しました。

「・・・そういえば、どうしてバーボンおじさん。こんなところに
？」

ノアは、ハツと思い出したかのように言いました。

「そりゃ、退化神殿のことを教えたのは俺だしな。ちょっと責任を
感じてな。・・・午前中だけで診察きりあげてこっちに来たってわ
けだ」

バーボンが頬をポリポリと掻きながら言います。なんだかんだ言い
ながら、面倒見がいいのです。

そして、バーボンとメルが、それぞれ自己紹介し合います。メル
の記憶喪失の下りで、バーボンは少しでも興味深そうな顔をしまし
たが、あえてなにも口にしませんでした。メルの方も、バーボンの
眼帯と義手が気になっっているようですが、初対面の相手に聞くこと
ではないと何も言いませんでした。

「しっかし、せっかく地図を渡したのに・・・まったく役だっとな

いじゃねえか」

バーボンが、ノアのポーチを指さします。ノアは、「あっ！」と言つて地図を引っ張り出しました。すっかり忘れていたのです。

三人が地図をのぞき込みます。

「正しければ、ここが退化神殿。ちなみに、いまここだ」

バーボンが指さしたところは、退化神殿よりもかなり離れた場所でした。

「なんだよー！ ぜんぜん進んでないじゃんか！！」

ノアがブーツと不平を言います。バーボンは呆れた顔をしました。「ずっと同じ所グルグルと回ってるんだ。当然だろ？ 午後からでてきた俺が追いつくぐらいだからな。相当、道に迷っていたんだな」そう言われて、ノアは苦々しい顔をしました。

「でも、きつと・・・この地図ほどは距離はないと思いますよ」

「俺もメルと同意見だ。入り口から距離を測ってるんだが、この地図の三分の二程度の距離しかねえ。迷いやすいから、作った人間も大きく感じていたのかもな」

バーボンにメルと呼ばれたことで、メルはなにやらモジモジと出します。

「ま、とりあえず歩くしかないってことか」

ノアの言葉に、メルもバーボンもコクリと頷きました。

こうして女の子二人に、頼もしい医師バーボンが仲間に加わったのです……………。

粘土質な土塊を、泥水で溶き、塗っては乾かし、塗っては乾かし・・・何年も、手間暇をかけて作られた壁。山肌から切り出した石の柱を何十本も横に立てて、その外壁を支えさせています。

彫像のように立ち並ぶ、様々なデザインの柱。神殿に向かうためのタイルには、歴史を紡ぐ神話が壁画となって残っています。進むたびに、歴史がどう進んでいったのかが解ります。古代文字が読めないノアたちにとっては、さっぱり意味がわからない絵にすぎない

わけではありませんが。

正四角形の形をした神殿。無造作に蔦がからみつき、一見してただの小山のように見えます。ですが、入り口から見ると、その様相は明らかに計算して作られていることが解ります。門柱から見ると、外壁と建物の高さが一直線に・・・平行に見えるようになっていたのです。自然と人工物の調和。これが、この退化神殿を作り上げた人の狙いだっただけではないでしょうか。

「すばらしい……。いや、すばらしいの一言だ。こりゃ、考古学者じゃなくても胸湧き血踊る！」

冷静なバーボンが、珍しく興奮したように鼻息を吹き出しました。オモチヤをみつけた子供のような顔です。

「えー。ただの小汚い家じゃん」
ノアが顰めっ面をしています。言ってから、そういえばメルの家だったと慌てて自分の口を抑えましたが、メルは気にしていないように、帰ってこられた喜びに浸っています。

「なにが小汚いだ！ これでスタッズの論文の正しさが証明されたんだ！ 第四種族、ポーズ星人といえば・・・進化をやめて退化した劣等種族であるというのが今までのファルの学者たちの見解だ！
それが、こんな高度な遺跡を作る能力があることがここで証明されたんだ！！ これは世紀の大発見だ！！ スタッズが『種の平等説』を説いて久しいが、まさか・・・それが正しかったなんて！！

『ポーズ”星”人』ならぬ『ポーズ”聖”人』だなんて、くだらないギャグだと馬鹿にして途中で論文を読むのをやめてしまったことを、今にあつて俺はもー！！！！！！れつに後悔してる！ ああ、あのときの俺の馬鹿！ レムジンの大図書館でいくらでもスタッズの論文を読めたのに！！！！ もつたない！！！！ 実にもつたない！！！！」

大騒ぎしているバーボンを尻目に、ノアは耳の穴を小指でかきました。歴史に興味がないノアらしい態度です。

「ねえ、メル。それで、ポーズ星人ってのはどれくらいいるの？」

結構、沢山なわけ？」

ノアが尋ねます。少なくとも、神殿の外にはそれらしき生き物は見あたりません。

「えっと……。長老を除いて、七人のボーズ星人さんがいます」「七人と一人で……。八人だけ？　ずいぶんと少ないんだな。ここにしかないの？」

「ええ。他には……。お会いしたことはありません」

メルの場合、神殿の扉が開かれます。バーボンは柱やタイルに夢中になっているので、ノアたちからはかなり遅れています。ノアは気にせず先に進むことにしました。

腐りかけた扉をあけると、ブワツと埃っぽい臭いが舞いました。ノアは思わず咳き込みます。

「メルメルです！　いま帰りました！」

メルが声をあげると、「ボー」という返事があつちこつちから返ってきます。

ト・ト・ト……。かなり遅い足取りで仲間が集まってきました。

全身真っ白で、体毛らしきものは一つもありません。顔のところだけがわずかに肌色。腰は青い布をまといっています。腕も足も棒のように細く、握ったらそのままポキッと折れてしまいそうです。

首はなく、ツルリとした頭と肩が一体化しています。まるで電車を通るトンネルを正面からみたような形の上半身です。顔はなんと口が一つの線。非個性を追求しすぎた手抜きしたような顔です。それも、七人とも皆が皆同じような顔をしているのです。区別がありません。

「メルメル。帰ったボー」

「無事だったボー。心配したボー」

「捜したボー。見つからなかったボー」

「人生とは探索……。探し求める時には見つからず、悠久の流れ

にただ任せる時に道は開かれる」

「お腹へつてないボー？ 我はお腹へつたボー」

「長老、心配していたボー。顔を出してあげると喜ぶボー」

「お客？ お客を連れて来たボー？」

七人がそれぞれ思い思いに口を開きます。それもかなり、かーなーりーりのスローテンポで。一人だけなんだか違う口調なのがありました。基本的には語尾に「ボー」がつくようです。せっかちなノアをイライラさせるには充分でした。

「あー！ もうー！！ スタッドは！？ スタッドはいるのか！？」

ノアが怒鳴ると、ボーズ星人たちは怯えたように震えました。まあ、三本線だけで表情がほとんどないので顔付きではわかりませんが。

「スタッド・・・？ スタッドは・・・」

「あー！ お前じゃ埒があかない！！」

あまりのスローテンポに怒り、ノアは喋ろうとしたボーズ星人の押しをけます。

「の、ノア！ あ、あんまり乱暴は・・・」

メルが心配しましたが、ノアにそんな余裕はありません。一刻もはやくスタッドに会いたいです。

「かの英雄。兼ねてよりの威風に備えるべく最果ての地へと・・・」

「わけわからん！」

なんだか頭の良さそうなボーズ星人が説明してくれましたが、回りくどい言い回しにノアは憤慨します。

「ちょ、長老様なら何か・・・知っているかもしれません」

メルがオロオロしながら言うのに、ノアは「それだ！」と言わんばかりに人差し指を振り回しました。

神殿の最奥。窓らしきものは見あたりませんが、天井の四隅から太陽光がとりこまれて部屋の中を明るく照らします。その採光が届かないところは、光苔や輝く鉱石などが補助しています。巧みに自

然環境を利用した照明です。

ようやく追いついたバーボンは、まだまだ興奮冷めやらぬ様子で、まるで小さな子供のように世話しなく、遺跡の隅々を舐めるように見ていきます。知的好奇心がどうしても抑えられないようです。土壁を採取し、試験管の中に入れたりもしていました。

もつとも一番奥の部屋。大きな広間になっているところに、その長老はいました。宴会場の舞台のような、ちょっと小高くなっているところにポツンと立っています。

長老というぐらいですから、さきほどの七人とは違う姿でもいいのですが・・・まるつきり見た目は同じでした。

「長老様。ただいま戻りました」

「おお、メルメル。帰りが遅かったので心配したぞ。しかし、よくぞ無事で戻ってきた」

見た目の間抜けさとは裏腹に、その長老はハキハキと喋ります。

ようやくまともに話ができる相手だと、ズイツとノアは前に進み出しました。

「なあ！ スタッド！ スタッドはここに来ていないのか!？」

いきなりのノアの登場にも、ボーズ長老は動じることはありません。細い目でノアとバーボンの姿を交互に捉えます。

「ようやく来たか・・・デムの者よ。スタッド殿の言われる運命の通りだな」

ボーズ長老の言葉にノアとバーボンが驚きます。ノアが慌てて掴みかかろうとするのを、バーボンが肩を掴んで制止させました。

「ようやく来た？ 運命の通り、だと？ まるで俺たちがここに来るのを予見していたみたいな口ぶりだな」

バーボンが訝しげにいうのに、ボーズ長老はコクリと頷きます。

「すべては運命なのだ。客人よ・・・退化した種族の言葉に耳を傾ける気持ちがあるならば語ろう」

意味深な台詞に、ノアとバーボンは顔を見合わせます。そして、二人とも強く頷きました。話を聞かなければなんとも判断できません

ん。

「結論から言えば、スタッド殿はここには来てはおらん。だが、昔に赤き髪の少女が来た時に告げて欲しいと頼まれた言伝がある」

ノアは目を丸くします。

「赤い髪の少女・・・あ、アタシのこと？ どういうこと？ スタッドは・・・私がここに来るということを知っていたっていうの！？」

「そう思ってくれて間違いないであろう。スタッド殿は、すでに我らよりも遙か先を見据えておられる。すべては運命。運命には逆らえないのだ」

淡々と、かつハキハキいう長老は、長老と呼ばれるだけあって賢そうでした。ですが、齒がゆい物言いは、さっきの難解な言葉を言うボーズ星人と大差ありません。ノアはイライラして、自分の喉をかきむしりたい気分にかられました。知りたいことが山ほどあるのです。

「・・・そのスタッドの言伝というのはなんだ？」

バーボンが尋ねます。冷たい感じの口調だったので、メルは不安そうな顔をしました。

ボーズ長老はもったいつけて、大きな咳払いをしてから続けました。

「スタッドの台詞をそのまま告げよう・・・。『ノアへ。ランドレークのラグナロク遺跡で待つ』」

ノアもバーボンも雷で打たれたような衝撃を受けました。メルも驚いて口元をおさえます。

「す、スタッドって・・・超能力者！？ な、なんでアタシの名前を・・・」

「確かに遺跡で妙な力を得たという噂は聞いたが・・・予知能力でもありやがるのか？ 信じられねえ」

バーボンが額を抑えて言います。論理的でないことは信じられない性質なのです。

「で、でも・・・ランドレークって？ ラグナロク遺跡って・・・？」

ノアがバーボンの顔を見て尋ねます。バーボンは苦い顔をしました。

「ラグナロク遺跡は聞いたことがねえ・・・。だが、ランドレークは・・・確か、滅びの都の名前だ。ファルの首都レムジンより遙かに北。魔神バルバトスがかつて完膚無きまでに破壊した大都市だ。いまじゃ、凶悪な魔物たちが占拠していて、誰も近寄れないほど危険な土地だと聞く。そんなところになぜだ？ なぜ関係もないノアに、スタッドはそんなことを言いやがる？」

バーボンがわけがわからぬ憤りを抑えて言うのに、ボーズ長老は首を横に振りました。

「それは我も・・・知らぬ。ただ運命。我は運命に従い、言伝を述べるだけ」

運命と繰り返す長老に、バーボンは降参といわんばかりに両手を広げます。ノアはガジガジと自分の爪をかじりました。

「なら、質問を変えよう。スタッドとあんたらはどんな繋がりがある？ なぜ、そんな言伝をあんたに残したんだ？」

「我らは・・・スタッド殿の盟友。スタッド殿は、この地に古くから住まう災厄を封じ、平安を与えてくれた。我らはここで誰にも知られず静かに消えていく運命。そして、スタッド殿は、魔神バルバトスを完全に封じなければならぬ運命に生きている。その前に、消えてゆく前に、我らはスタッド殿に全面的に協力しているのだ」

「魔神バルバトスを・・・完全に封じる？ だ、だって・・・スタッドはバルバトスを二十年前に封印したんだろ！？ それで平和になっただんじゃねえの！？ 完全にとってどういうことだよ！？」

昔から教えられてきた伝説が否定されたような気持ちになっってしまったので、ノアはムキになって言います。

「確かに・・・聖結界エミトンは強力な魔法。だが、永続するものではない。魔神バルバトスの恐るべき力を考えれば当然。長き時を

経て、もはや強力な結界にも綻びが見えつつある。スタッド殿は、その封印を完璧なものとして動く動いている」

ボーズ長老がそう言った直後、グラグラと大きな地響きと揺れが起きます。

「う、うわわ！ 地震！？」

「・・・魔神バルバトスの封印が弱まったことで、この退化神殿に封じられし災厄。『悪魔』の一匹が目覚めつつある現象だ。魔神バルバトスと共に各地に封じられた悪魔がやがて次々と目を覚ますだろう・・・もう起きるまで間がない」

ボーズ長老の言葉から、この地響きは悪魔とやらが動かしているのだと解りました。地震を起こすなんて、なんていう力だろうと、ノアもバーボンも真つ青になりました。

「悪魔・・・？ まさか、伝説の代物だと思っていたが」

「あ、悪魔って・・・なに？」

「魔物の上級種だ。魔物よりも知性が高く、力も強い。なかには、メリンのように魔法を使うヤツもいるって話だ」

さっきの地震に驚いて、ボーズ星人たちが集まってきました。長老以外、みんな怯えてブルブルと震えています。メルはその一人一人の背中をさすり、「大丈夫よ」と声をかけます。

「デムの少女ノアよ。デムの男よ。我らの願い・・・聞き届けてはくれまいか？」

神妙そうな顔・・・といっても、いつも変わらない顔なんです。しかし、ボーズ星人にしてはきつと精一杯深刻な顔なのでしょう。

ボーズ長老が言います。

「悪魔が目覚めれば、人間には為す術はない・・・。我らは滅びる運命。だが、メルメルだけは違う。この子は間違つて我らの地に迷い込んでしまった者。どうか、このメルメルだけは連れて逃げてほしい」

「長老様！」

メルが悲しそうに抗議の声をあげます。

長老とメルを見て、ノアは気にいらなそうに、プーツと頬を膨らませました。

「あんたたちはどうすんのさ？ さつきから滅びる運命・・・ってなんだよ？」

「我らは・・・争いを求めぬ。争うことを嫌い、進化をやめ、自己を捨て、誰の目にも止まらぬ日陰に逃げた者たち。我は我らであり、我らは我。調和こそが我らの本質」

「哲学的だな・・・。退化した種族であるボーズ星人が、そこまで知性を有していたとは。一なる全、全なる一。自我を捨てることにより、種族全体の調和を計ろうとしたのか。悟りの境地に近いんじゃないか？」

バーボンが関心して言うのに、メルメルは思いつきり首を横に振りしました。

「違います！ ボーズ星人さんたちは・・・ただ平和に生きていたいだけ。誰も傷つけないから・・・誰にも干渉せず、干渉されず。誰よりも愛が深いからできることです！ そうじゃなきゃ、記憶を失った私を受け入れて助けてくれたりなんかしません」

メルが強ク言うのに、自分の言った台詞がちよつと理屈っぽつたかと反省して、バーボンは眉の付け根を揉みました。

ボーズ長老は、ボーズ星人全体を見回します。言葉を使わずとも、意思の疎通ができるようです。思考レベルに差はあれど、皆が同じことを思っただけなら、心を共有する能力があるのです。

「・・・数多くいた我らの数もここまで減ってしまった。この世界は我らには生きにくい。競争を下り、退化をした種族は滅びる定め。我らは、我らと世界に平和をくれたスタッド殿の恩に報いる。我らの命を賭し、この地に再び悪魔を封じて、世から消えゆく所存なのだ」

決意したかのように、ボーズ長老が言うと、震えていたボーズ星人たちが皆コクリと頷きました。そして皆が魔法陣が描かれた小さな紙を取り出します。長老も、七人もまったく同じものを持ってい

るのです。

「疑似魔法！？ まさか・・・そんな、長老様！」

それを目にして、メルが取り乱します。バーボンもそれが何か知っているかのようで、ギリツと歯ぎしりしました。

「スタッド・・・の野郎ツ！ まさか、ボーズ星人とその悪魔を一緒に心中させるつもりかよ！？」

「な、なに？」

ノアはわけが解らず尋ねます。メルメルが目尻に涙をためながら言いました。

「魔法が使えない者でも、魔力を持つ者が描いた魔法陣を通して・・・疑似の魔法を使うことができるのです。その場合・・・扱う人間の命を犠牲にして。スタッドさんが描いた魔法陣は、ボーズ星人さんたち皆の命を使って悪魔を封じ込めるものなんです！」

「な、なんだって！？」

ノアは驚いて飛び上がります。

「間違うな。これはスタッド殿の意思ではない。我ら、ボーズ星人全員の選択なのだ・・・。ただ無為に滅び行くより、意義ある死を選びたい。我らが望む最期の『我』だ」

達観しているボーズ長老が遠い目をしていいます。

「そんなのダメだッ！！！！」

我慢の限界に達していたノアが怒鳴りました。シーンと辺りが静まりかえります。

「死んでいい命なんてあるはずがないよ！！！ 死んだらお終いじゃないか！！ 何が意義ある死だ！ 何が滅び行く運命だ！ 自分で諦めちゃ、何もできないじゃないか！！！！」

「ノア・・・」

強い気持ちの入ったノアの言葉に、メルが微笑んで涙を零します。

バーボンは煙草に火を付けてフツと笑いました。

「・・・ノアよ。ありがとう。こんな我らのために。だが、この地の災厄を捨て置くわけにはいかぬ」

ノアがウインクし、ボーズ長老の眼前に指を立てます。

「倒せばいいじゃん」

そんな感じにあっけらかんと言うノアに、ボーズ長老はたぶん・・・驚いた様子でした。

「た、倒す・・・？」

「そうそう。気に入らないヤツなら、この拳でぶつとばしてやればいいんだよ！」

平和主義者のボーズ星人たちには倒すという考えはまったく思いもつきませんでした。長老と七人はそれぞれ顔を見合わせます。

「し、しかし・・・この地に眠る、悪魔『オルガノツソ』は魔神バルバトスの力を大きく受け継いでいる。魔物とは比べものにならぬ強大な力をもっているのだ。スタッド殿でも、苦心の末に封じたほどの敵。戦って倒すなど・・・」

「そんなのやってみなきゃわかんないよ！ 命を賭けて封じる気があるなら、死ぬ気で倒したほうがいいじゃん！！」

ノアの明確な物言いに、ボーズ長老は衝撃を受けました。チラツと見やると、なんとボーズ星人たちがノアの言葉に呼応して拳を握りしめています。臆病で、戦うことが嫌いなボーズ星人がノアの言葉に勇気を与えられているのです。

「・・・ノア。お前はスタッド殿に似ている」

唐突なボーズ長老の言葉に、ノアは意外そうな顔をしました。

「スタッドに、似ている？ アタシが・・・？」

ボーズ長老の目には、ノアの顔の上にスタッドの顔が重なって見えていました。

「何気ない言葉一つ一つが、皆の力となる・・・。世界から見捨てられた我らを、『価値ある存在』と違って高く評価してくれたのはスタッド殿だ。自我と共に、優しさや慈しみを忘れていた我らに・・・大事なものを取り戻してくれた」

ボーズ長老は親が子を見るような目で、優しくメルを見やります。

「そうでなければ、退化の大森林で倒れていたこの子を助けてやる

こともできなかつただろう……。我らはただ滅びるだけの愚者となっていた。スタッド殿もメルメルも、我らに愛をくれた。とても感謝している」

「いいえ、いいえ。長老様。私こそ……。多くを与えられました。記憶を失った私を、ここに置いて下さいました。私こそ、愛が与えられたのです。今度は、私が……。お返しをするときです！」

メルが強い目をします。メルも心優しい少女。しかし、その心の芯は太いものがあるのです。

「チツ。女の子二人だけに行かせるわけにもいかねえしな。俺も付き合つてやるよ、その悪魔オルガノツソつて輩も気になるしな」

バーボンが煙草に火をつけ、ニツと笑います。

「メル！ バーボンおじさん！」

ノアは嬉しそうな顔をしました。この二人がいれば百人力です！

魔神バルバトスだつて倒せるかもしれない！

「よっしゃ！ やつたる！！ 悪魔なんて、アタシが粉みじんにして、メルがそれを焼いて、バーボンおじさんが薬品漬けにしてやるよ！」

頼もしい勇者三人に、ポーズ長老は自分の内側から何かが出てくるのを感じました。自己を放棄して退化することを選んだ時から感じなくなっていた情熱です。パッションです。

「……。もう止めはしない。倒せるならば、運命に抗えるならば、進んでみるのもまた運命」

長老が何やら手をあげて、呪文を唱えました。すると、長老の後ろの土壁が崩れ、降りるための階段が現れます。そこ底は深く、赤いマグマのようなものが蠢いていました。

ノアがダガーを構え、メルメルがスカートの裾をしばり、バーボンが義手の鞭をカチャリと付け直します。さあ、出陣の時です！！

第三章 七人のボーズ星人（後書き）

メルメルとバーボンの加入する時の話はちよつと違つのですが、物語に深みをもたせるためにアレンジしました。

ゲームと小説じゃ、やっぱり違つので・・・話に矛盾がでないよう調整するのはなかなか難しいw ま、おかしいところがあつてもご愛敬で・・・と、まだまだ続きます。

第四章 カの四天王オルガノツ

どれぐらい深い地下なのでしょう。気が遠くなるような階段を下りた先は、幅広い回廊となっていました。ところどころ割れた地面からは、マグマらしき不気味な赤き光が見えてきます。

ブモーツブモーツと、くぐもった荒い息づかい。暗闇の中で、邪悪な双眼が浮かび上がりました。古めかしく粗悪な作りの王座に座り、苦しげに胸元を掻きむしります。

「・・・忌々しい。忌々しいぞ!!」

ドンと肘掛けを叩きます。大きな鼻からブモーツと息が吐き出されました。まるで牛のような顔。赤黒い肌をし、筋骨隆々とした体軀。山羊のような角に、腕や胸に黒々とした体毛が生えています。

「テメエがオルガノツソか!？」

ノアがダガーの先を、その王座にいる牛のような生き物に向けました。

牛のような生き物は、ギロツと目の前の三人をにらみつけました。あまりの苦しみに、目の前にいることにも気づいていなかったのです。

「・・・なんだ？ 貴様らは」

牛のような生き物は、ゆっくりと立ち上がります。大きいです。背だけでも、ノアたちの三倍はあります。

立ち上がったその瞬間でした。

何かキューンという音がしたかと思うと、金色の魔法陣が足下に光輝きました。牛のような生き物が苦しみます。

「グググ！ 忌々しい！ このオルガノツソ様に、こんな小癩な封印を施すとは・・・スタツドめ!!」

オルガノツソは、無茶苦茶に暴れます。そのことで、ビシツと魔法陣にヒビが入りました。

シューツと魔力が消えて効力を失いました。思いがけず、苦しみ

から解放されたオルガノツソは、キョトンとして周囲を見回します。
「・・・オオ！ ようやく、この封印から解放された。二十年のこの地獄の苦しみから解放された！」

バーボンはそれを見て、顰めつ面をしました。

「チツ。もうちつともつてくれりや、その間に攻撃できたんだがな」

「グハハハ！ これで、思う存分にボーズの野郎どもを喰らえる！」

！ 腹が減った！！ 喰らう、喰らうぞツ！！！！」

オルガノツソが喜びに打ち震えながら、大笑いをあげます。

その台詞から察するに、封印されるまではボーズ星人を食べていたでしょう。長老が、ボーズ星人が減ったと言っていた理由が解りました。

「ボーズ星人さんたちを食べるなんて・・・ダメです！」

「そんなことはさせないよ！」

ノアの目を見て、オルガノツソはハツと何かを思い出しました。

「憎きスタッドと同じ目だ！ 許せん！！ まずは腹いせに、貴様らから血祭りにかけて喰らてやろう！」

オルガノツソは、王座の裏側から巨大な斧を取り出します。それも扱う者の体格に合わせた特大サイズです。メルシーのもっていた棍棒が可愛らしく思えてくるほどの凶悪さです。

「魔神バルバトス様に仕える四天王が一人！ 力のオルガノツソ様の前にひれ伏すがいいツ！！」

オルガノツソが襲いかかってきました。戦法は見た目通りの力任せな攻撃です。振りかぶった一撃で、壁に大穴があきました。

「おいおい、なんてパワーだ！ 冗談じゃねえぞ！ 一撃でももらつちゃ、お陀仏だ！」

唸る斧を避け、バーボンが手早く薬品を選びとります。

「おら！ こいつでも食らえ！」

バーボンが試験管を二本投げつけました。それが割れ、化学反応を起こしてガスを発生させます。

「いまだ！ メル！」

ノアの叫びに合わせて、集中して魔力を高めていたメルが呪文を唱えます。

「『ファイヤーストーム!!』」

朴念仁に放ったものとは比べものにならない強烈な炎の嵐です。最初から悪意を持つ敵には容赦などしません。

ズガガガン!!

ファイヤーストームの炎が、バーボンの作ったガスに引火して爆発します。

「ぐぬあ!」

さすがのオルガノツソも堪らずに片膝をつきます。

「もらった!」

ノアが駆けまわります。町中で金持ちの財布をかすめ盗る時の動きです。

「『レッド・ステイル!』」

あまりに素早いため、姿や形が見えず、ノアの赤い髪と赤い服装だけが残像で辛うじて解ることから、バツカレスがそう名付けた必殺技です。

ズバ!ズババババツ!

通りすぎた後に、オルガノツソの皮膚が切り裂かれています。何かと、オルガノツソはブルブルと怒りに震えました。

「ゆ、許さねえ!絶対許さねえぞお!!!」

オルガノツソは猛狂い、斧をズガンと深々地面に突き刺しました。

「あ!『石つぶてえええーい!』」

名乗る必要もないような大層地味な名称でしたが、決して技自体がそうではありません。

深々刺さった斧を、無理矢理にスコップで掘り起こす仕事をします。なにせそれをオルガノツソの巨体がやるわけです。石つぶてというより、岩石落としか土砂崩れ並の威力です。

「あぶねえ!」

膨大な魔力を放って精神力を使い果たしていたメルを、バーボンが横抱きにかばいます。

「うきゃー!!」

ドドドドッと容赦なく覆い被さる土に、ノアが流されます。小石がゴツンゴツン当たってタンコブができます。

「ガツハツハ！　これが悪魔オルガノツソ様の實力よ！」

モウモウとする土煙を前に、できあがった小山を前にオルガノツソが笑います。

ガラガラと小石を落としながら、土山のとっぺんでノアが顔をだしました。土煙で顔は真っ黒。髪はゴワゴワです。ペツペツと口に入った砂を吐き出します。

「メル！　バーボンおじさん！」

ノアがハツと辺りを見回します。

「ここです！」

メルの返事がして、ノアはスポットと土山から身体を抜きました。声のした山の斜面を下ると、ちょうど麓にメルがいます。ノアと同じように真っ黒ですが、怪我はないようです。

「ノア！　バーボンさんが私をかばって！」

メルは泣きそうになりながら言いました。見ると、メルの膝元にバーボンが倒れています。額からは血を流しています！

「バーボンおじさん!!」

ノアが駆け寄ると、バーボンがうつすら目を開けました。

「・・・大丈夫だ。命には別状ねえ。前頭部に軽い裂傷、左上腕に打撲。肋骨三本にヒビ。右足にもダメージがあるが、骨折までは至ってねえ」

冷静に自分の状態を分析する余裕があることに、ノアはホツとしました。

「ほう。まだ生き残っていたか。まったくしぶといな！　害虫どもめ！　ジワジワなぶり殺しにしてくれるわ！　俺様が味わった苦痛はこんなものではない!!」

オルガノツソは斧を振り回します。風圧がノアの頬を打ちました。
「や、やべえな……。おい、ノア。メルを連れて逃げろ」

バーボンが弱々しく言います。ノアもメルも首を横に振りました。
バーボンを置いてなんていけません！

オルガノツソは意気揚々と近づいてきます。どんなに滅茶苦茶にしてやるうかとも考えているのでしよう。時折、グフフなんて嫌らしい笑いが聞こえます。ノアたちを更に追い込むため、わざとゆつくりと歩いているようです。

「い、いいから……。逃げろ」

「おじさんは黙ってて！ 今考えてるんだから！」

ノアは生涯で初めて脳味噌をフル回転させていました。シューシュー湯気がたっています。

「ごめんなさい……。私にもつと力があれば。あんなにも疎ましく思っていたのに、今は力がないのが悔しい」

メルはポロポロ涙を流します。それがバーボンの顔にハラハラとかかりました。

「ガーツ！ 何も思い付かない！ 特攻！ 特攻あるのみだ！！」

ノアの頭がショートして爆発しました。

「馬鹿いうな……。ノアの足なら、ヤツの攻撃はかわし続けられるかもしれねえが。決定的に深手を与える手段がねえ」

バーボンは冷静に言います。

「くそ！ くそ！ どうすりゃいいんだよ！！」

ノアは拳で地面を殴りつけます。イライラしても、何も良い手段が思いつきません。しかし、オルガノツソは一步一步確実に近づいてきているのです。

「そこまでだボー！」

緊張はしるシリアスな場面なのに、気が抜けてしまいそんな間抜けな声がありました。ノアたちも、オルガノツソも思わずそちらの方を向いてしまいます。

七人のボーズ星人＋長老が、四人一組で騎馬を作っています。オ

ルガノツソの方を向き、本人達からすれば精一杯の凄んだ顔をしています。ですが、足だけは誰もがガクガクブルブル。無理をして、精一杯に立っているのです。

「め、メルメルをいじめるヤツは許さないボー！」

「あ、悪魔オルガノツソ！ 我らが相手だボー！」

「も、もう、仲間達を食べさせるわけにはいかないんだボー！」

「な、仲間と、メルとノアたちの敵討ちだボー！」

「聖なる戦い・・・かくも凄惨で無情な結末を一陣の風が・・・」

「あ、あとは我らに任せるボー！」

「わ、我らだつてやるときはやるボー！」

全員が力を合わせて、オルガノツソに向かいます。ポカンとしていたオルガノツソですが、涎をしたたらえて大笑いします。

「ガハハハ！ クソ生意気なボーズどもが！ 俺様に喰われるだけしか能のない貴様らが、自らまとめて喰らってもらうためにでてきたか！！ いいだろう、願い通り、貴様らをまとめて喰らってやる！！！」

ボーズ星人たちが怯えてジリツと後ずさりします。しかし、長老が手をあげました。

「ノアたちだけに、危険な目をあわせるわけにはいかん。我ら退化した種族とはいえ、この世界に住まう一つの生命体！ ボーズ星人の底意地！ 今ぞ見せつけてくれよう！！！」

長老の言葉に勇気づけられ、ボーズ星人たちが気合いを振り絞ります。

「やめろー！ 逃げろー！！！」

「や、やめてください！ ダメ！！！」

ノアとメルが必死に叫びますが、ボーズ星人たちの決心は固いものです。

オルガノツソは斧を担ぎなおし、ノアたちに向けていたつま先を、ボーズ星人たちの方に向けました。

「ガハハハ！ 封印が解け次第、ボーズ星人どもはオ・パイの命令

で一匹のこらず始末するはずだったんだがな……。それは、もうじっくり味わって喰らってやるうと思っていたが、どうやら貴様らで最後のようだな！　こうもあっさりカタがついちまうのも悲しい話だぜッ！！」

オルガノツソがオ・パイの名前を出したことに、ノアは驚きます。「オ・パイ？　な、なんで、ヤツを……。？　ヤツを知っているのか！？」

「フン。どうせ、ここにいる奴ら全員殺すわけだ。教えてやる義理はねえ！　そこで黙って見てな！　ボーズ野郎どもを倒したら、次は貴様らだ！　俺様の体に傷をつけた罰だ！　貴様らはじーっくり！　時間と手間暇をかけて調理してやるぜ！！」

オルガノツソはニヤリと笑ってノアを睨み付けました。

ノアもバーボンも絶望に顔をしかめます。もう、打つ手はないのです。いま飛びかかっても、どうしようもなことが解ったのです。

ついに、オルガノツソがボーズ星人たちの前に立ちはだかりました。怖くて、恐ろしくて、ボーズ星人たちは哀れにもガクガクブルブル……。尋常じゃないぐらい震えています。長老もそれは例外ではありませんでした。こんなんじゃないや戦いません。でも、逃げません！　「み、皆のもの……。ゆ、勇気を、勇気を振り絞るのだ！」

たまらなくなり、メルが走り出しました。ノアがその手を掴もうとしましたが、スルリと抜けていってしまいます。

「メルッ！！！」

「やめてえええええーッ！」

メルがオルガノツソの足に飛びつこうとしました。しかし、オルガノツソがそれにいち早く気づきました。蚊を払うかのように、凶悪な鉄拳を振ります！！

「邪魔をするな！　このウジ虫が！！！」

メルが殴られる瞬間、一人のボーズ星人が騎馬から離れます。おかげで残りのボーズ星人はバランスを崩して倒れてしまいました。

「ダメだボー！！！」

ボーズ星人がメルをかばって飛びつきます。それを見て、長老が、そして残りの六人のボーズ星人が、懐からあの魔法陣の描かれた紙を取り出しました。

「スタッド殿！ いまこそ、我らに力を！ 我らの命を使い、この悪魔オルガノツソを封じたまえ！！」

長老が叫びます。六人が同じ言葉を言います！！

紙に描かれた魔法陣が黄金色に輝きました！ 地下から照らすマグマの光よりも強烈な光です！

「う、うおおおおおッ！？」

メルをボーズ星人ごと殴りつけようとしたオルガノツソは、あまりの眩しい光に目を覆いました。光はますます強くなっていきます。『誰かを守りたいという気持ち・・・これが力となる』

どこからともなく不思議な声がありました。柔らかいけど、凜とした男性の声です。なぜか、ノアは懐かしい気持ちと共に、心の奥から勇気が湧いてきました。

ボーズ長老たちが持つ、魔法陣の形が変わります。ボーズ星人たちは驚きました。発動していた魔法が変わり、その魔法の対象が・・・メルをかばったボーズ星人に集まっていくのです！！

『勇気は力。僕の聖魔法は、勇気を力に変える！ 勇気よ、力となれ！ 力よ、全てを護る大盾となれ！ 聖波動クライク！！』

聖なる力が、メルをかばったボーズ星人を満たします。ゆっくりと、そのボーズ星人が立ち上がりました。

「力が！ 力が集まるボーーーーッ！！」

なんと、そのボーズ星人が踊り出します。

手を二回叩き、泳ぐような仕草をして、もう一度二回叩き、再び泳ぐような仕草を！ これは、そう、音頭です！

『ボーズ音頭でよよいがよい あんたも、あたしも踊りましょ』
はあーん（以後、繰り返し）』

どこからともなくBGMが流れてきます。いつの間にか、長老や六人のボーズ星人たちも踊り始めていました。

「な、なんだ、この間抜けな踊りは……ぐが、ぐががが！！」
啞然としていた、オルガノツソが突然に苦しみ出します。どうい
う効果かはわかりませんが、ボーズ星人たちが踊るたびに苦しんで
います。魔法陣が、ボーズ星人たちの立ち位置が魔法陣になってい
るのです！

「な、なにが起こっているんだ！？」

ノアが走ってきます。メルはその光景を見やって、口元を抑えて
いました。

「こ、これは……古代魔法です！ とても原始的……でも、な
んて力強く、純粋な！」

ボーズ星人が皆、額に汗しています。顔はハツラツとして、精一
杯踊っています。

「や、やめろおお……その踊りを、やめろおおお！！ こ、こ
れは……スタッドの野郎と、同じ、封印……魔法……がああ
ああああああ！！」

「違うボー！ これは、お前を異次元に送り出す太古の魔法ボーッ
！！」

メルの側のボーズ星人がニヤリと笑いました。なんて、ニヒルな
笑いでしょう！ 明らかに他のボーズ星人とは違います！

ボーズ星人たちの踊りが一層激しくなってきました。それは、空
間を歪め、異次元の扉を生み出します。

「や・め・ろ……おおおお！ お、俺様は……まだ、何も、
喰って……ねえ！！ は、腹が減ったまま……異次元、なん
かにいきたくねええええー！！」

異次元が、オルガノツソを吸い込もうとします。しかし、オルガ
ノツソも必死に吸い込まれまいと抗います。斧を深々と刺し、四肢
を踏ん張ります。全身の筋肉が盛り上がりました。

「せ、せめて……貴様らの一匹でも……喰らってやるッ！！」

オルガノツソが片腕をボーズ長老に向けて突き出しました。あわ
や、踊りに夢中になっていたボーズ長老が捕まりそうになります。

「させねえよ!!」

バーボンの鞭が、ピシヤツとその手を払いました。

「な、なんだと? 貴様は・・・瀕死のはずでは!!!?」

「知らねえのか? 医者は怪我しねえんだ。患者を治療できなくなるからな」

バーボンがニツと笑います。あの短時間で、自分の治療を終えたのです!

オルガノツソは悔しそうな顔をしました。

「どっせい!!!」

バーボンに気をとられていたオルガノツソに、強烈なノアの体当たりがお見舞いされました。

「空腹のまま、あつちで自分がしたことを後悔しな!!!」

ツルリと、オルガノツソの握っていた斧の柄から手が離れました。

「あつ」と言った瞬間、異次元に吸い込まれていきます。

「あ。でも、これ、せめてものアタシからの饞別だ。あつちで食いな!!」

ノアが、腰のポーチにいれていた・・・朴念仁の毒の実の欠片を放ります。それもオルガノツソと共に異次元に消えていきました。

なんで、ノアが毒の実を持っていたかですって? それは、後で何とかして食べれないかという食欲のおかげです! 食べれないと聞けば、どうしても食べたくなくなるのがノアですから。

オルガノツソと毒の実が吸い込まれて消えると、それに合わせて異次元が歪んで伸びて・・・消滅しました。

「や、やった・・・ボー!」

「倒した・・・ボー!」

「あの、怖いオルガノツソをやっつけただボー!」

「かくも、勝利の美酒は芳醇で、濃厚かつ・・・なんとも表現しがた、い、ボー!」

「我らがやったボー!!!」

「みんな生きているボー!!!」

ボーズ星人が口々に喜んでお互いに手を叩き合います。ボーズ長老もウンウンと頷きました。

「助けてやるつもりが・・・逆に助けられちまうとはな。チツ。スタツドのヤツに一杯くわされたぜ」

バーボンが、落ちた魔法陣の紙を拾います。

「どういうこと？」

身体の汚れを払いながら、ノアは首を傾げます。

「スタツドさんは・・・命をかけた封印の疑似魔法をボーズ星人さんたちに渡したんではないんです。あれは偽物の印。ボーズ星人さんたちの勇気に応じて、発動する条件にであつたのでしょうか。本当の疑似魔法は、聖波動クライク。使用者の能力を最大まで引き出す補助魔法です。命なんて、かける必要のない魔法なんです」

メルの説明に、ノアはがっくりと肩を落とします。

「なんだよー。だつたら、最初からそれ使えば良かったんじゃないか。でも、なんでスタツドはそんな嘘を？」

「きつと・・・我らに、もう一度生きる喜びを思い出させるためだボー。危機に立ち向かわせることで、我らが本来の我らを取り戻すことをスタツドは願っていたボー」

メルをかばったボーズ星人がそう言います。ノアは目をパチクリさせました。

「あ、あんた・・・普通に喋ってるけど。っていうか、会話が成り立ってる!？」

「あ! そ、そういうえば・・・難しい言葉でも、スラスラ説明できるボー! わ、我はいつたい?？」

喋っているボーズ星人自身が驚きます。ノアも、長老以外とまともに会話が成り立つことに啞然としています。

「・・・失った自我を取り戻したのだ。メルメルをかばうことで、個は全、全は個の概念を越えて・・・お前は一人の人間となつただ」

ボーズ長老が、ボンとそのボーズ星人の肩を叩きます。ボーズ星

人は、感動してフルフルと震えていました。

「なら、名前が必要だな・・・」

バーボンが煙草をふかしながら言いました。

「そうだね。じゃあ・・・あんたは今日から『ボーズ太郎』だ」

ノアが指をパチンと鳴らしながら言います。

「の、ノア・・・」

「なんて安直な・・・」

メルもバーボンも頭を抑えます。

しかし、ボーズ太郎と呼ばれたボーズ星人は嬉しそうに飛び上がりました。

「やったボー！ やったボー！ 我は、ボーズ太郎だボー！！」

飛び上がっているボーズ太郎を前に、他の六人のボーズ星人が羨ましそうな顔をします。

「やがて、お前達もボーズ太郎のようになるであろう。もう、我がボーズ長老として・・・ボーズ星人の総意を語らずとも良い日が必ず来る。そう遠くない未来に、な」

運命と口にしなくなったボーズ長老は、晴れやかな顔をしていました。そんなボーズ長老自身も、自我を取り戻しつつあるのでしよう。ノアはそれを嬉しく思いました・・・。

それぞれ、退化神殿の上の階に戻っていきます。他のみんなが行くの見届け、ノアが階段を上ろうとしたとき、ボーズ長老が突然にノアを呼び止めました。

「なに？」

ノアが振り返って尋ねた時、ボーズ長老はさっきまでの晴れやかな顔とは違ってかわって、難しい顔つきをしていました。

「ノアよ。話しておきたいことがある・・・」

「話しておきたいこと？」

「メルメルのことだ」

ノアはキョトンとしました。階段の方を一度見ましたが、再び長

老の方に向き直ります。

「いいよ。聞くよ」

「ありがとう……。実は、メルメルの記憶を封じたのは我なのだ」
「え？ な、なんだって!？」

突然の告白に、ノアは飛び上がりました。ですが、ボーズ長老は「静かに!」と口に指を当てます。ノアは口にチャックをして頷きました。

「……メルメルは、一年前。ジャスト城下町の付近で我らが見つけた。迷っていたというより、デムの若い男数人に連れられていたのだ。メルメルは、メリンの少女だということで、デムから因縁をつけられていたのだと思う。ひどい暴行を受けていた……」

ボーズ長老が重々しく言うのに、ノアはギュツと拳を握りしめて、唇を噛みしめました。

「我らは……。そのときは、助けることもできなかった。オルガノツソに立ち向かったような勇氣とは無縁だったのだ。我らは……。暴行を受け終わったメルメルを……。気絶したメルメルを助けてやることしかできなかった。あれは、あまりにも辛い記憶。我は、その記憶を封じた。メルメルの心の奥深くに」

「そう……。だったのか」

ノアは悔しくて、悲しくて、胸に手をやりました。

ファルやメリンがデムを軽視しているように、逆にデムがファルやメリンを恨んでいることもあるのです。優位種であるファルやメリンを憎み、嫌って、力のまだ弱い子供や女性を襲う不屈きなデムがいるという話を聞いたことがありました。

盗賊という、人には疎まれる仕事をしているノア自身も、そんな嫌な経験をしたことがあります。同じデムなのに、蔑まれ、罵られ、否定される。そんな辛い過去があったからこそ、ノアにもメルを受けた苦しみが手に取るように解りました。ましてや、ボーズ星人や魔物という種族すら越えた愛を持つ、心優しいメルのことです。どれほど、心を痛めたでしょう。どれほど、悲しんだことでしょう。

身体の傷よりも、きつと心の傷の方が深かったに違いありません。

「・・・ノア。メルメルを連れて行ってやってくれ。このまま我らと共にいてはいけない。我は今回のことで悟った。いくら、記憶を消そうとも。いくら、放棄して忘却の中に生きようとも。やがて、人はそれに立ち向かわねばならぬ時がくる。メルメル自身が立ち向かわなければならぬ日が。その時に、ノア。お前が側にいてやってくれ」

ボーズ長老の真摯な想いが、ノアの胸に突き刺さります。ノアはコクリと頷きました。

「わかった。メルはアタシの友達だ。メルが辛い過去に立ち向かうとき、アタシが支えてあげる」

ノアの言葉に、ボーズ長老は嬉しそうに頷きました・・・・・・。

ノアとボーズ長老が、皆より少し遅れて長老の間に戻ると、何やら表から喧噪が聞こえてきます。何かが戦っているような音です。どうやら様子を見に行っていたらしいボーズ太郎が、血相を変えて戻ってきました。

「大変だボー！ ノアたちじゃない、剣をもったデムが、たくさん森で暴れているボー！！」

「デムだと！？ ジャスト城のヤツらか！」

バーボンは何かを知っているようで、渋い顔をしました。

「・・・オルガノツソの野郎が言ってる。オ・パイにボーズ星人の始末を頼まれたってな。実は、それに心当たりがあつてな。オ・パイは、どうしてか、ボーズ星人を目の敵にしているんだ。近々、軍をあげての掃討作戦を行うってもっばらの噂だったんだ」
この言葉に、ノアもメルも憤慨します。

「なんだよ、そりゃ！」

「ひどい！ ボーズ星人さんたちが何をしたっていうんですか！」

二人に詰め寄られ、バーボンは目を白黒させます。

「お、俺に言われてもな・・・」

「と、とりあえずどうするボー!? まだ退化神殿にまでは来ていなく、森の魔物たちと戦っているようだボー! でも、ここまで来るのは時間の問題だボー!」

あわあわと慌てるボーズ星人たち。長老は悲しそうな顔をしました。

「・・・やはり我らは滅びゆくしかないのか」

「もう! また! そんなこと言うな! アタシが何とかしてやる!」

ノアがドンと胸を叩いて言います。バーボンはそれを見て天を見上げました。

「おいおい、安請け合いは・・・」

「安請け合いなんかじゃない! うーんと、えーと・・・そうだ! あんたたちさ、ウチに来ればいいよ!」

ノアが捻り出した回答は突拍子もないものでした。

「ウチ?」

「そう! 盗賊の森! 南に行った方にある場所さ。そこだったら、バツカレス親分や盗賊の皆もいる。ジャスト城の兵士にみつかることもないような穴場だよ!」

ノアの提言に、長老以下六名は意識を共有して考えます。自我をもったボーズ太郎だけは仲間に入れず、ちよつとだけ淋しそうにしました。

「・・・本当に大丈夫だろうか? 迷惑にはならぬか?」

「大丈夫だつて! あんたたちぐらい平気だつて! 親分はそんな細かいこと気にする人じゃないし!」

ボーズ星人たちはコクリと頷き合います。ノアの好意を受け入れることにしたのです。

「決まったな。もう時間がねえ。俺らが囷になって時間を稼ごう。その間に逃げるんだ」

バーボンが言うのに、ノアもメルも口を引き締めました。

ボーズ長老が、広間の隠し扉を開きます。入口を通らなくとも外

にでられるようです。神殿の裏手を上手く行けば、敵に見つからずに逃げれる事でしょう。

「案内なくて大丈夫？」

ノアが心配して聞くのに、ボーズ星人たちはニツと笑います。

「森を歩くのは慣れているボー」

「方向さえ解れば、なんとか辿りつけると思うボー」

ボーズ星人たちがそれぞれ出ていくなか、ボーズ太郎だけはグッと拳を握って立ち尽くしています。

「ボーズ太郎。あんたも早く」

ノアが急かすのに、ボーズ太郎はイヤイヤと頭を横に振りました。

「わ、我は逃げないボー！ ノアやメルやバーボン先生だけ置いてなんて行けないボー！」

「フツ。狙われているのは、お前らなんだがな」

バーボンは呆れたように言いましたが、どことなく嬉しそうな様子でした。

「・・・ボーズ太郎よ。お前がその選択をするというならば我は止めはせぬ。メルメルのことをよろしく頼む。そして、ノア。ボーズ星人を代表して深く感謝する。色々とありがとう」

ボーズ長老が深々とお辞儀します。ノアはなんだか照れ臭くなつて鼻の下をこすりました。

「いいつて、はやく行きなよ。気をつけね！」

ノアはそう言つて隠し扉を閉めました・・・。

ガツガツガという無骨な軍靴の音が幾つもします。雪崩れこむように、ガチャガチャという喧しい音が神殿内に響きました。

脇構えに刀を構えた兵士たち。顔に鬼面をあて、鉄兜をかぶっています。これがジャスト城の兵士のスタイルです。まるで侍のようですが、下半身は旧日本帝国軍の軍服のようで、アンバランスです。その兵士たちの後ろからは、赤と青の派手なストライプをした道化師たち。二股に別れた帽子や、長い服の裾にボンボンがついてい

て、珍妙な白い化粧をしています。楽しそうにスキップしながら、ステッキをバトンのようにクルクル回しています。これがジャスト城の魔導師です。

兵士と魔導師は、ノアたちを逃がすまいと周囲を囲います。

「チツ。ずいぶん大掛かりだな」

自分の予想していたよりも数が多かったので、バーボンは気に入らなそうに言います。胸ポケットの試験管の残数をチラッと見やりますが、この人数を相手にするのは難しそうです。

「ほーほ。やっとこさついたっちょ！ エライ歩いたっちょ！」

「んだべー」

入口のほうから、早口で甲高い声とのんびりした低い声がします。兵士たちに比べて軽装で、ノアには見ただけで、すぐに傭兵の類いだと解りました。

早口の甲高い声を出していたのは、背が低く、真ん丸な目。上向いた鼻、出っ歯が二本でた奇妙な顔の小男です。

のんびりした低い声で返事していたのは、背がやたら高く、怒り肩で胴長。つぶってるのではないかというぐらい細かい目に、しゃくれた顎から下の歯が二本とびでています。

見事に対象的な二人は、ノアたちに向かってきました。小男はチヨコチヨコと忙しない足取りで、大男は一步を進むのが時間がかかります。

「見つけたチヨ！ 怪盗モア！」

小男がノアを指さしながら言います。ノアはあんぐり口を開きました。

「怪盗モアなあ？」

「そうだったっちょ！ ジャスト城の国宝エルマドールを奪おうとした極悪人モアだったっちょ！」

ノアの顔がみるみる赤くなります。怒りに震えました。

「誰がモアだ！ アタシはノアだ！ アタシはそんな絶滅した怪鳥みたいな名前じゃない！！」

小男は目をパチクリさせました。やっと追いついた大男のほうにやらポケットから紙切れを取り出して開きます。

「アホン。そうだべー。怪盗ノアになっっているべー」

「なにチヨ？ ダラ！ お前がモアだっって言っただっチヨ！」

小男アホンがツバを飛ばしながら、大男ダラに掴みかかります。

「読み間違えてたべー」

ダラが、紙をこちら側に見せます。

幼児でももう少し丁寧に巧く描けるだろうというノアの絵。その下に極悪犯手配書、怪盗ノアとありました。

「なんでお前はいつもそうだっチヨ！ せっかく決めてたのに台無しだっチヨ！」

「すまないべー」

漫才のようなやり取りにノアたちは半ば呆れムードです。

「アホンとダラ。差し詰め二人合わせてアホンダラだな」

バーボンがタバコに火をつけながら言います。

「ムキー！ 合わせるなっチヨ！」

アホンが地団駄を踏みます。

「と、とりあえず、モアでもノアでもいっつチヨ！ 逮捕チヨ！」

「よくなーい！」

ノアも抗議の声をあげました。ですが、バーボンがサツと前に進み出ます。

「秘宝エルマドールの窃盗疑惑が逮捕の理由だろ？ だが、ノアが盗んだって証拠はあんのか？」

何か言おうとしたノアの口を抑え、バーボンが尋ねます。

「し、証拠だ・・・っチヨ？」

明らかにアホンは動揺したようです。バーボンは涼しげに笑いましました。

「証拠もなしに、こんな僻地まで軍勢率いて来たっつての。これで不当逮捕ってなったら、ジャスト国の威信に関わるぜ？」

バーボンの言葉に、アホンは「うっ」と身を引きます。

アホンが大した権力もない下っ端役人だとバーボンは見越しているのです。巧く話術で丸め込んだ方が、戦うより得策だと考えたのです。

「ぼ、ボスの・・・命令だつちヨ！ 逆らえばお仕置きされるつちヨ！」

「ボスだあ？」

バーボンは眉を寄せました。

「なにを悠長なことをやっている？」

アホンとダラの後ろから冷たい声がしました。二人とも青い顔をします。周囲の兵士たちにも言い知れぬ緊張が走りました。

「たかだか、ネズミを捕らえるだけにこんなに時間と人手がかかるものか・・・無能どもめ」

この嫌な声に、この嫌みな言い方に、ノアはハツとしました。

「オ・パイ！」

アホンとダラの後ろから姿を現したオ・パイがニヤリと笑います。そして手に持っている何かを放り投げました。

ドッシーン！！！！

それを見て、メルが口元に手を当てて悲鳴を上げます。ポーズ太郎は青ざめた顔でガクガク震えました。

「ひ、ひどい！！！」

メルの目尻に涙がたまります。

オ・パイが投げたもの・・・それはメルシーでした。ズタボロで、暗い目にはすでに何も映らず、舌がダラリと飛び出ていました。すでに息絶えています。腕や体に巻いた包帯から、ノアに乳をくれたメルシーに違いありません。

バーボンが義手の付け根をグツと握ります。

「私がこの神殿に来るのをなぜか邪魔したのでな。始末してやった」
ノアはギリツと歯ぎしりします。

断言はできませんが、もしかしたらオ・パイの危険な雰囲気を生野の勘で察知し、ここに来るのを止めようとしたのかも知れません。

「ボス！ お仕置きは・・・勘弁だつちヨ！」

「べ、べー」

アホンもドラも萎縮してしまいます。ですが、オ・パイは二人に目もくれません。

「最初から期待していない。だから、私が直々に来たのだ」

オ・パイが静かに進み出て、ノアの目の前に立ちはだかります。メルとバーボンをチラッと一瞥しました。

「ああ！ 本丸がでてくるとはな！！ くそつたれ！ 先手必勝だぜ！」

戦うしかないと判断したバーボンが、まず仕掛けました。ありつたけの試験管を投げます。

しかし、オ・パイはそれを難なく、なんと一つも割らずにパシッパシッパシッと受け取ってしまいます。

「なんて野郎だ・・・グフッ！」

バーボンが振るった鞭を空中で受け取り、腹部に鉄拳を叩き込みます。オ・パイは気絶したバーボンの胸元に、試験管を戻す余裕も見せています。

「バーボンさん！ 『轟き叫ぶ大気、我呼ばれるは聖なる雷光。ライトニングー！』」

メルがすぐさま雷の魔法を放ちます。メルが持つ一番強い魔法です。稲光を伴い、雷の柱がオ・パイめがけて落ちました。

「ちやいやあ！」

「え！？」

オ・パイが高く跳び、雷の柱を蹴りつけます。垂直に落ちようとしていた雷は、オ・パイに蹴り上げられ、あらぬ方向に飛んで天井に穴をあけました。

何事もなかったように、オ・パイはその場にスタツと着地します。メルは精神力を使い果たし、その場にパタンと倒れました。

「『レッド・スティール！！』」

ノアは、倒れているバーボンとメルに駆け寄りたい気持ちを抑え

つけながら必殺技を放ちました。バーボンとメルに気をとられている、今しか隙をつくチャンスがないのです！

「……遅いな。まるでスローモーションだ」

オ・パイがランニングするかのように、タタタンと床を蹴ったかと思うと、ノアの高速移動に追いつき、ノアのダガーをヒョイツと取り上げます。

「そ、そんな……盗賊のアタシに追いつくなんて」

ノアはガクリと膝をつきます。スピードを生かせなかった城内ならともかく、必殺技を使ったトップスピードでの速さで負けたのです。

「……いくら早かろうが、ネズミはネズミに過ぎんだ」

オ・パイは見えないほど速い手刀でノア的首筋を叩きます。ノアはその場に倒れました。

「み、みんなボー、ボー！」

怖くて戦うこともできず、ボーズ太郎はオロオロとします。

オ・パイは憎悪を込めた目でボーズ太郎を睨みつけました。尋常じゃない殺気に、ボーズ太郎は気圧されてへたりこみます。完全に戦意喪失です。

「……くだらん。肩慣らしにもならん」

オ・パイは鼻を鳴らし、三つ編みをブンと後ろに払いました。

そして、クルリと踵を返します。

「全員。城に連行しろ。戻り次第、裁判だ……ククク」

そして、アホンとダラの間を通り抜け様にそう言い放ちます。

そのままオ・パイは出ていきました。オ・パイが過ぎ去った後、二人ともゴクリと息を吞みます。

「……あ、相変わらず恐ろしい人チヨ」

「……そうだべー」

メルシーの遺骸に、倒れている三人と、戦意喪失した一人。これをオ・パイ一人がそうさせたのです。勇猛果敢なジャスト兵士ですが、恐怖に震えるあまりカチャカチャという音を鳴らしていました。

これ以上の失態はできないと、アホンとダラはそそくさと、気絶した四人を担ぎ上げる担架を探しにいきました……。

第四章 カの四天王オルガノツソ（後書き）

ゲーム中では、オルガノツソは最初のボスですが・・・こうまで強くありません。小手調べをする序盤のボスといった感じですね。なかなかネーミングは気に入っているんですが。

アホンとダラ。これもお気に入りキャラでした。ゲームでは鬼ごっこをして、逃げ切れれば助けてあげようなんてイベントになるんですが。ま、ちょっと小説だと・・・あれかなあと。最終的に、オ・パイが介入して逃げられなくなるのは一緒ですけどねえ。

こんな感じで、次回は・・・ジャスト国のレイ王子とかがでてきます。あとオ・パイの野望とかも明らかに。ようやく話が進む、かと。

第五章 無道の暗殺者オ・パイと好色王子レイ

まるで、電車ごっこをしているかのように、ロープで縦にくぐられて歩かされているノア、バーボン、メルメル、ボーズ太郎。一人でも歩みを遅くすると、兵士の一人が槍の柄でゴツゴツ殴ってきた。

そのままジャスト城に連行されました。初めてみるお城に、太陽の光に照らされ純白に輝くその威容に、メルもボーズ太郎も驚いた顔をします。でも、観光気分の顔ではありません。これからどんな仕打ちが待ち受けるのかという不安の色が強いです。いつもは楽天的なノアですらうつむきかげんなので当然です。

城の中は、夜来た時と違って、たくさんの人々が往来していました。兵士たちは冷たい眼で一瞥をくれ、メイドさんたちは怯えたように顔を背けます。

やはり、デムの城では、メリンのメルメルや、ボーズ星人のボーズ太郎は珍しいらしく、誰もが興味津々です。チラチラと盗み見る視線が背後に感じられます。でも、連行されているノアたちに声をかける者など一人もいません。

二階に通され、大広間でようやく縦一列から解放されました。と思いきや、今度は横一列に並ばさせられます。

捕まった直後の時のように再度、念入りなボディチェックが入ります。ただ、メルをチェックする時が異様に長いです。ノアやバーボンはサツサツと全身を叩かれただけ、ボーズ太郎に至っては一秒もかかっていません。よく見ると、メルをチェックしている兵士は、鬼面の下から鼻の下がのびて、涎までたらしているようです。同じ女であるのに、その扱いの差に、ノアはギロリと睨み付けました。すると、メルをチェックしていた兵士はゴホンと咳払いをしてメルから離れます。

周囲にピタリとついていた兵士たちがどき、顎を上げて、先に進

めと指示しました。ためらっていると、槍の穂先でチヨンと背中を突かれます。ノアたちは渋々と横一列のまま、粗悪な赤い長絨毯の上を歩き出しました。

王の間。豪華絢爛、荘厳美麗、威風堂々・・・そんな言葉で表現したいところですが、実際には節約計画、実質剛健、貧乏暇なし・・・といった表現が適切と思えるほど、シンプルで寂しい部屋です。

装飾品は根こそぎとり外され、紋章入りのカーテンがかかっていただろう部分の壁だけが白く、他はちよつと黒く日焼けしているのでもるわかりです。王の像か騎士の像があつたであろう場所も、台座だけが無惨に取り残されていました。ステンドグラスであつた窓なんかは、なんとベニヤ板がはめ込まれています。しかも、へたくそに取り付けたせいで、斜めっているのが何ともはや・・・。

そんな質素な部屋に場違いなほど豪華な王座。王座だけはせめてと思つて残されたのでしよう。その上に座るのがジャスト国王です。恰幅よいどつしりとした貫禄、知性を感じさせる長い頭髪に白髭。まさに王様と呼ぶに相応しい出で立ちですが、太い眉は常に八の字です。目は忙しく泳いでおり、王としての自信も何もあつたものではありません。王座に座るのが申し訳ないともいわんばかりに大きな身体を縮こまらせ、頭にかぶつた大きな王冠も少し斜めがちです。ノアたちに視線も合わせようとしていませんでした。ただこの場から消え去ってしまいたいという感じで、モジモジとしています。

隣に座るのが王妃様。ノアが首をへし曲げた、三階の像にそっくりの顔です。美人ですが、能面のような作り物の顔。釣り上がった目に、深く垂れ下がった口元は、そこで固定されたように少しも表情が変わりません。頼りない王様を、チラッと見てから、ノアたちに冷徹な視線を送っています。

王様と王妃様のさらに横、二人の席よりは控えめに作ったある椅子の上には、レイ王子とマレル王女が揃つて座っていました。王様より立派な出で立ちで、レイ王子はキリツとした表情で真っ直ぐに

ノアたちを見ています。マレル王女は、ちょっと怯えた様子で、時折に兄と母の方を気にして視線を送っています。

「……さて、国王陛下。日々お忙しい激務の中、このような些末な懸案にまでご裁可頂かなければならぬことを心苦しく思っております。ですが、これら大罪人の悪行はそうせざるを得ないほどのものです。どうぞ、お許し願いたく思います」

オ・パイが部屋の隅から姿を現しました。王様はビクツと怯えたように震えました。

「う、うむ……。苦しゅうない」

王様はおののいてる子猫のように、プルプルと震えながら言いました。オ・パイはニヤリと笑って、胸に手を当てて深々とお辞儀します。

「さて、王族の皆様。かの者たちの罪状をまずご報告申し上げます……。まず、かねてより盗賊の森に住まい、先だつても城に忍び込んだ不屈きなバツカレス盗賊団の一員のノアです。すでにあえて申し上げる必要もないほど明白な犯行でしょう。主犯にして、もっとも罪深い者であります。不相応にも、昨夜、ジャスト国の秘宝エルマドールを盗もうとし、それが失敗したと見るや、野蛮なボーズ星人たちを焚き付けて、国家転覆を謀ったものです」

「なあ！？」

「や、野蛮つて！？ ノアやボーズ星人さんたちがそんなことをするわけないです！」

ノアとメルが声を上げました。エルマドールを盗もうとしたのは事実ですが、ボーズ星人を使って反逆を謀ったなんて事実無根もいいところですよ。ですが、オ・パイは無視して続けました。

「そして、町医者バーボン。かつては、その豊富な医療知識を、フアルやメリンにも認められていた優秀な医師だったそうですが……。いまでは、その権威は失墜し、浮浪者や盗賊まで、秘密裏に違法な治療行為をしています。今回は盗賊ノアに荷担し、その身を匿ったばかりか、その思想に共鳴して今回の犯行に荷担したものです」

バーボンがフンと、肩をすくめました。

「・・・おいおい。でっちあげもいいところだ。なにが違法な治療行為だ。ちゃんと治してやってるぜ」

オ・パイはそれをも無視し、今度はメルをジロツと見やりました。「メリンの少女。クラレ村に問い合わせてみましたが・・・何者かは不明です。ですが、いずれにせよ、我が国に不法に滞在していたと思われる者。スパイの可能性も考えられますな」

「スパイだなんて！？ わ、私は・・・私は！」

メルが胸に手を当てて辛そうな顔をします。

オ・パイは何かを考えるように少しだけ目を細めました。ですが、すぐに首を横に振ります。

「大方、ボーズ星人どもに利用されていたのでしよう。利用されるだけ、利用されて、そのうちに殺されていたと思われませう。以前も・・・私はそのような例を知っていますからなッ」

オ・パイの目が仄暗く輝きます。その尋常じゃない殺気に、王の間にいる誰もがゴクリと息を呑みました。ですが、すぐにオ・パイは目を閉じて怒りを消しました。何事もなかったかのような顔に戻ります。

「さ、さつきから・・・ひどすぎます。あなたが、ボーズ星人さんたちの何を知っているというのッ」

メルがついに泣き出しました。それを見て、なぜか、レイ王子が心配そうな顔をします。ノアはそと時に気づきました。レイ王子がずっと真っ直ぐに見ていたのは、メルのことだったのです。ずーつと、さつきからメルのことを見ていたのです。

「・・・パイ。その者たちの処分、いかようにするつもりだ？」

レイ王子がオ・パイに問います。まるでメルを助けるかのような絶妙なタイミングでした。さらにメルに苦言を告げようとしていたオ・パイは、その出鼻をくじかれたようで、一瞬だけ口をへの字にしました。

「ちょ、ちょっと待つボー！ わ、我の罪状がまだまだボー！！」

ボーズ太郎が慌てて余計なことを言いました。ノア、バーボン、メルだけじゃずるいと言わんばかりの勢いです。どんなことでも仲間はずれはイヤなのです。

「黙っている！ 貴様など、存在すること自体が罪だッ！！！」

「ガーーーン！」

いつも冷静なオ・パイが感情を剥き出しに怒鳴り散らします。ボーズ太郎はもちろん、側にいた王様も「ヒイ！」と悲鳴をあげて頭を抱えました。

マレル王女など、真っ青になっています。レイが優しくマレル王女の手を握りました。すると、マレル王女は少し顔を赤らめてホッとした感じになります。

場の空気が悪くなってしまったことに、怒りを急速冷却したオ・パイは、咳払いをして仕切なおしました。

「……ええ。以上の罪状から、全員死刑に相当すると思われませう」この言葉に、誰もが耳を疑いました。四人ともギロチンが自分の首に落ちてくるのを想像してしまいます。

「死刑だつて！？ じよ、冗談じゃないよ！！！」

「し、死刑！？ 死刑だボーーッ！？」

「横暴だぜ、王様ッ！！！」

それぞれ抗議の声をあげますが、オ・パイは涼し気な顔です。オ・パイの中では死刑はすでに確定なのです。

「……そんな罪には相当しないと思うが。とくに、そのメ、メリンの少女なんかは。もつと詳しく調べてだな」

レイ王子も死刑に反対のようです。ですが、どうにもメル鬮眞のようでした。「メリンの少女」と言うときに、赤くなりながら人差し指をツンツンと付き合わせています。

「ボーズ星人と関与を持っていただけで、その罪は充分に死に値します」

オ・パイの表情は変わりません。心底ボーズ星人を憎んでいるのでしょう。

「そんなに結論を急がなくてもいいだろう？ 父上。いかがですか？ 簡単に死罪にしまえば・・・民衆からは恐怖政治だとの非難をつけるでしょう。まずは罪人たちの言い分もよく聞くべきでは？」

オ・パイに話しても無駄だと思ったレイは、父親・・・王様に言います。急に話を振られて、王様はドキマギしたようでした。ですが、やがてコクリと小さく頷きます。

「そ、そうだな・・・。確かにレイの言う通りじゃ。ワシも死罪はちよつと重すぎ・・・」

オ・パイがカツと目を見開きます。

「国王陛下！！ そのようなことで、デムの王が務まりましようか！！？？ いいですか、罪には厳しい罰を！！！ 生ぬるいことをしていれば、盗賊どもが付け上がりまっす！！ 私が来るまでこの国はどうでしたか！！？ 税収は向上かず、国勢は低迷するばかり！！ 盗賊は横行し、ボーズ星人どもは我が領土で傍若無人に暮らしておったのです！！ これが国家と呼べるでしょうか！！？ 統治といえるでしょうか！！？ どうぞ、崇高なる采配を！！！！」

オ・パイがまくしたてるのに、王様はガクガク震えます。

「ヒイ！ わかった、わかったから・・・パイ、怒鳴らんでくれ！ ワシが悪かった！ 許してくれ！」

目尻に涙のため、王様はマントで頭をすっぽり覆いました。それを見て、王妃様は呆れたようにフンと大きく鼻息を吹き出します。

ジャスト国の風習で、王族といえど、女性は政には口をだしません。ただ、それでもオ・パイのやりかたは気に入らないと言わんばかりに、王妃様は深く座り直して、オ・パイをただ冷たく見ていました。

オ・パイと王様のやりとりをみて、レイ王子は唇を噛みしめます。

「パイ！ 証拠もなしに、有罪と決めつけるのか？」

「証拠？」

オ・パイは意外と言わんばかりに眉を寄せました。

「その盗賊ノアが、我が国のエルマドールを狙った証拠だ。話によれば、昨夜にそのノアを目撃したのはお前だけだと言うのではないか。確かにバツカレス盗賊団は、たびたび我が城にやってくる。が、いまのこの城に宝と呼べる代物はほとんどない！俺が見ているだけでは、偵察にきているだけのようを感じる。実際の所、実害はないのだ。何も盗られてもないのに、死刑にまでする必要があるのか？」

レイ王子は必死になって言いました。盗賊が忍び込んだっただけでも犯罪ではありますが、それでも死刑にするほどでもないと考えているのです。

「・・・レイ王子。大臣であるこの私が見たといっているのに、それを信用してもらえないのは残念です」

その言葉とは裏腹に、オ・パイがクククと喉の奥で笑います。そして、パチンと指を鳴らしました。

大きな斧を抱えたアホンとダラがやってきます。ノアはそれを見た瞬間、何であるかわかりました。あのオルガノツソが使っていた斧です！

「確かに、エルマドールを盗もうとした証拠はございません。ですが、我が国の守護者オルガノツソ。かの者を、ここにいた四人が殺してしまったのは事実。・・・私としたことが、重大犯行を付け加えるのを忘れておりましたな。そう。魔神バルバトスを倒すために戦った、守護者オルガノツソをこの者たちが殺してしまったのです！！これが何よりもの証拠！これが国家に対する、いや人類に対する罪でなくなるといっているのでしょか！！？」

王族の皆が、目を丸くします。レイ王子ですら、驚愕の表情でその斧を見やりました。

「ま、まさか・・・。英雄オルガノツソを倒してしまったのか！？ノアは目をパチクリします。さつきから、オ・パイやレイが何を言っているのかさっぱり解りません。」

「ちょ、ちょっと待ってよ！オルガノツソって・・・魔神バルバトスの子分でしょ！？ スタッドに退化神殿に封印されていて、そ

の封印が解けちゃったから、私たちが倒しただけだっただけだ！」

「そ、そうです！ ボーズ星人さんたちを食べようとしていた悪い悪魔です！」

ノアとメルが言うのに、レイはガツクリとして、倒れるかのように着座しました。マレル王女が心配そうにレイ王子の手を握ります。それでいて、気にくわないといわんばかりに、ちよつと疎ましそうにメルを見やりました。メルはその視線に全く気づきません。

「愚か者め……。ボーズ星人たちの甘言に惑わされおって。英雄スタッド以外にも、魔神バルバトスに挑んだ戦士がいたのだ。それこそが、四天王と呼ばれる、オルガノツソ、アルダーク、ビシユエル……。最後の一人は忘れたがな。彼らは、惜しくも魔神バルバトスに敗れ、各地に魔神の呪いで封印されていたのだ。その封印が解けたというのに、貴様らは彼を殺してしまったのだ！」

オ・パイがそう言うのに、ノアたちは驚愕します。そんな話はまったく聞いていません。だって、オルガノツソ自身だって、スタッドに封印されたことを怒り、魔神バルバトスの下僕だと名乗っていたではありませんか！

「う、嘘だ！ そんなの嘘っぱちだ！」

「そ、そうだボー！ オルガノツソは怖い悪魔だボー！ 長老も言っていたボー！」

「オルガノツソや四天王なんて名前、文献で見た覚えもねえぜ」

ノアやボーズ太郎、バーボンが口々に言います。ですが、オ・パイも王族たちも半ば諦めムードです。なぜか有罪確定となった霧困気なのです。

「文献載ってないのは、四天王のことは国家機密だからだ。いずれにせよ、オルガノツソがこの国の守護者であることに違いない。そして、退化神殿に眠っていた。それなのに、許可もなく野蛮なボーズ星人どもが、あの神殿を占拠していたのだ」

オ・パイがそう言うのに、ノアはグツと堪えます。オルガノツソはオ・パイの名前をだしていました。きつと裏で何か繋がりがあ

のです。そこを何かで上手くやって、ノアたちを罠にはめたのです。今何を言ってもオ・パイはのらりくらりとかわしてしまうでしょう。「さて、国王陛下！！？ この重大犯罪人たちを、どうされますか！！！」

オ・パイが国王の耳元で凄みます。

「ヒイイ！ わ、わかった、死刑でも・・・なんでもしてくれえいー！！！」

投げやりな王様の言葉に、全員がガクリと肩を落とします。レイは眉を寄せて何か良い方法を考えようとしていましたが、何も思いつかないようで、親指の爪を悔しそうにかじります。

勝利を確信したオ・パイはニヤリと笑いました。

「・・・死刑は確定した。だが、そうだな。盗賊の森の場所を教えなければ罪をもっと軽くしてやってもいい。鞭叩きの上に斬首のところを、斬首だけにして楽に死なせてやるうではないか」

ぜんぜんおいしくない提案に、ノアはベーツと舌を出しました。

オ・パイはフツと笑います。

「そうか。いいだろう。死刑執行は明朝だ！ それまでは牢に放り込んでおけ！！」

オ・パイがそう命令をだすと、兵士達はまたノアを一行にして地下へと連れて行きました……………。

ジメジメした地下牢。ムカデがはい回り、ネズミが赤い目をチカチカさせてチユーと鳴きます。

薄暗い頭上を横切る錆び付いた配管の繋ぎ目からは、鼻につく黒い汚水がポチャポチャとしたり落ちます。

そんな非衛生的な場所にノアたち四人は押し込まれます。

「ふんちヨ！ ふんちヨ！」

アホンが牢の格子扉を閉じようとしませんがビクともしません。腐食して蝶番が固まってしまっているのです。両足を格子に引っかけ、顔を真っ赤にし、全身のバネを利用して引っ張りますが、赤い錆が

パラパラ落ちるだけです。

「がんばれべー。アホン、がんばれべー。」
ダラが後ろで応援します。

「がんばれべーって何チヨ！ 気の抜ける応援なんていらぬチヨ！
！ そもそもなんで応援してるチヨ！ お前も引つ張るチヨ！！」
「んだかー。わかつたべー」

呑気な動作で頷き、ダラが格子に手をかけます。

「ふんべれべー」

変な掛け声でダラが力任せに引つ張ります。ギギギと扉が動き、ガツチャーンと閉まりました。その衝撃で、扉を掴んでいたアホンが尻餅をつきます。

「アイタタ。でも、これで良いチヨ」

アホンが尻を叩きながら立ち上がり、ポケットから鍵を取り出して牢を閉めました。腐食しているせいで、キーという悲鳴みたいな嫌な音です。ボーズ太郎が耳を抑えました。あ。ボーズ星人の耳ってデムと同じ位置にあるんですけどね。ちなみにメルはパタンと耳を下ろすだけで充分のようです。

「ここで明日まで大人しくしてるチヨ！ そうそう。お前らの荷物はおそこにあるチヨ。だから心配しなくていいチヨ！」

アホンは牢の奥の大きなズダ袋を指さします。どうやらノアたちを入れる前に置いてあったようです。

アホンはフフンと笑って、腰に手を当てて行ってしまいました。ですが、ダラだけは微動だにせずに牢の中を見つめています。

しばらくして、アホンが駆けて戻ってきました。

「ボスが見張ってるって言ったのは、別にずっと牢の中を見てるって意味じゃないチヨ！ こんなカビ臭いところにはいたくないチヨ！
上で番してりゃいいんだチヨ！！」

「あー。んだかー」

ポンと手を叩き、ダラは頷きます。それで怒るアホンの後についていきました……。

つまらない漫才を見終えて、バーボンはズダ袋から煙草とマッチを取り出しました。そして火を付け、フーツと煙を吐きます。

「・・・これ、アタシの見間違じゃないよね」

ノアがガツクリと肩を落とします。メルもポーズ太郎もコクリと頷きます。

「一度、奴らの頭の中を開けてみてみてえもんだな。・・・みる、ご丁寧に武器まで入ってやがる」

バーボンは、ズダ袋から鞭を取り出し装着します。そしてダガーをノアに渡しました。

腰にダガーを差しながら、ノアはスルリと牢から出て行きます。そうです。鍵のかかった牢からスルリと抜け出たのです！ まるでマジシャンのようです。ですが、違います。これはマジックでもありません。

「あいつら・・・ほーんとに、アホなんだな」

「だから、アホンダラなんだろ」

バーボンもスルリと牢から出ながら言いました。メルやポーズ太郎もです。

どういうことでしょう。それは実に簡単な話です。堅牢な鉄格子ではありませんが、扉の横が腐食して、鉄が途中で折れていたのです。それで、まるまる一人が抜けられるような隙間ができていたわけです。これでは、いくら扉をしっかり閉めようが意味がありません。

意図せずに、簡単に脱獄できた四人はそれぞれ顔を見合わせました。

「・・・これから、どうしましょうか」

メルが不安気に言います。長い耳がヘタンと倒れていました。

「オ・パイの野郎は、ポーズ星人を深く憎んでいる。このままじゃすまねえだろうな・・・」

「なんで、そんなに我らが憎まれるポー！ 我らは・・・何もしないポー！ ただ静かに暮らしたかっただけなんだポー！！」

ポーズ太郎が困惑して言うのに、バーボンは苦い顔をしました。

「ファルやメリンがデムを蔑視しているだけじゃねえ。同じデムの中でも、差別や偏見ってのがあるんだ。盗賊や浮浪者なんてのは生きていく価値がねえって考えている奴らも多くいる。ましてや、ボーズ星人ってのは退化を選択した種族だ。デムこそが優秀な種族だって考える一部の過激派にや・・・デム以外の他種は滅ぼしてもいいだろうって主張するヤツもいる。オ・パイなんてその典型だな」

「そんな・・・。同じ人間同士で。なんで、そんなことが起きるんでしょう？ 悲しすぎます」

メルはポロポロと涙を流しました。

「オ・パイをこのままにしてはおけない・・・。それに、親分のところに行つたボーズ星人たちのことも気になる。いったん盗賊の森に戻ろう」

なかなか戻つてこないノアを、きつとバツカレスもシユタイナもヤグルも心配していることでしょう。急に来たボーズ星人たちを見て、驚いているかもしれません。とりあえず、親分に報告を入れようとノアは思ったのでした。

「・・・戻るのか」

バーボンが神妙な顔をして、何か言いたそうにいました。ノアは首を少し傾げます。

「うん。バツカレス親分に・・・オ・パイの横暴を伝えなきゃ。オルガノツソのこともある。何かきつと企んでいるに違いないんだ！ 親分だったら・・・何か考えてくれるかもしれない」

ノアは、バーボンが反対するかもしれないと思っていました。だって、顎に手を当てて、何か言いたそうにしていたからです。でも、バーボンは少し上を見上げただけでした。

「・・・そうだな。戻るか」

まるで上の空のように、バーボンは小さくそう言いました。ノアは変だと思いました。それ以上は追求しませんでした・・・。

牢獄から出て、長い階段を抜けると・・・そこは城の裏庭に続いていました。なにせ目隠しをされて連れてこられたので、ここが城

の中であつても、どこらへんの場所なのかまでは解らなかつたので
す。

階段の出口から、ノアが顔をヒョコツと出すと、アホンとダラが見張りをしている姿がありました。どうやら二人だけです。

しかし、この二人本当にマヌケなんでしょう。二人して同じ方向を見張っています。それも、なぜか牢のある階段とは反対側をです。何かから何を見張っているつもりなんでしょう。おかげで、ノアたちは誰にもバレることなくジャスト城を後にしました……。

なかなか戻らないノアを心配し、シユタイナやヤグルを含めた総勢二十名の部下を動員して、ジャスト城付近を偵察していたバツカレスですが、どこをどう捜してもノアがいた形跡がありません。

盗賊なんて形跡なんか残すわけないのが当然なのですが、それにしても忽然と消えてしまったかのようなのです。そして、なんの情報も手に入れられずに、落胆しながら盗賊の森に戻ってきた時でした。

切り株に頭を打ち付けて自分を責めていたバツカレスは、誰にも手がつけられないでいました。

そんな時に彼らは突然にやってきました。白い姿の奇妙な七人組。揃いも揃って「ボー」と鳴く珍妙な来客。

ボーズ長老の話で、ノアの無事を確認できた時にはバツカレスは天にも昇る気持ちでした。豪快に男泣きをし、ズズツと鼻水をすすって、祝杯の酒をボーズ星人たちとあけます。歓迎の印もこもったものでした。

「いやいや、長老さん！　うちのノアがお世話になりましたなーあ！　ういっく！」

「いやいや、世話になったのは我らのほうだ。……しかし、我らを逃がすために、デムの兵隊に囲まれて、ノアたちは果たして無事だろうか？」

ポーズ長老は注がれる酒を見ながら難しい顔をします。しかし、バツカレスは大笑いしました。

「あの一緒にいたバーボンって医者はまだもんじゃねえんです！
アイツなら、何をどうやっても・・・ノアを無事に連れて帰ってきてくれますって！ だから、心配するこたあねえ！ ガツハツハツハ！」

陽気に笑うバツカレスに、ポーズ長老も安心したように頷きます。よほど、バーボンのことを信頼しているのでしょう。ポーズ長老はクイツと酒をあおりました。

「バツカレス殿。我らを受け入れ、それだけにとどまらず、こんなに旨い酒を振る舞ってくれるとは・・・感謝する。ういっく！」
赤い顔をして乾杯をする二人です。あっという間に、酒樽が底をついてしまいました。

そんなことをしていると、突然にノアが茂みから飛び出してきました。全力で走ってきたのでしょうか。髪は散り散りに乱れ、ゼエーゼエーと肩で息をしています。

ノアの姿を見た瞬間、バツカレスの表情がなぜか一瞬だけ強張りしました。ですが、すぐにいつもの顔に戻ります。

「おー！ ノア、無事だったか！！ このポーズ長老さんから話は聞いた。しかし、俺が酔って変なこと言っちゃまってわるかったな。だが、とりあえず無事で良かった！！」

ガツハハハと笑うバツカレス。ポーズ長老にノアの安否を聞くまでの狼狽えていた様は、恥ずかしいのでまったく微塵も見せません。しかし、ノアは酒樽を睨み付け、首を強く横に振りしました。

「親分！！ な、なに昼間っから酒のんでんだよッ！！」

ノアは、ポーズ星人たちが無事に辿り着いて良かったという思いと、昼間から悠々と酒をあおっているバツカレスとポーズ長老を見て憤りを感じます。こんなに自分は大変な思いをしたというのに・・・という感じです。

「ノア！！」

「ああ、ノア、ほんとうに無事で良かった！」

騒ぎを聞きつけ、シユタイナとヤグルも顔を出します。そろそろと、盗賊の仲間達とボーズ星人たちが喜びの顔で出てきました。ですが、ノアの表情は硬いままです。

「メルメルよ。無事だったか！ ああ、ありがとう。ありがとう。ノア」

「長老様……。良かった。本当に」

「長老ボー！ 皆も元気だボー！」

ようやくノアに追いつき、メル、ボーズ太郎たちが姿を現しました。ボーズ長老と共に他のボーズ星人たちと再会を喜びます。

「よー。バーボン。久しぶりだな」

「久しぶり……。じゃねえよ」

コップに残った酒を最後までグイツとあおり、最後に茂みから出てきたバーボンをバツカレスは遠い目で見ます。バーボンはろくに返事もせず、そっぽを向いて小さくチツと舌打ちをしました。

「親分！ ボーズ長老から話は聞いたんだろ！？ 今、大変なんだ！ オ・パイが、ボーズ星人たちを狩ろうとしてて……。捜しているんだ！ アタシたちは捕まって、命からがら逃げてきたんだけれど……」

状況説明があまり得意ではないノアは、身振り手振りをまじえて必死に説明します。ですが、バツカレスもボーズ長老を含むボーズ星人たちも、誰一人動揺した様子はみせません。ノアは、なんだか自分だけが焦っていて変な気持ちになりました。

説明を終えても、バツカレスは空になった酒瓶をただじつと見ているだけです。それを部下達が不安そうに見ていました。ノアも喉をゴクリと動かします。

「……。だから、親分」

「バツカレス盗賊団はボーズ星人たちと共に……。この盗賊の森を離れるってことか？」

ちゃんと話を理解していたバツカレスはそう呟きます。ノアは親

分が理解してくれたものと喜びました。しかし、バツカレスはバーボンをギロリと睨み付けます。

「・・・らしくねえことをしたな。バーボン。そのままノアと一緒に逃げれば良かったじゃねえか。ノアを生かすために、俺らを殺すか？」

バツカレスの言葉に、バーボンは強く目を閉じます。

「バツカレス。俺は・・・俺はノアの幸せを願っている。このままじゃいけねえ。そのためならなんでもする」

バーボンがうつすら目を開き、バツカレスを睨み返しながら言います。

二人の話が見えてこないノアもメルもボーズ太郎も、そして盗賊の皆もお口お口としました。

「アタシを生かすために・・・親分たちを殺す？　どういうこと？　なんで、そんな風になるんだよ！？」

ノアが尋ねた瞬間、森中が赤く染まりました。夕日でしょうか？　いえ、それにはまだ早いです。パチパチという音が遠くから聞こえてきます。なにやら熱気がユラユラと流れているのが解ります。

「オ・パイだ。チツ。やっぱりノアの跡をつけてきやがったか・・・」

バツカレスが腰のダガーを抜きながら、ゆっくりと立ち上がりましました。

「おい。野郎ども！　城の魔導士が森に火をつけやがった！　十人は風上に向かい、魔導士を倒して消火に当たれ。いいか、一人で行動するな。最低、二人ないし三人でチームになって対応しろ」

手早く指示を出すと、部下たちがそれぞれ動き出しました。

ノアの膝がガクガクと震えます。動きたいのに、何かしたいのに気持ちだけが焦って空回りします。自分は何をしたのでしょうか。どんなミスをおかしたのでしょうか。ノアの頭はパニックを起こしていました。

「な、なんで・・・？」

愕然としながら言うノアに、怖い顔をしていたバツカレスがフツとやわらげます。

「いいか。ノア。誰かを守りたいとか救いたいと思う気持ちは大事だ……。だが、自分の気持ちだけで行動しちゃいけない。自分の基準で人を救おうなんてムシがいい話なわけだ。ガツハツハ、これでまた一つ勉強になったな！」

バツカレスは優しく笑い、ノアの頭にボンと手を乗せます。ノアの目から大粒の涙がこぼれました。

「……俺たちをみすみす逃がしたのは、オ・パイの策略さ。泳がせれば、この場所に辿り着くと考えていたんだろう」

バーボンが煙草に火をつけながら言いました。

周囲の火も、徐々に自分たちのいる方向へ流れてきているようです。火の粉が空中で舞っていました。

「そんな……。バーボンおじさん、どうして？」

ノアが尋ねます。ですが、バーボンは首を横に振りました。

「ノア。いや、ノアだけじゃねえ。メルもだ。このまま上手く生き延びても、お前たちはお尋ね者だ。まだお前たちは若い。こんなところで犠牲になっちゃいけないだよ。オ・パイの目的は、あくまでポーズ星人や盗賊団だ。お前達の命をとることじゃねえ」

バーボンは、オ・パイが尾行を放っていたことに気づいていました。ですが、ノアとメルのために、あえてバツカレス盗賊団とポーズ星人たちを犠牲にしようと考えたのです。オ・パイの意思を、ノアとメルから遠ざけるつもりだったのです。

バツカレスが頷くと、シユタイナとヤグルが、素早くノアとメルを羽交い締めにしました。

「離せ！ アタシも戦う！！」

「いや！ バーボンさん！ バーボンさん！！」

延焼していく森。燃えている箇所が風にあおられ、熱風が吹きましました。ポーズ星人たちが一カ所に集まります。皆、荒い息を吐いています。

「わ、我らは・・・火に弱いボー。長老、このままじゃ・・・」

ボーズ太郎は皆を心配していました。そういう自分も、熱風に当てられて苦しそうです。

「ボーズ太郎よ。お前は生き延びて、我らボーズ星人のことを後生にまで語り継いでくれ」

ボーズ長老はそう言って、ボーズ太郎の首に青いネックレスをかけた。

「これは・・・」

「火から身を守ってくれる魔法の入った鉱石・・・。これを身につけていれば大丈夫だ」

「長老!!」

ボーズ星人たちが、ボーズ太郎をノアの方に突き飛ばします。

「ダメだ! 死んじゃ・・・なんにもならないッ!!」

ノアが叫びます。メルが嗚咽混じりに祈ります。ですが、ボーズ長老は優しく、快くニツと笑いました。

「ありがとうございます・・・。心優しき、スタッドの意思を継ぐ少女ノアよ。我らはお前に会えて良かった。さらばだ」

ボーズ長老がそう言い、ボーズ星人たちがそれぞれ手を振ります。その瞬間、燃えさかる炎がその辺りを燃やし尽くしました。魔法士が放った魔法です。火に弱いボーズ星人たちは、アイスクリームのように溶けて、叫ぶ間もなく散っていきます。

「う、うそだああああ!!」

「いやああー!!」

「長老!! みんなーボーツ!!」

引きずられていきながら、ノアとメルが泣きながら叫びます。ですが、シュタイナもヤグルも手を決してゆるめず、ズルズルと二人をこの場から離していきました。呆然としていたボーズ太郎も、他の盗賊たちが同じように羽交い締めにして連れて行きます。

燃えさかる炎の中、オ・パイがアホンとダラを引き連れて姿を現しました。

「・・・ネズミが。こんなところに巣くつていたか。ボーズ星人どもども、害虫はまともて私が駆除してやる。しかし、アホンとダラの迫真の演技のおかげで、こつもあつさり貴様らの居場所がわかるとはな。礼を言つてやりたいぐらいだ」

オ・パイがそう言うのに、アホンもダラも驚いた顔をします。

「え？ え、演技だつた・・・チヨ????」

「そつだべかー???」

顔を見合わせて首を傾げる二人に、オ・パイは怪訝そつな顔をしました。が、すぐにバツカレスのほうを睨み付けます。

「バツカレス。協力してもらうぜ！」

バーボンが煙草を捨ててニヤリと笑つと、バツカレスは口をへの字に曲げました。

「くそつたれ。なにが協力だ・・・。ノアを守るためとはいえ、やりすぎだぜ」

「でも、俺はノアの幸せをまず第一に願つている！」

「ああ！ ああ！ 俺だつてそつだ！ 父親みてえなもんだからな！ ノアが幸せなのが一番だぜツ！！」

渋々とバツカレスがダガーを構えます。バーボンもその横に立つて鞭を振るいました。

「フツ・・・。ネズミがどこまでやるかな？」

盗賊の森の外れ。ノアとメルとボーズ太郎が、ようやく羽交い締めから解放されます。

「この先は、盗賊の森じゃない。メリンの領土だ。少し行けば、メリンの集落であるクラレ村に着く。そこまでは、オ・パイも追つてはこれないだろう」

シユタイナが先の森を指さしてそう言います。

振り返ると、赤く燃えている火がチラチラと見えました。あそこで今頃はバツカレスとバーボンが必死にオ・パイと交戦していることでしょう。

「俺たちは・・・親分ら加勢にいくよ。達者でな、ノア」

ヤグルが鼻の下を擦りながら言いました。名残惜しいとは思ってはいても、大好きなノアのために何かができることが誇らしそうです。

しかし、ノアはイヤだと首を横に振ります。駄々っ子のようにブンブンと勢いよく振ります。

「アタシも・・・アタシも行く！ でないと、みんな・・・みんな死んじゃうよ！！」

シユタイナもヤグルも、他の盗賊達も顔を見合わせました。そしてシユタイナがコクリと頷きます。

「ノア！ よく聞くんだ・・・。いいかい？ 親分やバーボン先生がどうして命を賭けてノアを助けたと思う？ ここで戻ったら、その親分やバーボン先生の気持ちを踏みにじることになる」

シユタイナが、小さな子供に言い聞かせるかのように優しい口調で言いました。

「大丈夫だって。俺たちは死に行くんじゃないさ。それに、あの強い親分が、オ・パイなんかに負けると思っかい？」

ヤグルが笑います。でも、ノアは笑い返せませんでした。辛くて悲しくて、引き留めなければいけないのに声ができません。何をいえばいいのか思いつかないのです。

「ノア。君はこれから、メリンやファルの長に出会ってこのことを告げるんだ・・・。オ・パイは何か恐ろしいことを企んでいるのかもしれない。それは、親分はそのことを予感してたと言っていた。今回、ボーズ星人たちが姿を現したことで親分はそれに確信をもったみたいだった」

シユタイナはそう言って、踵を返しました。そしてヤグルたちと共に、再び盗賊の森へと戻っていきました・・・。

それからどれくらいの時が流れたでしょう・・・。

ノアもメルもボーズ太郎も、その場から動けずにいきました。何度

も何度も盗賊の森に引き返そうと思いましたが。でも、いまさら引き返して何ができるでしょう。シュタイナの言うとおり、バツカレスやバーボンの行為が無駄になってしまします。そう考えてしまうと、どうしていいか解らないのです。

「スタッドに会いたい……。そうすれば、次にどうすればいいか解るかもしれない」

ノアはポツリとそう呟きました。

ずっと、ノアはオルガノツソとの戦いの時に聞こえたスタッドの声を思い出していました。そしてポーズ長老から伝えられたノアへのメッセージ。『ランドレークのラグナロク遺跡で待つ』という言葉。これが、今のノアの唯一の支えになっていたのです。

メルもポーズ太郎も顔を上げます。涙の痕が、線となって頬を伝っていました。

「そうです。スタッドさんなら、きっと助けてくれるはず……。事情を伝えれば、オ・パイをこのまま放っておいたりなんかしないでしょー！」

みるみるうちに、皆に気力がみなぎってきます。そうです。今できることをするしかないのです。ただ手をこまねいて、何もしていないよりは遙かにましです。

「そうだボー！ スタッドにお願いして、バーボン先生らを助けてもらっボー！！」

ポーズ太郎がヒョイと立ち上がります。手には、長老からもらったペンダントを握りしめていました。

「ああ。バツカレス親分もバーボンおじさんも……。きっと大丈夫だ。シュタイナやヤグルだっついていてるんだから。アタシたちは一刻も早くスタッドを連れてこよう！！」

その力強い言葉に、メルもポーズ太郎も強く強く頷きます。

「……アタシたちは、もう進むしかないんだ」

ノアは、ギョツと自分を勇気づけるために拳を握りました……

……。

第五章 無道の暗殺者オ・パイと好色王子レイ（後書き）

アホンとダラの阿呆さ加減はゲームの方がわかりやすいんですが、ゲームのネタをそのまま表現してみました。少しでも笑ってもらえればいいんですが・・・文章だと難しいですね。

いよいよ、ノアの旅立ちの時です。あ。オ・パイの野望・・・まだ明らかになっていませんね。嘘つきました。ただ非道いやつだというのが間違いない、かとw

次回はようやくテム以外の人々がでてきます。もちろん好色王子もでてきます。若い子たちだけになったんで、話もそれなりに展開が早くなっていく・・・と思います。

第六章 メリンの霊希碑

緑、緑、緑・・・見渡す限り緑一色の森。なんの変哲もない風景に、ノアもメルもボーズ太郎も辟易としてきます。緑は嫌いな色ではありませんが、こうまで緑ばかりだと逆に気持ちが悪くなつてきます。

スタッドと出会うため、雄々しく胸を張って歩みを進めていた三人でしたが、今はちよつと前屈みになつています。顔には、疲れとも失望ともとれる雰囲気かじみ出ています。

「あー。クラレ村つてのはまだなのかよあ」

ノアが叫びます。ですが、記憶を失っているメルはもちろんのこと、この中の誰一人としてクラレ村にいったことがないのです。どれだけ離れているのかも解らないのです。距離もわからずに、ただひたすら歩き続けるのは辛いものがありました。

「ああ、大丈夫？ ボーズ太郎」

メルがよろけるボーズ太郎を支えます。ボーズ太郎は青い顔をしてへろへろと座り込んでしまいました。

ノアもメルも、休憩しようかと頷きあつてその場に座ります。メルが小さく氷の魔法を使ってハンカチを冷やし、ボーズ太郎の額に当てました。ボーズ太郎の表情が少し和らぎます。

「メリンの住むクラレ村・・・。オ・パイは、私の存在を確認できなかったと言っていました。でも、私はメリンです。私はそこから来たんでしょか？」

メルが不安そうに言います。ノアは苦虫を噛みつぶしたかのような顔で頭をバリバリ掻きました。

「なんともいえないな。オ・パイのヤツが嘘ついている可能性もあるし」

「嘘？ そんなことをして、どんなメリットがあるんですか？」

「そ、そりゃ・・・うーん」

ノアは適当に言い出した手前、頭を捻って考えますが、考えられる理由は出てきません。

「まあ、クラレ村につきや解るって……。たまたまオ・パイが聞いた人が、メルを知らなかっただけかもしれないじゃない」

そんなことはないと思いつつも、ノアはそう言いました。「そうですね」とだけ言って、メルもそれ以上は追求しませんでした。

メルは物憂げな表情で、倒れているボーズ太郎をあおいでやっています。

しばらく、沈黙の時間が流れました。ノアは大きく息を吐いて、天を見上げます。高い、高い晴天です……。あんな恐ろしい出来事がおきてから半日として経っていません。それなのに、こんな平和を満喫しているのが、ノアにとっても、とても不思議でした。申し訳ないような気持ちも感じます。

「……ノア。一つ、聞いてもいい？」

静かにメルが口を開きました。

「うん？」

空を飛ぶ鳥を見ていたノアは、ぼんやりとした表情でメル顔を見やります。メルはさつきと変わらぬ物憂げな表情のままでした。

「……バーボンさんは、……その。どういう人なんですか？」

消え入りそうな声で、メルはそう言いました。耳を澄ましているけれどわからないような小さな声です。よく見ると、メルは顔を仄かにピンク色に染めていました。

ノアだって女の子です。そこはピーンときた顔をします。顎に手をあてて、「はーん」の仕草です。

「なんでバーボンおじさん？ どういう人ってえ？」

ノアはずいっとメルに近づき、ちょっと意地悪してみたくなくて聞き返します。メルの顔がボツと紅くなりました。

「い、いえ……。別に深い意味は……。その……」

「深い意味い？」

ノアがしたり顔で、さらにずいっとメルに近づきます。メルの耳

がピンと立ちました。三ツ口がモゴモゴと恥ずかしそうに動きます。そんな風に紅くなっていたメルですが、急にシユンとした顔となりました。

「きつと・・・バーボンさんは無事ですよね。もちろん、バツカレスさんたちも」

メルがギュツと胸に手を当てて言います。ボーズ星人たちの死を哀しみ、バーボンやバツカレスたちの安否を心から願っているのです。

ノアも唇を噛んで、真面目な顔つきになりました。

「大丈夫。大丈夫だって。バーボンおじさんはそう簡単にはくたばらないよ！それに、バツカレス親分だって強い。もし、オ・パイに勝てなくても、あの場から逃げるぐらいのことはできるさ」

まるで自分に言い聞かせるかのように、ノアは言います。メルもようやく小さく微笑みました。ずっと不安だったのです。

ノアもニコツと笑い返します。

そして、「うーん」ともったいぶりながら、わざとらしく腕組みをしました。

「そう。バーボンおじさんねえー。そうだね。いつもはいい加減だけど、決めるところは決める・・・」

バーボンの話をしようとした瞬間、ガサガサと付近の茂みが揺れました。

ノアがバツと立ち上がってダガーを構え、メルが身体をすくめまです。ボーズ太郎はハツと飛び起きてキョロキョロします。

「誰だ！？でてこい！！」

オ・パイの追っ手かもしれない。ノアは喉をゴクリと鳴らしました。

観念したかのように、茂みから出てきたのは、青いマントの旅装束に、金の装飾の施された高価な剣を腰に下げ、王族の証である獅子の紋章ペンダントをした、あのレイ王子でした。

ノアもメルも目を丸くして驚いています。ボーズ太郎は、レイ王

子の顔を忘れてしまったようでキョトンとしていましたが・・・。
「安心してくれ。敵意はない。なかなか出るタイミングが掴めなくて・・・びっくりさせてすまない」

レイは両手をあげて、無害であると主張します。

「な、なんでジャスト城の王子の・・・あなたがこんなところにいるのさ？」

ノアの問いはもつともです。仮にも王族が、お供もつけずにこんな国境の森にいるなんて偶然にしても不自然です。

レイも承知しているようで、金色の乱れた前髪を払いながら軽く頷きます。

「・・・オ・パイのことだ。ヤツのことで謝罪しなければと思ったんだ。今回の事は、国を代表して、王子の俺が謝らなければならぬ。一大臣の好きにさせ、横暴の限りを尽くしているのは、王に力も人望もないせいだ。盗賊の森への侵攻も止めることができなかつた・・・本当にすまない」

レイは辛そうな顔をして頭を下げます。そんなことを素直に謝られてしまい、逆にノアの方が戸惑います。

「あんたに恨みがあるわけじゃないし、あんたに謝ってもらってもね。別にいいよ。しょうがないことじゃん。全部はオ・パイが悪いわけだしさ」

ノアはばつが悪そうに頬を掻きながら言います。メルもボーズ太郎も同じ気持ちで頷きました。王族を恨む気持ちはなかったのです。「ああ。ありがとう。・・・だが、このままにしてはおけない。確かにオ・パイが来る前から、国は無駄な浪費がひどく、その対策に臣民に重税を科すような悪政を強いていた。ヤツが大臣になってからは浪費そのものは止められ、国家自体は貯蓄できる余裕ができたが・・・民に還元などされず、重税はますますきつくなっている」

シユタイナがそんなことを言っていたかとノアは思い出します。

圧政に耐えかねた年寄りなどが盗賊の森に逃げ込み、それを仕方なく盗賊たちが面倒をみたり、無事に町に送り帰してやってるので

す。そういった人たちから、国の極悪非道ぶりはノアもある程度聞いてはいたのです。

「で、部下や政治について悩んでいるそんな王子様が、なんでアタシたちを追ってきたわけ？ ただ謝りたいだけなんてわけないよね」

ノアが結論を急ぎました。レイはギクリとした顔をします。

「あ、ああ。お前たちはオ・パイを倒すつもりなんだろう？ 決して、盗み聞きするつもりはなかったんだが・・・スタッドの名を出していたよな」

ノアは腕を組んで、口をへの字にします。

「俺一人の力じゃオ・パイを倒せない。だから、お前たちの旅に同行させてくれないか？」

レイの目は真っ直ぐでした。なまじか美形なので、余計に真摯な感じがします。

ノアとメルが顔を見合わせます。メルはノアに任せるという目配せをしました。首をゴキゴキと鳴らし、ノアはフーツと大きく溜息を吐き出します。

「アタシは盗賊だよ」

「承知の上だ。今の王位に興味はない。権力は捨てたつもりで出てきたんだ」

それを聞いて、ノアの表情が少し柔らかくなります。ここまでの覚悟があるわけです。レイのことを少し信用しても良いと思ったのです。

「まあ、ジャスト城でアタシたちを助けようとしてくれたしね。アタシは仲間にして問題ないと思う。あんたらはどう思う？ メル？
ボーズ太郎？」

「良いと思います。いまは同じ気持ちを持つ仲間が一人でも多い方が心強いですし」

「賛成だボー」

二人ともコクコクと頷きます。

「私はメルメルと言います。よろしく願いますね。レイ」

メルがニツコリ笑うのに、レイは飛び上がらんばかりの過剰な反応をしました。

「あ、ああ！　メルメルっていうのか・・・そうか！　ヨロシク！」
キョトンとするメルの手を、無理矢理つかんでブンブンと握手するレイです。

「なんか、他の目的のが大きそうだけどな」

ノアはジト目で、はしゃいでいるレイを見やりました。

こうして、ジャスト城王子レイが仲間に入ったのです・・・。

レイ王子はよくありがちなただのボンボンではなく、腰の剣も飾りではありませんでした。

この森でも数多の魔物、朴念仁やメルシーなどが襲いかかってきますが、ノアと競うかのように、レイも輝くサーベルでバツタバツと切り伏せていきます。王国剣技は一通り習得しているのです。

なかなかの戦力ではありましたが、ただ魔物を倒した後に、決め顔をわざわざメルに向けるのだけは頂けません。まあ、メル自身は気づいていませんでしたが・・・。

後方支援のメルとボーズ太郎も、なかなか良いコンビネーションです。スタッドの魔法の影響か、ボーズ太郎は次々と戦闘補助や簡易治癒の魔法を会得していきます。メルの魔法も、使う度に研ぎ澄まされて、より正確で強力な威力をもたらします。二人揃って、ノアやレイをガツチリとサポートします。

そんな快進撃で小一時間も歩いたぐらいでしょう。ようやく、森の間に民家の屋根らしきものが見えてきました。

「クラレ村は、三種族会議をレムジンで開くときに通った場所なんだ。王族の俺か、メルが一緒なら入れてもらえるはずだ」

レイがメルにウインクしながら言います。

「・・・我でも大丈夫ボー？」

不安そうなボーズ太郎でしたが、レイはその肩をポンポンと叩き

ます。

「ボーズ太郎は、従者つてことにすれば平気さ」

「レイの手下ボー？」

ボーズ太郎は不満そうに口を尖らしました。レイは面白そうに笑います。

「誰かメルを知ってる人がいるといいね。例え、メルがあの村に住んでなかったとしてもさ」

ノアの言葉に、メルがゆっくりと頷きます。

「・・・ねえ、レイ。メリンの村は他にはどれくらいあるんですか？」

メルの問いかけに、レイは少し困った顔をしました。

「メリンの集落は・・・その。クラレ村しかないんだ」

「え？ どういうこと？」

怪訝そうにノアが尋ねると、レイは考えるかのように上を見ながら、前髪を指先でクルツと巻いて弄びます。

「言葉通りの意味さ。メリンの首都ミルミ城と周辺の村々は、二十年前に魔神バルバドスに真っ先に滅ぼされたんだ。いまでも、魔神の呪いで色濃く汚染されていて、誰一人立ち入られない死の国。国を失ったメリンは、ほとんどがクラレ村に移ったんだ」

メルは長い睫を伏せ、うつむきます。

「・・・もしクラレ村にいたのでないとしたら、私はどこから来たのでしょうか。どうして、退化の大森林などでさまよっていたんでしょうか」

ノアがパチンとレイの頭を叩きます。メルが落ち込んでいることに気づいたレイは、慌ててフォローを考えます。

「あ、あの・・・。別にクラレ村だけじゃなく、レムジンにもメリンはいるからさ」

そう言うレイでしたが、メルは僅かに頷いただけでその暗い表情までは変わることはありませんでした・・・。。。

大きな、大きな、崖の縁。それこそジャスト城すら飲み込んでしまふような大きさの、まるで底の見えない深み。そんな断崖が、森を抜けた所がありました。

その崖に、今にも崩れ落ちそうな吊り橋がかかっています。崖の間に、崖に飲み込まれずに取り残された土地が点在し、その間を繋ぐように橋がかかっているのです。クラレ村は、こうした崖の間の土地に家を建てて成り立っているのです。

「・・・魔神バルバトスが暴れたせいで、こういう地形になったっていう話だ」

「じゃ、シャレにならないね・・・。いくら、神様だからって地形かえるなんてどんだけだよ」

ノアが目をパチクリさせながら言います。

「だから、ファルの剣士も、メリンの魔道士も歯が立たず・・・。スタッドが封印魔法を施してようやく鎮められたんだ」

「ボー。やっぱりスタッドはスゴイヤツだボー！」

自分のことのように、ボーズ太郎は胸を張って言いました。

村の入り口につくと、メルとレイが先頭に立ちます。吊り橋の向こうのメリンらしき人物が、警戒したように手にもった棒を構えましました。

「・・・そこで止まれ。何者だ？」

メルと同じような耳。それが警戒しているようにピンと上に立っています。よく日焼けした浅黒い若者で、メルのように白ではなく、茶色っぽい色の耳をしています。

「俺はジャスト城の王子レイだ。危急の訳あって、レムジンに向かいたい。長居するつもりはない。どうか靈希碑れいきひの使用許可を村長殿にお伺い願いたい」

レイはハキハキと言い、自分の身分証であるペンダントをかざします。権力を捨てたつもりだなんて言っただけ、利用できるものはなんでも利用しようとしてことでしょう。その割り切った考えに、ちょっとノアは好感を持ちました。

「フン。デムの王子が・・・霊希碑を使いたいだと？」

メリンの若者は、小馬鹿にしたようにフンと鼻を鳴らしました。それから、チラツとメルを見やります。一瞬だけ驚いたような顔をしましたが、それでもすぐに視線を逸らしてしまいました。

「すみません。わ、私・・・その、退化の森で迷っていて。記憶がなくて・・・。すみません。わ、私をご存じありませんか？ 私はいったい誰なんですか？」

メルが青白い顔で、必死で尋ねます。不安が頂点に達したのでしよう。それは、いつものメルらしくありませんでした。

メリンの若者は、「うっ」と言つてメルから離れます。怯えたように、汚いものに触れるかのように、メルを避けたのです。メルが悲しげになり、上げていた手がダランと落ちます。ノアとレイ、ボーズ太郎は眉間シワを寄せましたが、ここはグツと堪えます。

「そ、村長に聞け。俺は・・・何もしらん」

苦々しい顔で、メリンの若者はそう素っ気なく言います。

「・・・霊希碑の件は、俺から伝えておく。村長の家は村の奥だ。あまり、ウロチヨロセずに向かえ」

逃げ去るように、メリンの若者は走り去っていつてしまいました。

「んだよー。あの態度はさ。気にすんなよ、メル」

ノアがメルの肩に触れます。メルは小刻みに震えていました。ですが、無理に笑顔を作ります。ノアはいたたまれなくなり、ギョツとメルを抱いて背中を叩きます。メルは為されるがままにしています。

しばらくして、メルが落ち着いたのを見て、四人は村の中に入っていきます。

「そういえば、レイ。霊希碑って何ボー？」

気まずい無言に耐えかねたボーズ太郎が尋ねます。

「魔法レポート装置さ。レムジンには、あの崖の先にあるガラガ山道を抜けていかなきゃいけないんだ」

レイが大きな崖の方を指しながら言います。確かに徒歩では行け

そうにありません。

ノアたち四人は、吊り橋を渡り、民家や道具屋がある場所に行きます。

道具屋の店先に珍しい薬草があったので、ノアがちょっと見ようと近づいてみるや、店主はバババツと品物をまとめて風呂敷にしまつてしまいます。そして、嫌な目で睨みつけてくるのです。

「・・・なんだよ、感じ悪いなあ」

「メリンもファルも基本的にデムを嫌っているからな。スタッドぐらいにならないと認めてもらえないんだ」

レイが気にしてもしょうがないと言います。

気づいたら、村人の全員がノアたちを冷たい目で見ているのです。老人も、女性も、子供も・・・長い耳をピンと立て、警戒に恐怖、敬遠や侮蔑といった視線を送っています。

嫌な視線をかくぐり、一番奥の立派な屋敷の前に来ます。白壁の豪華なシャトー。どう見ても、この村の権力者の家です。

大きな木の下に、さっき入口で見かけた若者が立っています。アゴをしゃくり、屋敷の扉のほうに促します。入れということです。

どこも家もそうですが、長い耳に合わせて扉が高くなっています。ノアたちは揃って扉をくぐりました。

デムに比べ、あまりこだわった装飾品は少なく、むしろ自然のものを自然のまま生かした家具が多いのが特徴です。大きなクルミを半分に分った小物入れ、曲がった木をそのまま使った柱。乾燥させた葉っぱをたくさん集めた絨毯。草を編んだカーテン。いずれも、ノアにとっては初めて見るものです。

玄関を過ぎてすぐの客間。巨木の年齢が克明に表れたテーブルの前に腰掛けた老人がピクリと長い眉を動かします。

「・・・デムの客人なあ、おみやあさんらかい？」

しわがれた声で言います。

ツルリと禿げ上がった頭から、毛もないむき出しの肌色の耳。まるで鳥の手羽先のように見えます。小さな体に不自然なほど長い眉、

目もすっかり覆われてしまっています。

「はい。お久しぶりです。メリンの村長。実は・・・」

「だまらっしゃい！ ワシヤ、エテ公が何よりもキラいなんじやい！ とつと自分らの住処へ帰えーりやん！」

メリンの村長は入れ歯が飛ばんばかりに怒り狂います。額には血管が浮き出ていました。

レイは呆気にとられます。まさか、しょっぱなから話を聞いてもらえないなんて想定していなかったからです。家を出たからといって、王族は王族。そんな態度をとられるなんて予想だにしません。

「ちょ！ 話ぐらい聞いてくれてもいいじゃん！！」

ノアが言いますが、すでに目の焦点が合っていない。

「だまりやあああ！ エテ公がしゃべると部屋が生臭くなるんじゃないあああ！？」

とりつく島もありません。頭に血が昇りすぎてしまったようです。悪口雑言、罵倒の数々。メリンの長老は、言いたい放題まくしたてます。身振り手振りを交えて、まるで論拠もないような非難をぶつけてきます。

「・・・だから、オメエーたちは！・・・ん？ この微かな香り」

説教にノリノリだったメリンの長老が、急に動きを止めます。そしてクンクンと周囲のニオイをかぎはじめました。

「こ、こ、こ、これは！？ ま、まさか・・・メルシーの乳！？ ま、まさか・・・エテ公がそんな高級な、芳醇な、まさに甘露と呼べるそれをもっているなどは、あ、ありえん！??」

メリンの長老の眉がグワツとあがり、血走った目がノアを捉えま

す。
「ノア。もしかして・・・あの退化の大森林でメルシーからもらったミルクをもっているのでは？」

メルがハツとして手を叩きます。そうです。イヤだというのに、無理やりにメルシーにミルクをもらったのです。

ノアがポーチから、メルシーのミルクが入ったツボを取り出します。もちろん、デムの嗅覚には有害な臭いがありますから。それは嚴重に、テープでフタをグルグル巻きに、幾重にも幾重にも……と、もう封印状態でした。

「ウホツ　くれ！　そいつをくれ！　くれ！　ください！　よこせ！　よこしやがれ！　さっさとよこさんかー！　いッ！」
焦点があっていない目で、メリンの長老が暴れ回ります。完全にとち狂っています。こんなグルグル巻きで臭いが漏れないようにしてあるにも関わらず、それがメルシーのミルクであると解る嗅覚からしても……いや、例えば鼻の良いメリンだとしても、かなり異常としか言いようがありません。

メリンの長老が飛びかかってきそうな勢だったので、ノアは思わず持っていたツボを引いてしまいました。しかし、メリンの長老は素早く、骨ばった腕でツボをもぎ取ります。

「うっひよおおー！　一年ぶりの乳じゃー！！」
グルグル巻きのテープリングをブチブチと引き裂き、描写できないようなかなり危ない顔つきで、ツボの中に顔を突っ込みます。ベロンチョベロンチョ、ズズズチャチャ、ビチヨジョヨ……かなりひどい効果音に相應しい、もう凄惨な飲用風景です。メルなんかは思わず吐き気を感じました。

ツーンとする臭いに、ノアもレイモイヤな顔をします。しかし、飲み終わったメリンの村長は輝いた顔をしていました。ビチヨビチヨになった髭を拭いながら、生まれたての赤ん坊の顔をしています。「いやー！　うまい！　うまかった！　こんなの、四十年ぶりぐらいじゃ。新鮮かつ懐かしい味。コクと酸味が微妙なバランスで折り混じりあい、ワシの口の中でハーモニーを醸し出す！　まさに口内万博じゃあー！　！」

意味不明なことを叫びながら、メリンの長老はパァーッとにこやかに微笑みます。

「……コホン。デムの諸君。失礼した。最近、魔物が凶暴化して

おりまして。なかなかメルシーのミルクを得るのも難しくなってきたのです。それでワシも気がたっておりましてな」

ホツホツホと年寄りらしく笑うメリンの長老は、さっきとはうってかわって普通の人でした。吐く息はかなり臭いわけですが・・・。「ミルクをもらった礼です。ワシができることで良ければ、協力いたしましょう」

奪い取ったの間違いではありませんでしたが、ノアもレイも笑顔になります。これようやく話が進みます。

「では、メリンの長老。さっそくですが、霊希碑の使用許可をぜひとも頂きたいのです」

レイが真面目な顔をして言います。メリンの長老も真面目な顔で頷きました。

「・・・うむ。使っていたかには一向に差し支えありません。ですが、果たして霊希碑をテムの方々が扱えるかどうか」

メリンの長老が、チラツとポーズ太郎を見ましたが、きっとテムだけでなくポーズ星人も含めてのことだったのでしょう。

「扱えるって・・・。そんなに使うの難しいの？」

ノアが不安そうに尋ねます。テレポート装置・・・装置というくらいですから、もしかしたら専門的な知識が必要なのかも知れませんが。

「魔法力・・・か。以前、レムジンに行くときには、城の魔道士全員分の魔法力が必要だった」

レイが顎を抑えながらいいます。

「左様です。それに、我らメリンの誰かが案内人にならねばなりません。弱き魔法力では、魔神バルバトスの呪いが色濃く残る我らがミルミ城跡地に行くのは危険です。そのため、霊希碑はテレポートを願う者の力を計ります。無意味な犠牲者を出さぬために」

ノアは目をパチパチと瞬き、メルを指さしました。

「アタシらには、メルがいるじゃん！ メリンだし、魔力も強いしさー！」

メルは驚いた顔をしますが、メリンの村長はグツと押し黙ります。「そういえばさ、メリンの村長さんなら知ってるんじゃない!?」メルメルっていうんだけど、記憶喪失でさ。どこの娘かわからない? 家族とか知らない?」

「お、お願いします……。どうか、どうか教えて下さい」

メルは深く頭を下げます。メリンの村長は、眉を寄せ、唸るような仕草で、小さく溜息をつきました。

「……記憶を失っているそうでしたな。確かにメルメルという名前は……。知ってはおります。しかし、この村の者ではありません。そして、メリンの者でもありません」

メリンの村長は、悲しそうに、そして辛そうにメルを見やります。「メリンの者……。ではない? 私は……。では、私はいつたい……。なんなのですか?」

シヨックを受けたメルは、青白い顔で、震える唇で問います。

「……それは、言えません。メルメルさん。それは、ワシの口から申し上げることではないのですじゃ」

意味深な台詞に、ノアとレイは眉を寄せて顔を見合わせます。

「ど、どうということポー?」

ボーズ太郎が心配そうにメルを見やります。メルは唇をグツと噛んで、俯きました。

「でも、あなたはメルのことを知っているんですよね? そう仰った」

レイが詰問すると、メリンの長老は肩を落としました。

「……。ええ。知っております」

「なら、なんで!? どうして教えてくれないのさ!!!」

ノアが怒鳴ります。しかし、メリンの長老は首を横に振りしました。

「……。ノア。いいんです。もう」

メルがノアの肩に触れました。

「で、でも!」

「いいんです……。クラレ村の村長様。一つだけ……。一つだけ

教えて下さい。私の正体は・・・どうすれば解りますか？ どこに行けばいいのですか？」

メリンの村長は、眉間に皺を寄せ・・・そして、やがて小さく口を開きました。

「霊希碑を・・・越えなされ。それが、あなたの運命ならば・・・きつと道が拓かれるでしょう」

メリンの村長は、眉から覗く目でジッとメルを見やりました。それは、深い同情に溢れています。ただ、とても深い悲しみを帯びた目でした。

メルはただ、深く、深くお辞儀をしました・・・。

霊希碑。村長の家から出てすぐにある裏庭に安置されている灰色の石柱です。大きさは、このパーティのなかで一番大きいレイとほぼ同じです。170センチ程度ですね。

あ。ちなみに、メルが165センチ、ノアが158センチ、ボーズ太郎が150センチらしいです。とても余談でしたが・・・。

霊希碑には、水晶らしき丸い半透明な鉱石が、いくつも連なって柱の中に埋め込まれています。これで魔法力をコントロールしているのです。

メルが霊希碑の前に立つと、どこからか噂を聞きつけてきた住人達がゾロゾロと集まりだしました。

「・・・あの娘に？」

「無理だろ。メリンの者でないのに・・・」

「以前、デムの魔道士が使ったが・・・あれは特例だ」

囁かれるヒソヒソ話に、ノアは喉の奥で「グルル」といううなり声をあげます。

「霊希碑は・・・基本的にはメリンでないと使えません。この村にいるメリンですら、この霊希碑に認められるほどの魔法力を有する者はいないので」

メリンの村長が、メルの側でそう説明します。

「大丈夫。メルならできるって！」

「ああ。きつと、きつといけるさ！」

「メルメル！ 我は信じているボー！」

後ろからの仲間たちの声援に、メルは振り返ってニコリと笑います。

「………わかりました。やってみます」

メルが両手を開きます。メリンの村長が後ろに下がりました。

「霊希碑よ！ 私たちの願いを聞いて！ どうか、どうか道を拓いて下さい！！」

メルが懇親の祈りを捧げます。メルの魔法力が高まり、その力が・
・霊希碑の水晶に吸い込まれて輝かせました。霊希碑が振動し、
魔法力を増幅していきます。

「……ほう。久しく見ぬ、強力な力だ。三十人集まって、私に辛うじて認められた力とは訳が違うな」

なんと、頭に声が響きます。それは霊希碑からでした。霊希碑は、
どうやら人格とか感情を持ち合わせているようです。メルは驚いて
目を見開きました。

「で、では……認めてもらえるのですか？」

メルの問いに、霊希碑は黄金色に輝きます。

「力だけは充分だ。だが、その扱う力に意思が見られぬ……。心の弱さが感じられる」

「心の弱さ……」

メルは傷ついた顔をしました。

「なにい！？ お前がメルの何を知ってるって……ムガムガ！！」
怒鳴ろうとしたノアを、レイが慌ててその口を抑えます。

「意思なき力は方向性を失い、心なき思いはやがて汝が友を破滅に
追いやろう……。そのような者を送るわけにはいかぬ」

「そ、そんな！」

メルが呼び止めようとします。ですが、霊希碑の光はパーツと中
空に流れでいてしまいます。

「待つて！ 待つて・・・お願い！！！！」

メルの必死の呼びかけも虚しく・・・霊希碑から魔法力の光が消え、普通の石柱に戻ってしまいました。もう声も聞こえませんか・・・

夜。今日はとりあえず、村長の家に泊めてもらうこととなりました。

客間のソファアの上で、レイとボーズ太郎が平行になって寝ています。レイはどこから持ってきたのか、ナイトキャップを。ボーズ太郎は、寝ても目が細いので起きている時と大差ない顔です。

ノアは、レイとボーズ太郎が寝ているの見届け、忍び足で客間から出て行きます。

ノアが向かったのは、村長が腰痛を治すために作らせたという人工温泉でした。村長の家の真ん中が吹き抜けになっていて、その部分に贅沢な天然石作りの浴場があるのです。

「メル？」

ガラリと扉を開け、湯煙の中で目を凝らします。返事は聞こえませんが、湯の奥で白い長い耳が見えます。メルに間違いありませんでした。

ノアは手早く自分の衣服を脱ぎ捨てます。まあ、ほとんど下着だけみたいな薄着なんで脱ぐのもラクチンなわけですが・・・

タイルの上を滑らないよう慎重に行くと、やはりメルがいました。湯船につきりながら、ここではないどこかを見つめています。

「メル」

「きゃー！」

ノアがメルの肩を叩くと、驚いたメルが両手を上げました。跳ねた湯が、バシヤンとノアの顔にかかります。

「うえっぶー！」

「あ、ご、ごめんなさい・・・ああ。ノア・・・だったんですね」
ノアだと知って、ホツとしたような顔をしたメルでしたが、すぐ

に表情に暗い影が落ちます。

「・・・まだ気にしてんの？」

ノアが心配そうな顔を見ると、メルはコクリと頷きます。

「ごめんなさい。私のせいで・・・私の力が足りないせいで、皆さんが先に進めない。一刻も早く、バーボンさんやバツカレスさんたちを助けなければいけないのに」

バーボンとバツカレスの名前がでたことで、ノアもちょっと悲しげな顔になります。でも、ブンブンと首を横に振って気を取り直します。

「メル。アタシは・・・どんなことがあってもさ。メルを信じている。友達だもん。メルだったら絶対大丈夫だって。次はきつと上手くいくよ」

ノアの言葉に何一つ根拠となるものはありませんでした。でも、メルは胸がいつぱいになります。ノアの笑顔を見ていると、元気が分けられている気がします。

「ノア。私は・・・私は・・・」

ハラハラとメルの目から涙が落ちます。そして、ノアの肩に頭を寄せて泣きます。ノアはメルの頭を優しく撫でながら、満点の夜空を見上げました。

「・・・バーボンおじさんはさ、昔はファルの首都レムジンで有名なお医者さんだったんだ」

急にノアが話し出したので、メルは顔を上げて赤い目をパチパチとさせました。

「おじさんは、ファルもメリンもデムも・・・皆が仲良くなって欲しかったんだ。それで、『種の平等説』ってやつを説いてまわったんだ・・・」

「・・・種の平等ですか」

メルが尋ねると、ノアはゆっくり頷きます。

「そのとき、おじさんの口癖は・・・『人は定規じゃはかれねえ』って言葉。誰も勝てなかった魔神バルバトスを、愚かで野蛮なはず

のデムのスタッドが封印しちゃった。そして、デムであるバーボンおじさんが、ファルやメリンが驚くような治療ができた。こういうこともあるように、誰かを、何かの種族だとか、立場だとか、職業とかで差別するのはおかしいって主張したんだ」

「人は定規じゃ計れない・・・理論家のバーボンさんらしい。とても良い言葉ですね」

メルはちよつとうつとりした顔で、何度かその言葉を口の中で言いました。

「でも、ファルやメリンの人たちが・・・ただそれを納得したわけじゃないんだ。一部の人たちは、それを認めたくないって言ったんだ」

ノアが辛そうに言います。メルもそれに共感して切なそうな顔をします。

「おじさんは一部の心ない人たちから迫害されて、片目と片腕を・・・失った。でも、それでもおじさんは自分の言葉を曲げなかった」
メルは衝撃を受けます。バーボンの眼帯と義手は、そういう理由だったのです。

「そして、最後には奥さんのエリムさんまで・・・失ったんだ」

「奥さん・・・。バーボンさんは・・・結婚してたんですか」

メルは、どう反応していいかわからない様子でしたが、明らかに動揺を隠せないでいました。

「それから、バーボンおじさんは・・・エリムさんを亡くしてから変わっちゃった。レムジンを出て、ジャスト城の寂れた郊外で、ほとんど無料で近い診療をしている。自分の主張をやめて、アタシみたいな若い子供のために命を張るようになった。・・・そう、自分のことを捨てちゃったんだ」

ノアは悲しそうにそう言って、唇を噛みしめました。

「でも・・・。メル。あんだっただっただらさ、バーボンおじさんを変えられるかもしれない」

「え？」

キョトンとするメルに向かって、ノアはニツと笑います。

「退化の大森林で、バーボンおじさんが攻撃したメルシーをメルがかばったじゃん。そのとき、一瞬だけ……おじさんの目が昔に戻ってたんだ」

メルは回想します。二人がメルシーに追いかけられているとき、バーボンが助けに入ってくれたのです。でも、バーボンはもう戦えないメルシーに追い打ちをかけようと思いました。それをメルが哀れに思っ、『もうこの子は戦えません！ 戦えない子に、これ以上に何をするんですか！？』と啖呵をきつたのです。今思えば、なんてことをしてしまったのでしょうか。メルはちよつとだけ後悔します。

「……そんな。あんなことで」

「ううん。きつと、おじさんは嬉しかったんだと思う。アタシも容赦ない性格だからさ。敵となれば、フルボツコだけど……。メルは違う。メルは、誰かを優しく思いやれる心がある。おじさんもそう言っていたじゃん。もしかしたら、おじさんは……。メルに医者になってもらいたいのかも。後継者にしたいのかもよ」

ノアの言葉に、メルの目に光が宿ります。どんなことでも、誰かに認められている……。これ以上に嬉しいことはないじゃありませんか。

「ノア。私……。やってみます！ そうです。バーボンさんに……。昔を取り戻させてあげたい。私に……。いえ、私が、それをします！ 私も誰かを癒せる医術を学びたい。そのためには、バーボンさんを一刻も早く助け出さないと！」

「うん。やる気だね！ もちろん後継者になるってことは……。ま、上手くいけば、同居生活から……。結婚なんて流れになることもよくあるだろうしね！」

ノアが茶化して言うのに、メルはボツと真つ赤になりました。

「の、の、ノア！ な、なにを！！？ 私は……。そ、そんな！」

「くたびれたバーボンおじさんに、この美少女かぁ。ちよつとも

つたいないな！ ほら、なんだ、このデカイ乳は！ アタシと同一年には思えないこのナイスバディは！ おじさんなんて、一発で悩殺じゃん」

「きゃあ！」

ノアが、メルをガシツと掴みます。そりゃ、もう・・・メロソ？ スイカ？ いや、それぐらいの次元です。あどけない表情に合わないぐらいの抜群のプロポーションなわけです。

「いつもゆつたりしたローブで隠してたな！ ほら、このノア様に全部みせてみんさい！」

「イヤだ！ ノアだったら！ くすぐりたい・・・キャハハハハ！！」
遊女と遊ぶお代官様のような顔で、ノアが執拗にメルを身体をくすぐりました。

少女二人の楽しげな声が、深夜のクラレ村に木霊します・・・

翌朝。再び霊希碑の前にメルは立ちました。昨日のような、不安や迷いはもう微塵もありません。

「・・・まるで昨日とは別人のようだ。それほどまでに、先に進みたいというのか？」

「はい。私は・・・なんとんでも、先に進まなければいけないのです」

メルは強い目をして言いました。霊希碑はしばらく沈黙します・・・

『幾多の苦難が待ち受けていてもいいのか？ 数多の危機が訪れるとしても先に進むのか？』

「ええ。だとしても、仲間たちと一緒にならば乗り越えられます」

メルがそう言うのに、ノアとレイとボーズ太郎が前に進み出てコクリと頷きました。

『・・・なるほど。なるほど。よかるう。ならば、我らが故郷、呪われしミルミ城への道。ガラガ山道への扉を開こう！』

霊希碑に、パアーンという轟音と共にメル魔法力が吸い込まれていきます。そして水晶にそれが集約し、碑石の土台から大きな大きな虹色に輝く、光の橋となって・・・遙か向こうの崖にまで到達しました。

この騒ぎに、メリンの長老をはじめ、クラレ村の住民が集まって来ました。どうせどうやつてもダメだろうと思い、今日は誰も来ていなかったのです。

「おお！ な、なんてことじゃ!？」

「そんな・・・まさか、メリンで無い者に・・・霊希碑が道を拓いたというのか!？」

驚きに誰もが目を見開く中、ノアは得意になって「へへへッ、やったね。メル」と鼻の下を擦りながらメルに目配せします。メルも嬉しそうにニッコリと笑いました。

ノアたち四人が手を振って光の先に進もうとしたとき、メリンの長老が慌てて走り寄ってきました。

「ま、待って下され・・・。メルメルさん。あなたは・・・これから先に進むというならば、途中で『救いの小屋』と呼ばれるものがあります。そこに立ち寄りなされ!」

「村長!？」

「何を言われるんですか!？」

村人が驚いて、メリンの村長の身体を掴みます。しかし、村長の目はジツとメルを捉えていました。

その目には哀れみも同情もありません。ただ、何かとてつもないことを訴えているようでした。

「救いの小屋・・・ですか?」

「そうです。そこで・・・あなたの正体は明らかとなるでしょう」

「村長!!!」

「なぜ、あの者に教えてやる必要があるのでですか!？」

村人たちが憤りに声をあげます。若者など、手に武器を持って威嚇するような状況です。

「クラレ村の衆……。もう、やめよう。国を失って、いつまでワシらは形だけの掟に従わねばならぬというんだ。あの娘もまた……。我らの仲間なのじゃ」

メリンの村長がそう言うと、誰もが苦しい顔つきになります。それがなぜなのかノアたちには解りませんでした。村人たちが必死に何かを守るうとしてしているのだけは伝わってきました。

村長の側にいた小さな男の子が、しばらくモジモジして……。ようやく意を決したかのように強く頷くと、メルの方に走ってきました。母親らしき女性が悲鳴をあげます。

「お母さんにお話しちゃいけないって言われていたけれど……。お姉ちゃんの良い人だと思う。だから、はい。これ。旅の幸運を祈るお守りあげる」

男の子は耳をピンと立たせ、そしてメルの手小さな何かを手渡しました。それは、手彫りで作ったメルシーの人形でした。

メルシーは凶暴な魔物ですが、メリンにとっては、最良のミルクをくれる最高の生物として、守護者のような扱いを受けているのです。

受け取ったメルは、思わずポロリと涙を流しました。男の子はギクリとした顔をしましたが、メルはその手を優しく握りしめます。

「ありがとうございます」

その光景を見ていた母親は、グツと胸を抑えます。そして、村人の誰もが何とも言えぬ顔でメルを見やりました。そこには一種の後悔。そして、懺悔の気持ちが見えます。

「……。メルメルさん。そして、デムの皆さん。次に来たときは、本当に客人としてもてなさせて下され」

メリンの村長がそう言います。メルはコクリと頷きました。

そして、クラレ村の人々が見守る中、ノアたちは光の橋を渡って行きました……。

第六章 メリンの霊希碑（後書き）

途中に寄る村です。あまり深いイベントではないのですが、レイが仲間に入り、バーボンの過去をチラリと。ちなみにゲーム中では風呂ではなく、崖の近くでノアとメルが語り合います。

メリンの村長・・・あまりゲーム中では重要なキャラでなく、ちよっと小説では豹変ぶりがおかしかったかなあと反省。ただ、メルシーのミルクで暴走しているところは残しておきたかったのでw

次は、メリンの村長が言った「メルメルはメリンではない」という発言の真意。救いの小屋で待ち受ける運命。そして、ミルミ城に住まう悪魔との戦い・・・とのことで、こっご期待、とw

第七章 速の四天王アルダーク

決して降り止まぬ黒い雨。それは封印された魔神バルバトスの呪いの涙だとされ、その雨に当たった土壌は、二度と植物が生えませぬ。

ガラガ山道は荒れ果てた土地。岩だらけの禿げ山でした。降りしきる雨だけでなく、急な勾配もノアたちにとっては厄介な障害でした。ツルツルと滑るだけでなく、水溜まりに隠れている窪地によく足を取られるのです。容赦ない雨に打たれ、油断を許さぬ不安定な足場に、皆の体力は確実に奪われていきます。

さらに最悪なことは、魔物がかなり強いのです。シーツのお化けのような、魔神の使い。蜥蜴の頭と人間の体をもつ、進化を誤った異形の戦士リザードマン。怨念によって動く亡霊、骸骨騎士スケルトンマン。いずれも強敵であり、ましてや集団で出沒します。ノアやレイでも一撃、二撃では仕留められません。二人がかりでようやく一体を動けなくし、メルが魔法で倒すというパターンでした。反撃を防ぐのや、傷ついたり弱った仲間を助けるのはポーズ太郎です。常に全力を強いられる戦いは、予想以上に酷なものであります。

メルもポーズ太郎も精神力を使い果たし、ノアもレイもへ口へ口でした。

「・・・どこか休める場所を探さない」と

レイはそう言つて、傷ついた自分の腕に包帯を巻きます。ポーズ太郎にもう治療する魔法力も残っていないのです。

「救いの小屋はどこボー？ 我らこそが救ってもらいたいボー」
げっそりやつれた顔でそう言うポーズ太郎。誰も返事をする気力もなく頷きません。

「・・・あ！？ あつた！！ あれじゃない？ ほら、あの茶色い屋根！」

ノアが遠くに何かを見つけて走り出します。レイにもメルにもそ

の場では判りませんが、ノアについてしばらく歩くと・・・
本当に小屋の屋根が姿を現します。

黒い雨のせいで、ところどころ黒ずんでしまった三角屋根。小屋
というには、普通の家一軒ぐらいはありそうなくらい大きな建物
です。ただ見た目が簡素なので、そう呼ばれているのかもしれない
ん。

柵に囲まれた庭らしき部分には、ちよつと大きな規模の菜園があ
りました。雨の被害から守るため、半透明なシートで作った屋根が
かかっています。日がなくても育つ作物なのでしょう。弱々しくは
ありましたが、それでも緑の葉を精一杯につけています。

魔物が徘徊する中、どうしてこの小屋だけは無事なのだろう・・・
そんな疑問をふと抱きましたが、それ以上に疲労のほうがひどかつ
たのです。ノアは特に警戒することもなく、ドンドンと乱暴に扉を
ノックしました。

しばらくして、トトトという小さな足音が中から聞こえてきます。
ガチャリと内鍵を操作する音がし、扉が開かれました。出てきたの
は、小さなメリンの男の子です。上目遣いにノアの顔を捉えると、
「あつ！」と驚いた顔をしました。扉を開きつぱなしで、トトトと
引き返していつてしまします。

ノアは仲間たちと顔を見合わせました。ですが、こんなところで
立っけていても仕方ありません。盗賊なんで、無断侵入は得意中の
得意です。レイとメルが躊躇う中、ノアはズカズカと中に入ってい
きました。致し方ないと言わんばかりに、三人も後に続きます。

「ま、まて！ 先にはいかせないぞ！ シーラ母さんに悪さするヤ
ツはゆるさないぞ！」

メリンの男の子が・・・ナベを頭にかぶり、麵棒を武器に、鍋の
フタを盾に・・・といった武装で構えます。引き返したのは、これ
を取りに戻ったためでした。

「なんだよ。ボウズ、アタシらはちよいと休ませてほしいだけさ。
悪さなんてしないよ」

ノアが笑っています。「盗賊だけだな」と小さく付け加えましたが、男の子には聞こえていません。

「ほ、ほんとうか!？」

「ええ。大丈夫。私たちは旅の途中でここに来ただけ。怖がらせてしまったならごめんなさい」

メルが優しく微笑むと、男の子は麵棒を下げます。同じメリンなので安心したのでしょうか。

「ならいい。もしウソついていたら、矢よりも早いドラゴンの王。アルダークの炎に焼かれるんだからな!」

男の子はフンと鼻息を吐いて、かぶっていたナベを降ろします。レイが目大きく開きました。

「アルダークだって? あの、四天王のアルダークか?」

レイの剣幕に、男の子がギョツとした顔をします。

「う、うん。アルダークだよ……。アルダークは……。オイラたちを守ってくれてるんだ」

男の子の言葉に、四人は顔を見合わせて複雑な顔をします。

「アルダークについて知りたいのかい? なら、シーラ母さんに会うといい」

男の子の後ろから、誰かがでてきます。その顔をみた瞬間、ノアはダガーを構え、レイは剣を抜きました。

「あぶない!!」

「なんで魔物が!？」

ガラガ山道に出現するゾンビもどきです。青白い肌に、腐って落ちた目と削げた鼻。隙間だらけの茶色い歯。斬っても、突いても攻撃をやめない手強い敵です。

襲いかかってくると思いきや、ノアたちが戦闘態勢なのを見て、ゾンビもどきは「あわわ」と腰を抜かします。

「ゾンビのおじちゃん! まって! 悪さするなら許さないって言っただろ!!」

男の子がゾンビもどきをかばいます。その姿に、ノアもレイも眉

を寄せました。

「この救いの小屋では争いごとは厳禁ミョー」

「武器はいかなあ。武器は」

奥の通路から、プニョプニョした緑色の液体生命体のグリーン・スライム。スケルトンの上官にあたり、頑丈な鎧に羽根飾りが特徴のデス・コマンドーが現れます。いずれもかなりの強敵です。何度も危ない目に遭わされましたし、実際にレイの腕の傷は、このデス・コマンドーによるものです。無意識に、レイは自分の腕をかばっていました。

「ど、どうということなんでしょう・・・」

メルが口元に手を当てて言います。デス・コマンドーがカパカパと口を開け閉めして笑います。

「魔物全員に敵意があるってわけじゃないってことさね。まあ、シラ母さんに会いなさい。そうすればどういいうことが解るさ。リツケル。案内してやんなさい」

デス・コマンドーが、リツケルと呼ばれた男の子の頭をポンと撫でます。獰猛に錆びた剣を振るっていた骸骨の指が、なんと子供の頭を優しく撫でたのです。ノアたちには驚きでした。

「よし！ オイラがシラ母さんのとこまで連れていってやる！ ついてこい！！」

リツケルは人差し指を掲げて、奥へと歩き出しました。ノアたちはそれに黙ってついていきます・・・。

魔物や子供は、他にもいました。でも、平和そうに、デムやファルやメリンの子供らと一緒に笑って談話していたり、一緒になって遊んでいたりますのです。

強くて逞しい魔物は、子供らを背中に乗せ。賢くて言葉が喋れる魔物は、子供らにお話を聞かせ。小さくて可愛い魔物は、子供らに抱っこされています。

人間の大人はいません。色んな魔物が、それぞれ己が特徴を生か

し、子供らの面倒をみているのです。

「なんだよ……。これ」

ノアはポツリと言いました。魔物は魔神バルバトスが生み出した邪悪な生物です。それは人間に害を為す者たちであるというのが定説でした。

「……。やはり魔物さんにも心があつたんですね」

メルは嬉しそうに、そして感動したように言います。朴念仁とかの魔物にも優しくかったメルらしい言葉でした。

「魔物との共存……。それが、この救いの小屋の実態か」

レイも剣の柄に手をかけたまま言います。油断させて、襲いかかってくるかもしれないと思っっているのです。見ていると、魔物が手を上げて挨拶したり、会釈したりしてくるので、ちょっと変な感じですか。警戒しているこちらが、ちょっとおかしいような感じですよ。

「なにをボヤボヤしているの！？ 早く行くよ！」

リツケルは、大股で「いっち、にい、いっち、にい」と行進しています。ノアたちがちょっとでも遅れると、ブーツとむくれて怒るのです。周囲の観察はそこそこに、ノアたちはリツケルの後を追いました。

大きな台所。タタタタンという早い包丁さばきの音が聞こえてきます。コトコトという音で煮えるナベからは、食欲をそそるよい香りが漂ってきました。ノアたちに背を向け、流し台で調理している一人の女性がいます。

「シーラ母さん！ あやしいヤツを連れてきましたー！」

リツケルが敬礼して言います。料理に専念しているシーラは振り返りもしませんでした。心配でニコツと笑ったのが解りました。

「……。まあ、ご苦労様。これで今月何人目かしらね。リツケル」
優しい声でした。リツケルは満足そうに笑います。

「居間にホットケーキができているから、食べてきなさい。後は母さんに任せて」

「ホットケーキー！ はーいー！」

ホットケーキに釣られ、自分が連行したノアたちのことなどすぐに忘れてリツケルは駆けていってしまいました。シーラは子供らの扱いを心得たものです。「フッフ」とシーラが笑います。

ナベの火を消し、手をふきながらシーラが振り返ります。

白い長い耳からメリンであることが解りました。短くソバージュにしたピンクの髪。年相応に、目尻や口元にはシワがありました。予想を裏切らない優しいげな表情になぜか心安らぎます。まさに理想のお母さんです。

「救いの小屋にようこそ。きっとリツケルが失礼をしたことでしょう。ごめんなさいね」

シーラが微笑んで言います。しかし、すぐにその優しいげな表情が消えました。驚愕に変わります。その目は……メルを捉えています。

「め、メルメル……。まさか。メルメルなの!？」

「え?」

メルが驚いたような顔をします。

「ああ、ああ……。無事だったのね。良かった。本当に良かった。お父さんを追いかけてジャスト城に行ってしまうから。母さんは……どんなに心配したことが」

「お、おかあ……。さん?」

メルの焦点が揺らぎます。ズキリと頭が痛みました。目の前の女性を、必死で記憶の底から掻き出そうとします……。

「お父さんには会えたの? この一年間どしていたの?」

とても心配そうにシーラが言います。進み出て、メルの手を取りました。よく見れば、二人は似ているような気がします。親子と言われれば納得できるほどです。

「おとうさん……。? おとうさん……。つて???」

メルはうわ言のように尋ね返します。まだシーラをどういう風に認識して良いか解らないのです。そんな娘の姿に、シーラは怪訝そうな顔をしました。

「何を言っているの、メルメル？ ジャスト城の大臣になつたじゃない。傲慢のお父さんじゃない。心配して、あなたは家を飛び出して行ったのよ？」

メルもノアもレイもボーズ太郎も・・・一瞬にして凍り付きます。「ジャスト城の・・・大臣？」

「それって・・・もしかして、オ・パイ・・・ボー？」

シーラはコクリと頷きます。

「ええ。オ・パイはうちの主人です。デムの方々に・・・。ボーズ星人？ メルメルったら、やはりお父さんに似て、色んな種族の・・・」

「ウソよ！！！！！！！！！！」

メルは叫びます。ここまで感情を顕わにするメルを誰もが初めてみました。憎しみを込め、怒りを込め、否定し、目の前のシーラを睨み付けます。娘にそんな目で見られ、シーラはたじろぎました。

「メルメル？」

「ウソよ！ ウソウソ！！ であらめもいとこ！！ オ・パイなんかがお父さんってことも！ あなたがお母さんってことも！！ みんなウソ！！ ウソよ！！！！！！！！！！」

メルはそう言って踵を返して駆け出しました。

「メルツ！！！！」

「メルメルポーツ！！！！」

ノアもボーズ太郎も捕まえようとしますが、スルリと抜けメルは駆けて行ってしまいました。リツケルがホットケーキをかじりながら居間から顔だけを覗かせましたが、勢いよく走ってくるメルに驚いてすぐに顔を引っ込めてしまいました・・・。。。

居間。リツケルや魔物たちに移動してもらい、シーラと向かい合わせにソファアに座ります。脇の暖炉の火がチカチカと燃え、雨に冷えた身体を温めてくれます。

テーブルの上にシーラが入れた温かい珈琲が置かれました。一口

飲むと、それだけで疲れがとれそうです。

「どうだった、ボーズ太郎？」

メルを捜しに行ったボーズ太郎が戻ってきます。ボーズ太郎は悲しげな顔で俯きました。

「・・・遠くには行っていないボー。すぐ外にいるボー。でも、ちよつと一人にして置いて欲しいらしいボー」

ノアは小さく溜息をつき、レイは拳をパンと手の平で打ち鳴らします。

「記憶喪失・・・ですか。でも、生きていてくれただけでも充分です」

シーラがそう言い、ソファーに深々と腰を下ろしました。

「さて。何かからお話しましょうか・・・」

悲しそうな顔でしたが、それでも気丈に振る舞おうとしているのが解つて、ノアもレイも複雑な顔をします。そういうところは、本当にメルにそっくりだとノアは思いました。

「・・・オ・パイが。その、メルの父親だというのは・・・本当なのですか？」

レイが尋ねるのに、シーラは少し目を閉じて考えるような素振りをみせます。それからゆっくり目を開いて、コクリと静かに頷きました。

「ええ。・・・私には、皆さんが言われている主人の方のイメージのほうが信じられません。主人公・パイは心優しい人です。この救いの小屋を・・・始めたのもあの人なんですから」

子供と魔物が一緒に共存するこの小屋と、あの無情無慈悲なオ・パイがどうしても繋がりません。ノアはバリバリと頭を掻きむしります。

「この小屋は・・・なんなん？　なんで、魔物が一緒にいるわけ？」

「魔物もすべてが争いを望んでいるわけではありません。ここは、そういった平和主義の魔物を保護する施設でした。やがて、魔神バルバトスのせい・・・人々が多く死に、たくさんの孤児が生まれ

ました。いまでも滅びた国のせいで保護が受けられず、捨てられた子供なども多くいます。そういった子供をも面倒みるために、私とオ・パイはこの救いの小屋を作ったのです。娘のメルメルもそれに賛同してくれて、とてもよく手伝ってくれました」

「ボー。メルメルは・・・退化した我らにもとても優しくかったボー」
「ええ。記憶を失っていても・・・その心は残っていたのでしよう。親が言うのもなんなのですが、とても気持ちの優しい娘です」

シーラが嬉しそうに頷きます。ノアは、朴念仁やメルシーに優しく接していたメルの姿を思い出していました。

「・・・メルはデムとメリンのハーフだったのか。だから、クラレ村の村長はメルメルをメリンではないと言ったのか」

「ええ。メリンもファルも自ら種の優越を信じています。そして、デムやボーズ星人は下等であると。私とオ・パイとの結婚もかなり非難されました。実際に、ミルミ城が崩壊した後・・・ほとんどのメリンがクラレ村に移ったのに、私たちは差別を恐れてこの呪われた地に留まったのです。メルメルもそれで辛い思いをしたことでしょう。でも、それでも・・・あの娘は泣き言ひとつ言いませんでした」

ノアは拳を握りしめ、レイが唇を噛みしめます。

「でも、どうしてオ・パイは・・・ジャスト城に？」

「デムが劣等種であるとされたのは、ジャスト国の腐敗が原因であると主人が考えたためです。国に働きかけなければ、この救いの小屋の・・・子供達も魔物達も本当には助けられないと思ったのです」
「耳が痛い・・・な。確かに、魔神バルバトスが暴れていた時にファルとメリンは国をあげ、率先して戦った。でも、父王は怯えて戦うことを放棄したんだ。デムは臆病者だと批判された。それからますますデムへの偏見が強まったと聞く」

レイは苦々しそうにそう言います。

「でも・・・。アタシらの知っているオ・パイはそんなヤツじゃない。誰かに情けをかけるなんて微塵も見せたことがない。なんで、

そうだったんだらう?」

ノアが言うのに、シーラは俯きます。

「わかりません。ただ・・・主人はある暗殺拳を極めた人です。ガラガ山道からクラレ村まで霊希碑を使わねば通れぬ道を、自ら脚力だけで登り切るような並はずれた力を持つ人なんです。そんな自分の力を知っているからこそ・・・簡単に人は傷つけたりはしませんでした。あの人は誰よりも優しい人でした。きっと、何か理由があるに違いありません」

シーラがきつぱり言うのに、ノアもレイも顔を見合わせて唸りま
す。

「そういえば・・・リツケルが言っていた、アルダークって・・・
なんだボー?」

ボーズ太郎が思い出したかのように尋ねます。シーラは「まあ」
と言つて目を細めました。

「かつて魔神バルバトスと戦った四天王の一人です。今では悪魔と
なり・・・廃墟となったミルミ城にいます。主人と最も親交が
深かった人ですから。虚ろな記憶から、きっと私を守っているつも
りでいるのでしょう。ときおり、周囲の魔物に警告を与えるために
空を飛び回っていますから」

「え?? ちょ、ちょっと待って・・・悪魔に守られている??」

ノアがパニックを起こします。

「ええ。この救いの小屋が魔物に襲われないのは・・・まあ、中に
強力な魔物がいるおかげでもあるのですが。この周囲を縄張りにし
ているアルダークが目を光らせているからなのです」

あんぐりとノアが口を開きます。魔物がいるだけでもすごいこと
なのに、悪魔にまで守られているというのですから飛んでもない話
です。

「え? 意味が・・・ちょっと。だって、四天王のオルガノツソは
牛の化け物で。アルダークは・・・ドラゴンだっけ?? それが・・・
魔神バルバトスと戦ったわけなの? それっておかしくない?

悪魔は魔神の下僕なわけでしょ??」

「? 俺にも話がよくわからないんだが……。四天王は魔神バルバトスと戦った英雄だろう? 魔神バルバトスに敗れて……。各地の守護聖人となったと聞いたが。オルガノツソは退化神殿。アルダークはミルミ城。ビシユエルはラグナロク遺跡に封印されているとそれがなぜ悪魔になるんだ?」

「わ、わけわかめボー???」

混乱する三人を見て、シーラは「なるほど」と小さく笑います。

「皆さんは……。魔物と悪魔の成り立ちをご存じではないのですか?」

シーラの問いに、三人とも首を横に振ります。

「ノアさんが言っていることも、レイさんが言っていることもどちらも正しいのです。魔物も悪魔も魔神バルバトスが生み出しました。それはご存じですね。では、どうやって生み出したか。それは……。魔神バルバトスに殺された人間が魔物や悪魔になるのです。彼らは元は人間なのです」

「ええ!?!」

「そ、そんな!?!」

ノアもレイもひどく驚きます。

「例外として、メルシーのような野生種もいますが。ほとんどの者は、魔物に変えられてしまえます。そして、そえが力の強い者だった場合は……。それよりもランクが上の悪魔に変えられるのです。より強かった四天王は魔神バルバトスに敗れ……。悪魔に変えられてしまいました。それをあの英雄スタッドが封じ、その地から移動できぬようにしたのです」

「そんな……。アタシたち、元人間を倒していただなんて」

ノアは自分の手を見つめます。いくら盗賊だからといって、義賊バツカレス盗賊団では殺しは御法度なのです。

「彼らは意思をすでに失っています。この救いの小屋にいる魔物などは別として、襲いかかってくる者たちはすでに人間ではありません

ん。倒すことが・・・唯一の救済になるでしょう。気に病むことはありません」

シーラは達観したように言いますが、ノアもレイもボーズ太郎もなんだか釈然としません。

「四天王で、魔神の呪いを受けながら・・・まだ自身の姿と意思を保っているのはうちの主人ぐらいでしょうね。でも、皆さんの話をお聞きする限りでは、もう主人も魔神の呪いの渦中にいるのかもしれません」

「オ・パイも・・・四天王？」

「そうだ！ 思い出した・・・。オルガノツソ、アルダーク、ビシユエル・・・そして、オ・パイ！ どこかで聞いたことがあると思っただら、そうだ！ なんて誰も気づかなかったんだ！」

レイが膝を叩いて言います。

ノアもボーズ太郎も、なまじオルガノツソの姿を見ているだけに余計に信じられませんでした。しかし、同じ四天王ならば・・・オルガノツソがオ・パイの名前を出したことに理解できます。

「最近地震も多く、噂では魔神バルバトスの封印が弱まっているとか・・・。それが本当ならば、アルダークと共に封印されている魔神の本体に何か異変でも起きているのかもしれない」

「魔神の本体？ 魔神バルバトスは・・・ミルミ城に封印されているの？」

「ええ。聖結界エミトンは・・・ミルミ城そのものを結界の一部として用いたのだと聞きます。あの中に魔神バルバトスが。そして、それを守るかのように速の四天王アルダークが住まうのです」

ノアは腕を組んで「うーん」と考えます。しきりに、左右に頭を捻ります。

「・・・じゃあ、その封印が解ける前に、バルバトスの身体をやっつけちゃうてのはどう？ もし、オ・パイが魔神バルバトスの呪いでおかしくなっているならさ。そうすれば助けられるんじゃない？」

ノアの何気ない言葉に、レイもシーラも啞然とします。封印され

ている者を倒す。そんな考えを誰一人抱かなかったのです。封印しているだけで充分だと思ってしまうていたのです。

「なんていうか。ノアらしいというか……。だが、そうだな。それは、ありかもな」

レイが笑って頷きました。実に短絡的な考えですが、それが一番はやい解決法だと考えたのです。

「ええ。メルメルのお友達は……。なんて、頼もしいのかしら」

ノアは頼もしいと言われて、「へへへ」と笑います。シーラは優しい目でノアを見つめました。

「ノアさん。主人と……。メルメルを……。どうか、どうか、よろしく願います」

黒い雨に打たれるままにし、メルは道ばたで、自分の足下に萎びた花を見つけました。まるで自分のようだと、虚ろな瞳で見やります。雨は、メルの涙の跡も消し去ってくれていました。

シーラが母緒であり、またオ・パイが父親であることも真実なのでしょう。ボーズ長老が施した記憶の封印も徐々に解け、メルは徐々にその記憶を取り戻しつつありました。でも、それだけにその事実は受け入れがたい、許容しがたいものだったのです。

「……。バーボンさんを傷つけたのが、ボーズ星人さんたちにひどいことをしたのが、私のお父さんだったなんて」

メルはギュッと目をつぶりました。血が繋がっているというだけで、こんなにも責任を感じてしまうのです。オ・パイの非道の行いが、まるで自分が行ってしまったかのようにです。やるせない気持ち、後悔、どうしようもない哀しみ。それらに押しつぶされてしまいそうになります。

「……。風邪をひくよ」

「……。レイ」

いつの間にか側に立っていたレイが、サッと自分の傘でメルから雨を遮ります。

「私は・・・父を追って、ジャスト城に行きました。そこで、私は・・・」

メルは自分の両肘を抑えてブルツと震えました。デムの若者から受けた陵辱を思い出したのです。辱め、痛み、苦しみ、恐怖・・・フラツシユバツクするそれらが、メルの心を抉ります。

「私は・・・もう誰も信じられません。デムも、父も・・・誰も」
肩に触れようとしたレイの手を避け、メルは頭を抑えてしゃがみ込みました。

「・・・そういえば、ちょっと昔にオ・パイに言われた言葉がある」
レイがいきなり語り出します。メルの隣でしゃがみ込み、萎えた花をジツと見やります。その悲しげな青い瞳に、メルは思わず引きつけられました。

「父王が右往左往しているのを見過ごしている俺に、『発言する力がありながら、どうして黙っているのですか』と、ね。そう言われたんだ。俺も民のことを考えなかったわけじゃない・・・。だけど、自分は王じゃないから。そう自分に言い訳して、父上の悪政を見て見ぬ振りをしてきた。父の責任は俺にもある。俺はもう子供じゃない」

メルは小さく頷きます。親の責任・・・それを感じている気持ちに同調できたからです。メルとは違った形で、レイにも大きなプレッシャーがかかっていたのです。

「レイは強いんですね。そうして、レイは自分の意思でお城を出たんですから・・・私はただ流されるだけ。ノアやボーズ太郎・・・そしてレイがいなければ、私はここにはいない。ここまで来ることすらできなかつた」

「そんなことないさ。メルは十分に強い。メルがいたからここまで来れたんだ」

レイが、メルの首についているメルシーの人形を指さします。霊希碑に認められたとき、クラレ村の少年にもらったものです。メルはそれを見て、泣きそうな顔でギョツとそれを握りしめました。

「・・・納得いかないなら、納得いくまでオ・パイと話してみるしかない。俺には、奴は奴なりの信念を持って動いているように見えるんだ。根からの悪人だとは思えないよ」

「ありがとう。レイ・・・」

メルはレイの優しさ感謝しました。礼を言われて、レイの顔が紅くなります。

レイはこれがチャンスだと思いました。メルに気取られないよう、そろそろと、その背中にレイの手が伸びて行きます。

「私、大丈夫です！」

急にメルが立ち上がり、レイの目をしっかりと見て言います。

あわよくば抱き締めてしまおうというような下心を抱いていたレイは、びっくりして手を引っ込めてしまいました。

「私、お母さんとちゃんと話してきます！」

そう言って、メルは小屋に駆けて行きました。

ポツンと取り残されたレイは、メルを抱き止めるはずだった手をジツと見つめ、ガツクリと肩を落とします。傘が落ち、雨がザーツとレイの頭に降りかかりました。まるで頭を冷やせと言わんばかりです。

「・・・せーっかく、メルを慰める役を譲ったのにな」

菜園の柵に隠れて様子を伺っていたノアが顔を出します。

レイはやけくそな気持ちで、大きく、それは大きく溜息を吐き出しました。

「メルは・・・強い。本当に強いさ。だから、好きになつたんだ。

見た目は、純情可憐な一輪の華如く。でも、あのオ・パイにも物怖じしないで発言する勇氣をもっている。つけくわえて、海のように深く雄大で、全てを包み込むような優しさ。まさに天使。まさに天女。俺の一目惚れだ!!!」

ノアはニヤツと笑って茶化そうと思いましたが、レイがあまりに落ち込んでいたので、不用意な発言をしようとした唇を人差し指で抑えます。

「・・・メルが好きだから、仲良くなりたくてアタシたちの仲間になつたの？」

ノアの問いに、レイは皮肉めいた顔をします。

「見損なうなよ。国や民や、オ・パイに対する言葉に嘘偽りはないさ」

「へー。なかなか男じゃん。ただの軟派野郎かと思つてたけど、アタシはあんたのことキライじゃないね。安心しな。メルが相手かは知らないが、いつか報われる日があるさ」

ノアが親指を立ててそう言うのに、レイは嫌そうな顔をします。

「悪いが・・・ノアは俺の好みじゃない」

ノアの額にピキピキと青筋が立ちます。

「ふざけんじゃないよ！　そういう意味じゃない！！　誰があんたなんかと！！」

レイの顎に、ノアの強烈な膝蹴りがお見舞いされました・・・。

呼吸を整え、震える指を握りしめます。

メルの記憶はほぼ戻っていました。ボーズ長老が行った記憶の封印は、メルへのショックを少しでも和らげるため、一つの想起を起点に、ゆっくり連鎖的にほどけるものだったのです。

毎年、母に背丈比べをしてもらった大きな柱。優しい父が果物を積んで持ってきてくれたバスケット。メルがいつも座っていたお気に入りの椅子。なにもかもが一年前に過ごしていた場所だとハッキリ感じられます。ここは紛れもなく自分の家なのです。

脱衣場で、リッケルを風呂に入れようとシーラが手伝ってやっていきます。

メルがおずおずと近づくと、リッケルが先に気づきました。しかし、シーラはメルを見ることなく、穏やかな表情のままリッケルの上着のボタンを外してやっています。

「あ、あの・・・」

「このリッケルはね。あなたが一年前にいなくなった直後にここに

来たの」

メルが喋るのを遮るように、シーラが静かにそう言います。

「近年、魔物が凶暴化してきて、親を失った子供が増えてきている。お父さんもそれを憂っていたわ」

父であるオ・パイと、大臣として非情であったオ・パイがどうしても重ならず、メルは唇を噛みしめます。

「・・・この小屋を作ったとき、私はメルメルだけの母さんじゃなくなつた。この救いの小屋を必要としている子供たち、そして望んで助けてくれる魔物たちの全てのお母さんになつたの」

シーラはリツケルの頭を撫で、急にキツと強い目をしてメルを見やります。

「あなたがお父さんの何を見たかは本当にはわからない・・・でも、あなたが一緒に過ごした十五年間のお父さんは紛れもなく本物よ。それだけは信じて」

「はい」

メルは震える唇で返事をします。先ほどまで何も感じなかったのに、母の辛い気持ち、今では痛いほど自分に伝わってくるのです。「お母さんはお母さんの。お父さんはお父さんの。メルメルはメルメルの。・・・それぞれ果たすべき役割があるのだと思つたの。だから、私はメルメルの道を否定しません。例え、それがお父さんと戦うことになつてもね」

リツケルを浴場へ送り、シーラが立ち上がります。

「だから、仲間たちと・・・行つてらっしゃい。メルメル・・・あなたの果たすべきことを果たしなさい」

シーラの唇も震えていました。ですが、シーラは決してメルから目をそらしません。向き合います。母として、シーラはすでにメルが何を選びとるか知っていました。だからこそ、娘の道を促したのです。

メルは母をジッと見返します。間違いありません。この人が自分の母親なんです。そうでなければ、こうまで自分を真剣に見てはく

れないでしょう。力強く送り出してくれなんてしないでしょ。

「・・・行ってきます。お母さん」

シーラはお母さんと呼ばれたことに、少しだけホツとした顔を見せます。

「きつと・・・お父さんと戻ってくる。だから、もう少し待っていて」

メルを心で込めた言葉に、シーラは目尻に涙をためて強く、強く、
・・頷きました。

ミルミ城。かつてはメリンの中心であり、魔法大国として栄えた場所でもあります。

しかし、栄華を極めたのも今は昔。魔神バルバトスの破壊の爪痕は深く、城壁も屋根も門もいたるところ無惨に押し潰されており、所々に描かれている守護の魔法陣も効力を失っていました。終日降りしきる黒い雨で、淡い桃色であった壁も汚れてしまっています。今では、怪物たちが我が物顔で闊歩する魔窟と化していました。

魔神の身体が封印されている場所とあって、かなり敵も凶悪です。デス・コマンドーなどのアンデッド系や、変態の帝王などの吸血鬼系、隣の人に恋しちゃった・・・なんていう気持ちの悪いマツチヨな魔物もでできます。ネーミングはともかく、いずれも強敵ですし、中にはファイヤーストームなどの魔法を使うような輩もいます。ボーズ太郎がコールドバリアを習得していなければ、この苦難を乗りきるのには難しかったでしょう。

「魔神バルバドスはひどいやつだな。この城もう使いものにならないじゃないか・・・ゲホゲホ」

崩れ落ちたシャンデリアに触れ、埃が舞い、ノアが咳き込みます。「巨体な魔神バルバドスが怖れたのは、ファルの物理的な剣技ではなく、遠方からも攻撃できるメリンの魔法力だったみたいです。だから先にメリンが狙われたと・・・まあ、それは偶然だと思いますが」

流暢に解説してみせるメルを見て、ノアがパチパチと目を瞬きま
す。

「メル。あんた……。そうか記憶が戻ったんだっけ」

ノアが少し気まずそうな顔をしましたが、メルはニッコリと笑い
ます。

「記憶が戻っても、私は私です。メルメルです。ノアの友達である
のに変わりないわ」

「そうだよね。ゴメン。アタシが気をつかうなんて……。らしくな
かったよね」

ボーズ長老の言葉を意識しすぎていたのかも知れません。メルは
ノアが思っている以上に気丈だったのです。

「すごいボー。二人とも早くこっちに来てみるボー!!!」

先に進んでいたボーズ太郎がノアたちを呼びます。

「なんだ……。これ」

近づいたノアは、ポカンと口を開きました。

「ここが王の間への入り口だろう。ジャスト城とは比べものにもな
らないな」

見上げていたレイが、苦笑しながら言います。

背丈の五倍はあろうかという鉄扉。メリンの肖像や、不思議な魔
法文字が掘られ、それらでびっちり埋め尽くされている荘厳な大扉
です。比較的、メリンの建築物は、耳の長さを考慮して大きく扉を
設けているのですが……。それにしても、これは大きすぎます。

「全員で力を合わせないと……。開かないボー!」

ボーズ太郎が、腕を捲る仕草をします。ほんとうに針金みたいな
細い腕なので、ぜんぜん頼りなさそうなのですが……。

「いえ、待って……。この扉は、私一人で開けられます」

メルが手を挙げます。三人とも驚いた顔をしました。いかにも、
か弱そうなメルが、とてもこんな大きな扉を開けるとは思わなかつ
たからです。それを見てとったメルは、クスリと笑いをこぼしまし
た。

「力じゃ無理なんです。これは、魔法の力で閉じてありますから……」
メルが両手を合わせて呪文を詠唱します。それに呼応するかのように、鉄扉が光り輝きました。ギギギイという重厚な響きをたてて徐々に開かれていきます。

舞う埃にむせ返ります。埃が落ち着き、ようやく目を開いたとき、四人の顔が冷たく凍り付きました。扉の向こう、王の間に魔神バルバトスがいたからです。

姿形は人間に近いですが、何よりもその体長はおよそ30メートル。ノアがつま先立ちしても、足首にまですら届きそうにありません。それこそ城よりも大きいのではないかという巨大さです。さっきの鉄扉が小さく見えるぐらいです。

無骨な銀色の鉄仮面。巨大な二本の角が両脇から飛び出しています。庇の下は真つ暗で、生きている気配はしません。

指は三本。いずれも、鉄仮面と同じような無骨な銀色をしています。爪先はまるで大型クレーン車のアームです。どんな猛禽類よりも凶悪で、こんなのに掴まれたら、人間なんてすぐにバラバラになってしまうことでしょう。

王座を潰し、そのまま魔神バルバトスは片膝を立てて、しゃがみ込むようにしていました。身体の内側には黄金色に輝く魔法陣が展開しています。これがスタッドの魔法、聖結界エミトンです。

「……死んでいるみたいに見えるボー」

「死んでなんていない。ただ、いまは眠っているだけだ……」

レイが忌々しげに言って、ツラリと剣を抜きます。

「これが邪悪の元凶……。世界を恐怖に陥れた、魔神バルバトスか」

ノアは眉を寄せました。こんなのが暴れていたのです。これに比べれば、オルガノツソなんてまだまだ可愛いものだとなアは思いました。

ピクリとも動く気配のない魔神。ですが、とてつもない力を秘め

ているのは見ただけで解ります。できれば近寄るのだって勘弁したいぐらいです。

「でかいけれど・・・一斉攻撃したらやつつけられる、でしょ」

ノアがそう言っただけ構えます。残りの三人も最大限の攻撃を放とうと構えました。

「・・・お勧めはできぬな。魔神バルバトス様の肉体は無敵。下手な攻撃をすれば、その衝撃で目覚める可能性もあるぞ」

天井の隅から声がしました。よく見ると、端の部分が壊れているようで、天井に穴があいています。そこから雨が降り込んでいました。

天井に描かれた魔法陣の軌跡を辿るように、バツバツサと何か大きなものがグルグルと旋回します。

旋回していたものはゆっくりと降下してきます。コウモリのような羽を動かして、トカゲのような頭頂を持つ深緑色のドラゴンです。

瞳がサファイアのようにキラキラと輝いています。

「・・・四天王アルダーク」

ノアがポツリと言いました。それを正解だと言うように、アルダークはバツサと大きく羽を動かして、魔神バルバトスの前でホバリングします。ノアたちの髪が風圧で乱れました。

「フフフ。わざわざ、そのメリンの張った鉄扉の結界をほどいてくれるとはな・・・これで、あの狭い天井裏を抜けなくとも外にゆける。礼を言わねばならぬな」

アルダークは鉄扉を見ながらそう言います。どうやら、この部屋は封じられていたようです。

「れ、礼っていうなら・・・なにをくれるのさ!？」

ノアが皮肉に笑いながら問います。冗談を冗談で切り返してきたのを見て、アルダークは少しだけ嬉しそうに笑ったようにみえました。そういう人間臭さがまだ残っているのです。

「礼・・・。そうだな、苦しまずに殺してやるという礼はどうだ？

人間よ」

「そんなのごめんこうむるね！」

ノアがターゲットを、魔神バルバトスからアルダークに替えます。
「誇り高い四天王アルダークよ！ もう、人間の心は残っていないのか！？ 戦いを回避できないのか？」

レイが尋ねます。アルダークは首を横に振りました。

「・・・人間の心？ 何を言っている？ 私は魔神様の下僕が一人速の四天王アルダーク。魔神様に仇なす敵は全て破壊するだけだ！」
アルダークが高く上昇します。そして、先制攻撃。口から炎の球を吐き出しました。

「あ、危ないボー！ 『コールドバリアー！！』」

ボーズ太郎が咄嗟に氷の盾を張ります。四角い氷壁が中空に出現して、ジュジュツと炎の球が溶け散ります。

「ほう。魔法か・・・ならば、私も見せよう。 『轟き叫ぶ大気、我呼ばわるは聖なる雷光。ライトニング！！』」

雷の柱がノアたちをめがけて落ちます！ なんと、魔法を使ったのです！！

「そ、そんな・・・私の使う魔法よりも・・・強い！？」

メルが啞然としているのに、レイが走ってきて、メルを横抱きにして雷の柱から助けます。

「ボーッ！ 雷を防ぐ魔法はまだ手に入れてないボーッ！？」

「ボーズ太郎！！ でえいいいい！！」

ノアがボーズ太郎にタツクルをかまし、持っていたダガーを放りました。雷の柱は、金属であるダガーに命中します。辛うじて、ノアもボーズ太郎も魔法を避けました。

「クハハハ！ 息をつく暇はないぞ！！ 『連なる霜。我が言霊に従い、立ち塞がる凍てつきし飛礫となれ・・・ブリザード！！』」

氷塊が降り注ぎます。それだけでなく、アルダークが連続して炎の球を吐き出しました。氷の飛礫に、炎の球の連続攻撃です。ボーズ太郎が、ヒートバリアかコールドバリアのどちらを使えば良いか迷ってオロオロします。

「よける！ 一発でも受けたらお終いだ！！ 防御は考えるな！！」
レイがメルをかばいながら叫びます。ノアは素早い足で逃げ、ボ
ーズ太郎はわたわたしながらも、なんとか攻撃をかわします。

「ちよこまかと・・・」

アルダークが少し降下してきました。直接に止めをさそうとの魂
胆です。その機会を、ノアとレイが見逃すはずもありませんでした。

「レッド・ステイル！！」

「見せてやる！ ジャスト王国に代々伝わる剣技！ 猛る獅子の牙
『レイジグファン！！』」

ノアが紅い閃光となって、アルダークの周囲を駆けめぐります。

レイの剣が黄金色に輝いたかと思うと、獅子のような鬣たてがみのオーラ
を放ちながら敵に突進します。

「うぐおッ！」

ノアは背中を斬りつけ、レイのレイジグファンがアルダークの
足に一文字傷を与えました。青白い鮮血が飛びます。アルダークは
怯んで、再び上昇しました。

「フフフ。この私の身体に傷を付けるとは・・・ただの人間ではな
いようだな」

「くっそー。固い、固すぎる！！」

「レイジグファンで・・・ヤツの足すら切り落とせないなんて！
？」

ノアもレイも手がジンジンと痺れていました。アルダークの鱗は
それだけ固いのです。必殺の一撃だったはずなのに、アルダークは
こんなものは負傷の内に入らないといった様子なのです。

「退きましよう！ このままでは勝てません！！」

メルが言います。ノアもレイも驚いて振り返りました。

「で、でも！！」

「このまま魔神バルバトスを放置していくわけには！！」

ノアもレイも口々に言いますが、メルの目が、何も言わせまいと
いう真剣さを含んでいます。

「父……いえ、オ・パイが昔に言っていたことを思い出しました。アルダークは、ファルの優秀な剣士であつたと。いくら悪魔になつたとはいえ、魔法が使えるとは思えません。何か裏があるはずですよ！」

「なに？ オ・パイだと……小娘……貴様は？」

メルの言葉に、アルダークは少し動揺したようです。その際に、ノアとレイは頷きあつて駆け出しました。

「ま、待て！ 誰が逃がすと言つたか！！？」

「それでも逃げるから盗賊なんだよッ！ ほれ、『バイバイ煙幕くん！』」

ノアが、懐からポイツと丸い玉を投げます。ヤグルにもらつたヤツの改良版です。玉にはノアの似顔絵が描かれていました。転がり落ちると、ブシユシユシユツともものすごい勢いで煙を吹き出します。

「グホオオア！」

大きな鼻でそれを吸い込んでしまったアルダークは苦しみます。たまらず、バツサバツサと天井の隅へと、新鮮な空気を求めて逃れました。

とりあえず、この間に、四人は無事に王の間から撤退したのでした……。

第七章 速の四天王アルダーク（後書き）

ゲームだと多角的に情報をプレイヤーに得させることができるのですが、小説だと一方的なので・・・全部を書ききるのが難しいw どうしても、質問攻め、説明口調なのはご愛敬ということw。

ミルミ城の設定はちょっと違いますね。本当はワープ装置なんかある迷宮なんですw まあ、小説にはそんなのいらんかなあとw ちなみにアルダークの台詞も、昔の資料には断片しか載っていない。「フツ、そんなに礼が欲しいのならば、苦しまずに死ねるといふ礼をくれてやるw」というのが正しい台詞らしいですが。ノアとのこういうやりとりで、こういう台詞を言わせたのか全く思い出せないのです。そこで、上記のようなやりとりで・・・無理やりに言わせています。うーん。なんか違和感w

仇が自分の親だった・・・王道設定まっしぐらです。はい。レイの境遇などもちょっと出せたので、まあ、良かったかなあと。

今回は・・・もちろん、アルダークとの決着です。アルダークが魔法を使える秘密。そして、攻撃の通用しないアルダークにノアたちはどう出るのか？ こうご期待・・・とw

第八章 破天荒！ ファルの少女ミャオ

息も絶え絶えに、全力疾走して逃げきった場所は、嚴重に守られていたであろう宝物庫らしき場所でした。金の王冠や、ダイヤの首飾り、山積みになされた金貨などが宝箱に無造作に放り込まれています。

「うっひょー！ お宝だぁーい」

金銀財宝に数々を前に、ノアの目が光り輝きます。水泳の飛び込みのように、お宝の山にダイブしようとするのを、レイが引っ張って止めました。

「そんなことをしている場合かよー！」

「あ。ごめんごめん・・・つい」

ノアは頭を掻いて反省している素振りを見せながらも、腰のポーチに金貨を放り込んでいました。すさまじい盗賊魂だと、レイは呆れた顔をします。

「・・・でも、こんなところに隠れていてもいつかは見つかってしまっポー」

ポーズ太郎は冷や汗を拭いながら言います。

「アルダークの魔法だけでも・・・なんとか阻止できればいいのですが」

メルの言葉に、三人とも頭を捻ります。ですが、なにも良いアイデアは思いつきません。

「ま、とりあえずさ。今の内に体力を回復しておこうよ」

言葉とは裏腹に、ノアは宝物庫を物色しています。目にも止まらぬ早業で、ポーチにポイポイと金目のものを詰めこんでいきます。

「ちよつと待って。ノア。その手に持っているものは・・・」

「え？」

メルがノアの手を指さします。ノアが今しがた掴んだ物は、いかにも高そうな紅い宝玉でした。中に竜のような顔が埋め込まれてい

ます。なかなか凝った細工です。

ノアがちよつと惜しそうに、メルにそれを手渡します。メルは訝しげに眉を寄せて、しげしげとその宝玉を見やりました。

「これは……『とうえいせき投影石』ですね。それもかなり強力なものです」
「投影石？」

「ええ。とても珍しい石なんです。貴重なもので……伝えたい情報などを、文字や絵ではなく、魔法力で立体映像として記録することができるとは」

「なにが記録されているの？」

ノアが興味津々で尋ねるのに、メルは少し考える素振りを見せましたが、やがて意を決したようにコクリと頷きます。

「……再生してみましょう」

メルが両手を開き、投影石に魔法力を注ぎます。パツと光りが放たれ、ノアたちはその場から数歩下がりました。

途端、頭上に魔神バルバトスが出現します。しかも、さっきの封印されていた状態ではありません。赤い目を輝かせ、ブーツと鼻息あらく、完全な戦闘体勢です。今にも突進してきそうです。それが拳を振り上げます。それを目の当たりにして、ノアもレイもボーズ太郎も腰を抜かしました。

「幻です！ 心配しないで！」

メルが言います。そういえば、気づけばミルミ城の外にいて、辺りは火の海です。でも、熱さもなにも感じることはありません。触れようとしても、そのリアルな映像に触ることはできないのです。

『うおおおッ！』

『倒せ！ 一斉にかかれ！！』

周囲で怒号が響きます。どうやら、ここは昔のミルミ城のようです。いま、まさに魔神バルバトスとの決戦の時なのではないでしょうか。三角の耳をしたファルたちが剣や斧を持ち、メリンは水晶玉や魔法の杖を掲げます。互いに声を掛け合い、連携して魔神バルバトスに突撃していきます。

レイですら見たこともない高等な剣技。メルが知っている以上の高度な魔法。それらが四方八方から繰り出されますが、魔神バルバトスは身じろぎもしません。無敵の青黒い筋肉が、それらを吸収してしまうのです。

魔神バルバトスが拳を振り上げます。たった一撃で、十人のファルたちが吹き飛びました。大きな足で踏みつけます。二十人のメリンが下敷きになりました。まさに地獄絵図です。魔神の一挙一動で、人が虫けらのように死んでいくのです。

「こ、こんなヤツ・・・勝てるわけ、ないじゃん」

ノアはガクガクと震えながら、幻影の魔神バルバトスを見上げました。魔神バルバトスは笑ったかのように、赤い目をギリリと光らせてノアを見下ろします。その爪先が、ノアに向かって襲いかかりました。

「うわーッ！」

幻と解っていても、ノアは思わず悲鳴を上げて身をかばってしまいます。

「おお！ 四天王だ！」

「四天王が来てくれたぞ！」

魔神バルバトスの三本爪が、ノアの眼前でピタリと止まります。ノアに重なっていた・・・そう、魔神バルバトスが狙っていた本来の人物が、その隙に逃げ出します。それは、ノアと同じ年ぐらいのメリンの少女でした。

ノアは恐る恐る目を開けてみました。瓦礫の上に立つ四人の人物。他の兵士たちが臆しているのにも関わらず、強い眼差しで魔神バルバトスを見据えています。

「あ！ 俺様の石つぶてを喰らえい！」

四人の中で一番大きな身体をしたファル。青い角刈りの頭に、割れた顎の壮観な顔つきの男です。それが、大きな瓦礫の一つを持ち上げて、斧で殴りつけました。それが魔神バルバトスの顔面にバカんと命中します。

「あ……あれは」

「力の四天王オルガノツソ……だ、ボー！ た、たぶん！」

牛のような風貌ではありませんでしたが、使う技も雰囲気もオルガノツソそのものです。きっと人間の時のオルガノツソなのでしょう。

『いくぞ、オ・パイ。ビシユエル。私に続け！！』

長身で覆面をしたファルの男が言います。長い双剣を持ち、目にも止まらぬ速さでビュンツと魔神バルバトスの方に飛び上がりました。魔神バルバトスは、自分の目の前にまで飛んできた男に驚いて硬直します。

「……アルダークだな、間違いなく」

レイはゴクリと喉を鳴らしていました。剣士として、アルダークの動きから目が離せないようです。

アルダークは流れるような剣捌きで、縦横無尽に魔神バルバトスを斬りつけ、斬り終わり際に何やら小さな石を取り出しました。

「あれは『魔法石』！？」

メルがそれを見て叫びます。

アルダークはその石を、両手を合わせて砕きました。メルの魔法に似た炎が、魔神バルバトスを包み込みます。

『フフン。相変わらぬ奇術だね。ほら、今度は私ことビシユエルの美しい魔法を見せてあげるよ』

長いメリンの耳。一見、女性ではないかと思間違えるほどの美青年が前に進み出ます。派手な服に、男のくせに顔には化粧までしてありました。

ブツブツと呪文を詠唱し、尋常じゃない強力な魔法を放ちます。

「なんて魔法力！ 私の……五倍。いえ、十倍はあります。しかも、こんな上級魔法を！？」

メルが驚きに目を見開きました。

ビシユエルが放った魔法は、巨大な凍てつく氷の刃。空気そのものが震撼し、無数の槍となり、それらが魔神バルバトスに一気に襲

いかります。

「いまだ、オ・パイ!!」

アルダークの声に合わせ、最後に後ろ手を組んだデムの男が走ります。シワやヒゲこそないものの、それはオ・パイでした。若い頃のオ・パイです。その目は冷徹ではなく、正義の光りに燃えていました。

「うおおおあちゃああ!!」

アルダークにも負けない程の跳躍力。魔法に苦しんでいる魔神バルバトスに、拳と蹴りの連打。何も通用しなかったはずの無敵の筋肉でも、それにはたまたまらずに顔をかばいます。

「ちい! しゃあ! ちゃあいあああ!!」

オ・パイの手刀が、魔神の仮面を砕きます。オ・パイの蹴りが、魔神の胸を抉ります。たった一人の人間の一撃が、魔神バルバトスを追い詰めていきます。

「うつつ。こんな男と・・・アタシは戦ったつてのによ」

「魔神も半端ないが・・・オ・パイもまた四天王最強と呼ばれていただけはある」

ノアとレイが拳を握りしめて言います。情けなく、悔しいですが、今の自分たちではこの戦いには到底ついていけそうにありません。レベルが違いすぎるのです。

「・・・お・・・お父さん」

小さい声で、切なそうな顔で、メルは戦っているオ・パイの背中を見やります。世界を守るために戦っている父の姿。それはまさしく、メルが幼いときから知っている父の姿に他なりません。自分が生まれてもない時に、こうやって父たちが戦っていたのだと知って、メルは何とも言えない気持ちに押しつぶされそうになります。

メルの精神力がとぎれました。魔法力の供給を失った投影石は光りを失い、映像が消えてゆきます。そして、部屋も薄暗い宝物庫へと戻っていきました。力を失った投影石は、コロンと地面の上に転

がります。

「・・・あれだけ強かった四天王でも、魔神バルバトスの前に敗れたわけじゃ。恐ろしいことじゃよ」

転がった投影石をヒョイツと持ち上げ、嘸れた声がそう言います。映像の余韻に浸っていたノアたちはハツとしました。いつの間にか、一人のメリンの老婆が側と一緒に映像を見ていたのです。

「あ、あなたは・・・」

「ワシはミルミ城の最後の守人。ま、そう言ってもただ住んでいるだけの者じゃがな」

歯のない口でニカツと笑って、しわくちやの老婆がそう言います。「こんな危ないところに・・・住んでいるんですか？」

レイは訝しげな顔で問います。ですが、メリンの老婆は小さく笑っただけで答えませんでした。

「お主ら、あのアルダークを倒しに来たんじゃろ？」

「な、なんでそれを知っているボ」

ボーズ太郎は動揺して胸を抑えます。メリンの老婆はグルリと皆を見やりました。

「・・・ええんじゃ。そんなことはな。魔神バルバトスと戦った英雄が、今では魔神を守るために使役されておる。しのびないことじゃ。ワシからも頼む。ヤツを解放してやってほしいのじゃ」

メリンの老婆が手を合わせて言うのに、四人は顔を見合わせました。

「倒したいのは・・・やまやまなんだけれど」

ノアは、アルダークに手も足も出なかったことを思い出して唇を噛みました。

「・・・大丈夫じゃ。お主たちならきつと。ほれ、これを持っていきなされ」

メリンの老婆は、メルの手投影石を渡します。

「これの本当の名称は『龍王の瞳』。これはただ映像を記録して映し出すだけではない。本当の力は、偽物の映像を暴き、真実の姿を

見破る偉大なる龍の王の目なのじゃ」

「真実の姿を……」

メルはギョツと龍王の瞳を握りしめます。

「行きましよう。アルダークを倒しに……」

メルの言葉に、三人は力強く頷きました……。

再び魔神バルバトスの間。目を瞑って彫像のように動かなかったアルダークが、鎌首を上げて目を細く開きます。

「フフフ。やはり、また性懲りもなくやってきたか……。大人しく逃げれば良かったものを」

「うるさい！ やられっぱなしってのは性に合わないんでね！！」

ノアが髪の毛を逆立てて言います。アルダークは笑い、そして翼を大きく広げました。

「そうか……。ならば、もう二度と立てぬようにしてやろう！
今度は逃げれると思うなよ！！」

炎の玉を吐こうと、口を大きく広げたアルダークを前にメルが立ちただかります。

「……小娘。そういえば、オ・パイの名を口にしていたな」

「ええ。私の父です。我が父の友、アルダーク！！」

メルの言葉に、アルダークがピタツと動きを止めます。

「友？ オ・パイ……。シーラ。シーラ。シーラ？ ああ？ 誰

だ？ 私は……。私は。うおお、なんだ、この記憶は……。わ、私は魔神様仕える悪魔。速の四天王アルダーク！ う、うぐう……」

アルダークは頭を振って苦しみ出します。人間の時の記憶と、悪魔になった時の記憶が交差して混乱しているのです。

「アルダーク。さあ、本当の姿を……。！ 龍王の瞳よ！ 今ぞ、この悪魔の偽りを暴きたまえ！！」

メルは心を込めて、龍王の瞳を掲げます。それが、アルダークを照らしました。

「うお！？ そ、それは……。グググ。や、やめる。龍の王には、

「逆らえぬッ！！！」

アルダークが悶え苦しみます。その光りは、偽りのドラゴンの秘密を見通します。ドラゴンの姿は偽り。偽物の姿は消え失せ、元のファルの青年であった時の姿が後ろに浮かび上がります。

「うとうう・・・や、め、ろ！ おのれ！！」

人間の姿に戻ったアルダークは、光りから逃れるようにピョンと跳び上がりました。そして、空中で体勢を立て直し、構えた双剣でメルに襲いかかります。

「きゃああ！？」

メルが持っていた龍王の瞳が、アルダークの左剣の一閃によって砕かれました。そして、右剣でメルを突き刺そうとするのを、レイが割って入って止めます。

「姿は取り戻しても、人間の心は取り戻せないのか！！？」

「知らぬ！ 知らぬ！ 私は魔神様の四天王アルダーク！！！」

怒りに満ちた目で、アルダークはレイを押しやります。

「眼前の敵は滅ぼすのみ！ ニン！！ 轟き叫ぶ大気、我呼ばわるは聖なる雷光。ライトニング！！！！」

アルダークが魔法石を取り出し、印を結ぶ仕草をしながら石を砕きます。

「させません！ 轟き叫ぶ大気、我呼ばわるは聖なる雷光。ライトニング！！！！」

メルが咄嗟に放った魔法が、アルダークの魔法を相殺します。アルダークは信じられないといった様子で、目を見開きました。

「それが、あなたが魔法を使った秘密です。術者でなくても、魔法石を砕くことで石に込められた魔法を使えます。ですが、それは仮初めのもの。見かけだけは強力そうに見えても、実際には本物の魔法には遠く及びません！」

「グググ・・・。こんな子供らに、私の術が見破られるなど！！」

アルダークは飛び跳ねて距離をとり、深く構えてから、双剣を交差させて突進しました。レイの目がキラリと光り、皆をかばうよう

にして走り出します。

「速の秘技『天龍双牙てんりゅうそつが！』」

「猛る獅子の牙『レイジグファン！』」

交差する双剣と、縦に振り下ろされた剣。二人の剣技がぶつかり合います。レイが力負けしてジリツと後退しました。しかし、歯を食いしばって、王国剣技のプライドを守ろうと気合いを入れます。レイの渾身の力が、アルダークを少しずつ押しやります。アルダークが徐々にのけぞっていきます。

「そ、そんな・・・この、この私が！！？」

「ぬおおおおおおッ！！」

ちよつと王子様がしちやいけないような、鼻の穴をおっぴろげた真つ赤な顔で、レイはレイジングファンを振り下ろしきります。耐えきれなくなり、バキンとアルダークの剣が叩き折られました。

アルダークは折れた双剣を捨て、またもや飛び跳ねます。反撃のために、魔法石を取り出そうとした矢先です。レイの後ろに控えていたノアが飛び出して来ました。

「な、なんなんだ、貴様らはッ！！！？」

「あんたと同じ、正義の味方ってヤツさッ！ 『ストライクアタック！』」

ノアの新必殺技です。あのオルガノツソを異次元に突き飛ばした体当たりを参考に、ノアの猛烈なスピードが生み出す強力な体当たりです。

ノアの肘が、アルダークの身体の真芯をとらえます。空中にいたアルダークは、その場から突き落とされて地面に思いっきり激突しました。

それは皮肉なことに、速の四天王が、ノアの速度に敗れた瞬間でした・・・。

倒れたアルダークに、ポーズ太郎が魔法を施します。

「癒しの魔法だポー。『生命の息吹をかき集め、雫と為して癒しと

なれ・・・ヒール!」

緑色の光がアルダークに照射されます。しかし、アルダークの身体は治る気配がありません。

「・・・ということだ?」

レイが尋ねます。ボーズ太郎は自分のせいではないと、ブンブンと首を横に振りました。

「・・・悪魔に改造された身だ。姿は取り戻せても、もはや私は人間ではない」

気がついたアルダークが目を静かに開きます。

「アルダーク・・・さん。記憶の方は?」

メルが心配そうに尋ねます。アルダークの目が優しげに笑いしました。

「そうか・・・。君はオ・パイとシーラの・・・。思い出したよ。

確かに、シーラの面影がある。ああ、私は、もう二十年も人間としての記憶を失っていたというわけか」

ゴホゴホとアルダークが咳き込みます。覆面に血の跡が滲みましました。

「そ、そのゴメン。アタシ、手加減しなかつたし・・・」

ノアが謝罪するのに、アルダークは首をわずかに横に振りました。「いや。全力で来なければ、私が君たちを殺していた・・・。それに、こうならねば私は記憶を取り戻せなかつただろう。いいんだ。

悪魔のまま一生を終えるよりは、ずっといい」

四人とも辛そうな顔をします。アルダークの目が虚ろになっています。でも、誰もどうすることもできないのです。

「他の四天王も悪魔に変えられたとなれば、強力な魔法を扱うビシユエルと、暗殺拳の使い手オ・パイは私など比べものならぬぐらいの強敵となるだろう・・・。心するがいい。そして、頼む。どうか、二人をも呪いから助けてやってくれ」

そう言って、アルダークは力無く笑いました。メルがギョツとその手を握りしめます。その温もりに、アルダークは安らぎに満ちた

顔となりました。

「ああ。シーラ……。愛しのシーラ。君は……。オ・パイを選んだが……。私は……。今でも……。君を……。見守り続けている……。あの世でも……。私は……。ずっと……。君を……。」

アルダークは静かに目を閉じました。それが人間に戻れたアルダークの最期でした……。

「長い間、とてもお疲れ様でした……。ね。アルダーク」

さっきのメリンの老婆が、音もたてずに入って来ました。

「あなたが、シーラさんをずっと想い続けていたように……。私もあなたを想い続けていたことに、とうとう気づかないで逝ってしまわれたのね」

哀しげな顔で、メリンの老婆は笑いました。そして、静かにアルダークの額に手をやります。誰からというわけでもなく、四人もそれぞれ手を合わせて黙祷しました。

「え？」

「な!?!」

「ボー!?!」

「きゃ!?!」

老婆と共に追悼していた四人は、ふと老婆の顔を見て悲鳴をあげました。

さっきまでの老婆の姿ではありません。一人の美しいメリンの少女。それは幻影の魔神バルバトスに襲われた時、ノアと重なっていたあのメリンの少女でした。四天王の登場で辛うじて助かった彼女です。しかも、さっきの幻影の時のように半透明な姿です。龍王の瞳は割れてしまって、発動していないというのにどうということでしょう!?!?

「さあ、逝きましよう……。アルダーク。せめて、あちらへの案内は私にさせてください」

美しいメリンの少女は、礼を言うかのようにノアとメルに向かって微笑むと、スーツと背景に溶け込むように姿を消しました。アル

ダークの遺体も、仄かな光りに包まれて同じように消えていきます。四人は啞然とその光景を見ているしかできませんでした……。あとにはあの四人がいるだけです。

「……幽霊、だったのかな？」

しばらくして、ノアがポツリと言います。

「ええ。きつと……ずっと、ずっと。亡くなってからも、アルダークさんを想っていたんですね。そして、悪魔になってしまった姿から助けたかったに違いありません。天国では一緒になれるですよ……。絶対に。こんなにも待っていたんですもの。報われないはずがありません」

ノアとメルが穴のあいた天井から、空を見上げます。すでに薄暗くなっていた空では、二つの星が小さくキラリと光りました。それは天に還った二人を象徴するかのようでした。

「……報われない想いか。いや、絶対に俺は報われてみせるぞ！」

「ぼ、ポー。何か知らないけど、レイが熱くなっているポー」
そんなそれぞれの切ない想いを胸に、こうして四人はミルミ城を後にしたのでした……。

一方、その頃……。ノアたちとは違う一行が、ガラガ山道のミルミ城よりも先に進んでいました。

山道よりも高い崖の上にある大きな……。それはとても大きな岩それを一生懸命押している小男の姿がありました。これを落として、山道の道を塞ぐ算段のようです。真っ赤な顔で、必死になって押します。

「ふんちヨ！ ふんちヨ！」

「がんばれべー。アホン。がんばれべー」

必死に押しているアホンの後ろで、ダラが額に汗して応援します。

「ふんちヨ！ ふんちヨ！」

「がんばれべー。アホン。がんばれべー」

ピタリと、アホン動きが止まります。そして、ダラをジト目で見

やりました。

「だから、がんばれべーて何チヨ!? そんな気の抜ける応援はいらないって前も言ったチヨ!!! そもそも、なんでお前は押さないチヨ!? なんて、俺ばかりがこうやって力仕事しているチヨ!!! 力仕事はどう見てもお前の仕事だチヨッ!!!!!!」

「んだかー」

アホンが怒るのに、解っているのだから、解っていないのだから、ダラは呑気に返事をします。

「・・・お前、本当に大丈夫チヨ? ボスが、この道を塞げば、ノアたちが先に進めないって言うていたチヨ。ヤツらをレムジンに行かせないため、わざわざこんなメリン領くんだりまで来たチヨ。OKチヨ?」

アホンが事細かに説明します。ダラはコクリと頷きます。

「んだかー」

「・・・であるからに、いまここでこの岩を落とす必要があるチヨ」
「んだかー」

アホンは目を細めます。ダラは相変わらず同じ顔で頷くだけです。いよいよ怪しいです。アホンの話を理解できていないのかもしれないかもしれません。

アホンはジーツとダラの顔を見つめました。細い目からは、何を考えているのか全く読みとれません。

「なら、落とすべー」

いきなりダラがそんなことを言い出しました。

「へ?」

アホンは目を丸くしました。ダラが急に歩き出し、大岩を持ち上げて放り投げます。アホンがあれだけ苦労しても動かなかった大岩を、ダラはヒョイと軽々と持ち上げて投げ飛ばしたのです。

「だーーーー!? ど、どこに投げているチヨ!!!?」

「道・・・だべー」

それは確かに道ではありましたが・・・アホンが落とそうとした

真下ではなく、なんとその先の道に放ってしまったのです。アホンはサーツと青くなります。

「お前は馬鹿チヨ!? あつちはボスが・・・」

アホンが岩が投げられた方を見やります。崖から遙か先を飛び越えた道。道を行く一人の男。その頭めがけて、まさにダラの投げた大岩が引き寄せられるように飛んで行くのです!

「うぬおおおおおッ!!!?」

男は・・・そう、オ・パイは迫り来る脅威に気づき、咄嗟に大岩を蹴り上げて砕きました。そして、すぐにアホンとダラに気づき、鬼の形相で睨み付けます。

「ああ・・・。ダメチヨ。お仕置き確定・・・だチヨ」

「んだべーな」

「だ、誰のせいだと思っているチヨ!!!?」

アホンは泣きながらダラに殴りかかりましたが、ダラは長い手でダラの頭を抑えつけてしまいます・・・。アホンの怒りの拳は空振るばかりでした。

こんなアホンダラなやりとりがあつたわけですが・・・ノアたちはまつたく知る由もありませんでした。

シーラにアルダークの件を報告し終わったノアたち一行は、救いの小屋で一泊し、翌日にガラガ山道をついに越えることができました・・・。

ガラガ山道を越えた先は、ついにファルの領土です。冒険者たちがここまで来た見返りというわけではないでしょうが、とても美しい大海原が広がっています。さっきまでの陰鬱な曇天の雨とは違って変わって、青々とした大空と白い雲がどこまでも続きます。海岸線の砂浜を歩きながら、ノアたちはその素晴らしい絶景に、今までの疲れが一気に吹き飛ば気がしました。

「うわー。アタシ、海なんて初めてみたよー」

「わ、我もだボー! 海の先が見えないボー! 果てしないボー!

「ええ。地平線というヤツですね。あの先には・・・未だ見ぬ世界があるのでしょうか」

ノアもボーズ太郎もメルも、海なんて見るのは初めてです。目をキラキラと輝かせて、さざ波や打ち上げられた貝殻にすら興味を示しては大騒ぎします。海というだけで、テンションが違います。

「まだ海洋学や航海術も、ファルやメリンですら未熟だからな。これから先、きつとこの海を渡る技術が見いだされるだろう。そうしたら、俺もぜひ海外に行つてみたいな。この世界の隅々まで見て回るんだ。そ、そうなつたら・・・メルも一緒に・・・」

いつもは冷静なレイも、ちよつと興奮したように語ります。そして、チラツとメルの反応を見やりました。

「アハハ。ボーズ太郎つたら」

「やったボー！ 我にも毛が生えたボー！」

ノアが昆布を拾つてボーズ太郎の頭に乘せたので、まるで髪が生えたようになったボーズ太郎はホクホクの笑顔で踊ります。動くたびに、パカパカと昆布がボーズ太郎の頭の上で跳ねました。そんなもんだから、メルはお腹を抱えて大笑いしました。レイの話なんてまるで聞いていません。

「アツハハハ！ いいね、ボーズ太郎　もつと踊れ　・・・」

で、何か言つた？　レイ？」

大笑いしていたノアが目尻の涙を拭きながら、レイを見やります。「いや・・・。なんでもない」

レイはガツクリと肩を落としました。気持ちは、あの海の色のようにブルーなわけです。

「・・・と、そろそろ休憩しようか」

結構歩きました。山道よりは楽とはいえ、砂浜を歩くのはなかなか体力を消耗します。それに海をもつと堪能したいというのもありました。もちろん、そんなノアの提案に反対する者はいません。

それぞれ、荷物をおろし、休憩の準備を始めます。ノアとレイは、

拾ってきた長い枝と、テントの幕を使って即席の日除けを作ります。メルとボーズ太郎はそれぞれ、落ちている貝や食べられそうな海草を集めました。

思い思いに休息に入っている四人に、一人のファルの男性が近づいてきます。

「お前さんから、メリンから来たのかい？」

ほどよく日焼けした顔。にこやかな顔に、ちよつとオシャレな口ひげ。手ぬぐいを首にかけ、旅人の服に大きなリュックを背負った姿。自分たちと同じ冒険者なのではないかと、ノアにはすぐに解りました。

「ええ。これから、レムジンに向かうつもりなんです」

誰にも礼儀正しいメルがニコリと笑って言います。それを見て、ファルのおじさんもニコリと笑い返しました。とても人の良さそうな笑顔です。しかし、レイはちよつと警戒したように目を細めました。

「そうかそうか。私はその近くに住んでいる者でね。今日はちよつとした用事で『釣り人の海』まで来たんだが……。なかなか徒歩でレムジンを目指すのは珍しい。メリンのお嬢ちゃんがいて、テレポートを使わないのかい？」

ノアたちがキョトンとするのに、レイが小声で手短く説明します。

「……本当ならば、この釣り人の海からメリンの魔法でレムジンまで一気にテレポートするんだ。デムの人間でレムジンに立ち入る者は全くいないし、またファルの方がガラガ山道に行くこともまずないしね。レムジンは隔絶されていると言ってもいい」

コソコソ話をするのにも、おじさんはイヤな顔ひとつしません。メルがちよつと焦ったようにしながら答えます。

「あ、あの……。私まだ未熟で。まだテレポートまでは会得していません」

その言葉に嘘はありませんでした。レムジンに行ったことのあるメリンであれば、この釣り人の海からだったら楽々とテレポートの

魔法を扱えたことでしょう。でも、メルは一度もレムジンに行ったことがありません。どれだけの距離なのかも、どの位置なのかも不確かなのです。仮にレポートを扱えたとしても、下手をしたら海の上真ん中に移動して溺れてしまうかも知れないのです。そんな危険を犯すわけにはいきませんでした。

「そうかー。それは難儀だね。途中には強い魔物を閉じこめた『ヤマンバ洞窟』があるしな。ま、昔には中には地下道を通ってくる者もいたぐらいだから。ま、なんとかなるだろう」

ファルのおじさんはそう一人で言っていて笑います。ノアはチラリと、ファルのおじさんが背負っている重そうな荷物が気になってしまい、それをジーツと見てしまいます。いや、盗賊の習性なわけですが、ファルのおじさんはハツとその視線に気づきます。

「おや。可愛い盗賊のお嬢さん。私の持ち物が気になるかね？」

ファルのおじさんに言われて、ノアは目を瞬きました。

「あ。いや……。大きな荷物だなあと、思ってた」
ノアは気まずそうに口をモゴモゴさせますが、ファルのおじさんは重そうにリュックを降ろします。

「どっこいしょと。いやー、実は娘に頼まれてね。なかなか魔物たちが凶悪になってきたんで、海に連れて行ってやれなかつたんだが、今年こそは……。ってね。それで、娘のために着る水着を行商から仕入れに行つて来たつてわけなんだ。サイズがわからないので、あるだけ買ったらこんな始末でね」

ファルのおじさんがリュックを開くと、たくさんの色や柄とりどりの、水着が押し込められていました。いくらサイズが解らないからといって、全部を買つてしょうか。ちょっと感覚がずれている感じがしますが、人の良さそうなこのおじさんのことです。無理やりに買わせさせられたのかも知れません。

「あ。そうだ。ちょうどいい。さすがに娘のためとはいえ、こんなにはいらんからな。お前さんたちにも水着をやるう。どうせ、もつておらんのだろ？ せっかく海に来て泳がないなんてもつたない」

ノアとメルは顔を見合わせました。レイはメルに水着という言葉だけで想像して、鼻血を吹き出して倒れます。

「え……。でも。ただで頂くわけには」

「そもそも海とかがって入れるもんなの？」

躊躇う二人をよそに、ファルのおじさんはそそくさと、ノアとメルのスリーサイズを目分量で判断し、適当なものを選んで手渡しました。ノアには赤いツーピースの水着を。メルには白いワンピースの水着です。ついで、なぜか男性物の水着もあったので、それこそ本当に適当に選んでレイとポーズ太郎にも渡します。

「あ、ありがとう」

「いいんだよ。それじゃ、海を満喫しな エンジョイだよ」

ファルのおじさんは笑って、再びリュックを背負います。

「まあ、再びレムジンで会うこともあるかも知れないね。ふむ。それじゃあねー。『道なき者の道標。次元を越え、瞬く間に我を何処へと移せ……。テレポート!!』」

ファルのおじさんはテレポートの魔法を唱え、光と共に飛んでいってしまいました。それを見て、メルは目を丸くします。鼻血を出して倒れていたレイも飛び起きました。

「な!?! ま、魔法……。だと? 魔法石も使わずに!?!?」

レイの言葉に、ノアが意外そうな顔をします。

「だって、レムジンまでは……。魔法で行くのが当然でしょ? 何が不思議なんだ?」

「え、ええ。確かにそうなんですけど……。ファルが魔法を使うなんて……。まずあり得ないことだからです。アルダークさんのように、魔法石を使うなら別ですが」

「剣技などの体術に優れたファルで、魔法が使えるのは……。本当に限られた人物だけなんだ。それも、そういう人物は大抵が強い魔法力を持ち合わせていることが多い。あの男……。いったい何者だ?」

メルとレイが口々に言うのに、ノアは小首を傾げました。

「そういえば、アタシが盗賊だつてすぐ判つたみたいだし……。だからレイは、ずっとあのオジサンのことを胡散臭そうに見ていたわけ？」

ノアの言葉に、レイは首を横に振ります。

「いや……。魔法が使えるのは知らなかった。だけど、ファルが俺やノア、ボーズ太郎を見て普通に話しかけてくるとは思えなかったんだ。ファルはメリン以上に、デムを毛嫌いしているからね」

レイが難しい顔をして言うのに、ノアは「ふーん」と言いました。ファルだつて全部が全部そういう人じゃないだろうとは思いましたが、レムジンに行ったことがあるレイが言うのだから、きつと疑わずにはいれないような仕打ちをうけたのかもしれない。

ボーズ太郎が持っている水着を掲げました。

「とりあえず、これ……。どーするボー？」

ボーズ太郎の言葉に、ノアもメルも手に持った水着を見やります。レイはメルが白い水着を持っているのを見て、再び鼻血を出して倒れました。

「まー。せつかくだし」

「着て……。みますか？」

怪しい人ではありませんでしたが、その好意には甘えてしまおうと……。二人はいそいそと茂みに入って水着に着替えます。着替えた時には、すでに怪しい人のことなどすでに忘れてしまっていました。

即席の水着ショーが始まります。メルが恥ずかしそうに茂みから出てきました。

「うおおおおお！！ か、完璧だ！ 完璧すぎる！ メル！！」

「眼福だボー！ 眼福だボー！」

レイの口から湯気が吹き出ます。まるで沸騰したヤカンです。ボーズ太郎はなぜか両手を合わせて拝みだしました。

少し頬を赤らめた控えめな表情とは裏腹に、ボン・キュツ・ボンと、出るところは出て、しまる所はしまった完全なスタイル。スラリと滑らかな白く長い足。まるで計ったように作られたそのナイス

バディだけは、淫乱・淫靡かつ不条理に男心をくすぐるのであります。脇腹とへそまわりだけ布がなくて、チラリとワンポイントに生肌を見せつけているのが何とも憎らしいです。浜辺の注目は、まさしく彼女のためにあると言って過言ではないでしょう。

「フフン。では、お待ちかね。次はノア様の登場だぜえー」

ノアが茂みから顔を出し、ニンマリと笑いました。そして、もったいぶって、ゆっくりと茂みから出てポーズを取ります。右手は頭、左手は腰、右足は内股・・・水着モデルの定番ポーズです。

沸騰していたヤカンが急に冷たく、凍ってしまうのではないかというほど冷却されます。ポーズ太郎は前のめりに倒れました。いわゆる五体投地です。

「おい！ お前ら、なんだその反応は！？」

ノアが憤慨して怒鳴ります。レイは乾燥した海草みたいな顔で言います。

「・・・いや、だって、ノア。お前、いつもと変わらないじゃないか」

レイに言われて、ノアはハッと気づきます。いつもの服もかなり薄着なのです。胸当てはちよつと色が変わった程度ですし、違うのは、いつもの短パンとダガーにポーチがなくなっただけくらいしかありません。

「な！ でも、アタシの初の水着だぞ！！ メルと同じ女の子なんだぞ！！ 少しは盛り上げるよ！」

レイとポーズ太郎は、馬鹿にしたようにフンと鼻を鳴らして、肩をすくめました。

ノアとメル。並んで見れば一目瞭然です。メルは完全な女性であるのに、ノアはまるで幼児体型そのものです。胸はペタンコ。腰にくびれは申し訳ない程度。それよりも、筋トレのせいでちよつと無駄な筋肉が多すぎます。まさにアスリートです。この二人にテロツプをつけるとするならば、『新人モデルの美女』と、『熱血格闘技少女』といった感じでしょう。

「がろうっ・・・おあつ!?!」

ノアがびつくりして飛び上がります。肘に何か当たったのです。

「な、なんだ・・・? 魚?」

「え? 魚にしては大きいような・・・」

メルが、水面で動く影を見て眉を寄せます。ノアの側で揺れているそれは、かなり大きいサイズです。

「ミャー!?!」

「うあ!?!」

「キヤー!?!」

バシャーン! 影が変な奇声を上げて水面から飛び出しました。

海水が、ノアとメルの顔に容赦なくかかります。

「うえ!?! な、なんだなんだ??!」

ノアが動揺して硬直していると、飛び出してきたそれはノアの鼻先でパチパチと目を瞬きました。縦に細長い瞳孔が、ノアをジツと捉えています。

「なんだなんだニャ?」

ノアの言葉を復唱して言います。ノアは眉を寄せました。すると目の前の相手も同じように眉を寄せます。どうやら、ノアの真似をしているようでした。

しかし、さつきからノアと鼻先をくっつけてるのです。相手の顔が近すぎて、その黄色い瞳しか解りません。

「あの・・・あなたは?」

まだ動悸がおさまらないメルは、大きく息を吸ったり吐いたりしながら尋ねます。すると、ノアの目の前から、相手がグルリと横に動きました。今度はメルに鼻先まで近づいて行きます。

「あの・・・あなたはニャ?」

今度はメルの真似をしているようです。胸に手を当てる仕草も真似します。

「い、いえ、お名前・・・を聞いたんですが」

優しいメルは、ニコリと微笑みそう言います。すると、相手は同

じように微笑みます。しかし、次にキョトンとした顔をして目をグルリと回しました。

「ミヤオ？ ミヤオの名前？ ミヤオは、ミヤオだよ」

突然、水から飛び出してきたこの人物はミヤオというらしいです。相手がミヤオと四回も言ったので、ノアもメルももう忘れそうにありません。

「あの・・・そうですか。ミヤオさん。私はメルメル。こちらはノアです」

メルが自分とノアの紹介します。ミヤオは再びノアを見やり、そしてメルに向き直ります。

「メルメル？ ノア？ 女？ 女だよ？ ミヤオも女。よろしくニヤー」

ミヤオが八重歯を出して笑います。いまいちよく解らない紹介でしたが、ノアもメルも愛想笑いで返しました。

「えっと・・・。ミヤオ。あんだ、見たところファルのようだけど・・・」

ノアがミヤオをジッと見やります。ノアより小柄ですし、幼い顔立ちからしても、二つか三つは年下でしょう。セミショートにしたエメラルド・グリーンの髪が印象的です。茶色い三角の耳と、尖った鋭い爪に、水面を叩いている長い尾っぽからしてファルには違いありません。

「あ。この子・・・裸、ですよ」

メルが口に手を当てて言います。ミヤオの全身を見やったノアは目を丸くしました。一糸まとわぬ、生まれたままの姿なのです。

「あ、あんだ・・・服は？」

「ふく？ 魚取るときに服きてたらぬれちゃうニヤ。ビチヨビチヨにしたら、コネミのおじちゃんに怒られるニヤー」

あっけらかんと言うミヤオは、魚をつかみ上げてニカツと笑います。ノアはなんだか肩をがっくりと落とします。

「な、なんか疲れるヤツだなー」

そんなやりとりをしていると、血相を変えたレイが猛烈な勢いで海に飛び込んで来るのが視界に入りました。水しぶきを立てて走ってきます。

「どうしたー!? 大丈夫かー!!!? 何があっただー!!!!!?」
ミヤオが興味を出して振り向くのとほぼ同時でした。ノアの二度目の鉄拳が、レイの顔面に炸裂します。

「お前は来んなー!!!」
哀れにも、レイはクルクルと軌跡を描いて砂浜に飛んでいきます。ポーズ太郎が作っていた砂山に頭から突っ込みました………。

ミヤオは、砂浜に無造作に置いてあったピンク色のTシャツを羽織って黒いスパッツをはきます。人前に出れる姿になったので、レイもポーズ太郎も目隠しを外すことが許されました。

「で、あんたはいつたい何者なんだい?」

ノアの問いに、ミヤオは目をパチパチとさせます。

「ミヤオはミヤオだよ」

もどかしいやりとりに、ノアは苦い顔をしました。そんな禅問答を求めているわけではないのですから。

「じゃあ、どこから来たんだ? ファルの領地とはいえ、こんな所はレポートでしか来れない辺境の地だ。首都レムジンか?」

レイの問いに、ミヤオは首を右に左に動かします。

「ファル? レムジン? なにそれ? 知らないニヤ。ミヤオはあつちから来たミヤ」

ミヤオは、ノアたちが向かおうとしていた先を指さします。

「……自分がファルだとすら解らないのか? んー、困ったな」
まさに迷子の子猫ちゃんです。この付近では魔物の気配はありませんが、この世間知らずの女の子を放っておけるわけがないのがノアたちです。なんとか素性を確かめ、住んでいた場所に送り返してやらねばなりません。

四人がどうすればいいか思索している中、ミヤオはレイとポーズ

太郎を興味津々で見っていました。

「なあ、お前。女かニヤ？」

ミヤオが、レイの目の前に顔を近づけて尋ねます。あまりに近いので、レイは目を白黒させました。

「お、俺が女に見えるか？俺は男だ！」

レイがちよつと怒って言うのに、ミヤオは目を細めます。そして、おもむろにレイの胸を撫でました。もちろん水着になっていたので上は裸なわけです。尖った爪が敏感な所を引っ搔いたので、レイは目を丸くします。

「あひゃ！な、な、ななな！！？」

「ちよ、ミヤオ！？」

「ミヤオさん！！」

女の子に触られているという恥ずかしさと、くすぐったさでレイが飛び上がります。

「おー。胸がない。真っ平らだニヤ。でも、ノアも真っ平らだニヤ」

「おい！どさくさ紛れに、なに失礼なこと言ってるんだ！！」

ノアが怒りますが、レイとポーズ太郎が思わずそれに頷いてしまったので、ノアの怒りの矛先は、この二人に鉄拳と肘撃ちという形で向けられました。

「んー。お前は？」

ミヤオが目を細めたままに、ポーズ太郎を指さします。

「わ、我は・・・ど、どっち、だ・・・ポー？」

生物学的にハッキリしないポーズ太郎は迷います。ですが、まあ反応を見る限りは男だと思われるのですが・・・。

「うーん。解らないニヤ。でも、お前たちは男じゃないニヤ。男つてのは、こうお腹がポーンと出てて、頭がピカピカって光っているニヤ！」

ミヤオがそう言うのに、四人とも「へ？」という顔で首を傾げます。

「た、確かに・・・。男性にはそういう方もいますが。そういう外

見だけで性別を決めるのは」

メルが困ったように言うのに、ミヤオはまた首を左右に動かします。

「ミヤオ。でも、コネミのおじちゃんが、ミヤオみたいなのを女だつて言つてたミヤオ。ほれ」

ミヤオが、レイの手を取って自分の胸に当てます。レイの顔がみるみる赤くなり、ブシャーッと大量の鼻血が吹き出しました。

「・・・ミヤオの勝利！ ノアの負け！」

レイが親指を立てていいいます。

「ふざけんな！ バカヤロー！！！！」

ノアの振りかぶった三度目の鉄拳が、レイの顔面にめり込みます。本日、最大級の威力です。レイは痛みを感じる間もなく気絶してその場に倒れました。

「あの、ミヤオ。そうやって、男性の身体にむやみに触ったり・・・また自分の身体に触れさせたりはしてはいけないものなんですよ」

メルが優しく諭すのに、ミヤオはキョトンとします。

「そうなの？ なんでニヤ？」

「なんでもだ！ こんなスケベ野郎なんかにはとくにな！」

ノアが倒れてるレイの頭を踏みつけて言います。

「とりあえず・・・そのコネミさんという方が、ミヤオに間違つた知識を教えているようですね」

メルが顎に手を当て、困った顔をしています。

そんなことはお構いなしに、ミヤオはボーズ太郎に今度は興味をもつたようで、キラキラした目で獲物に襲いかかるような仕草でフリフリと尻尾を横に動かしています。ボーズ太郎はアワアワと慌てました。

「とりあえず、ミヤオ。そのコネミって人のところに案内しな」

飛びかかろうとしたミヤオの首根っこを掴まえて、ノアが言います。狩られる危険から助かったボーズ太郎はフウと安堵の息をつきました。

「コネミのおじちゃんところに？ いいニヤー。案内するニヤ。美味しい魚もらせるニヤ」

なぜかミヤオはとても喜んでニコニコと笑います。その様子からするに、コネミという人物に相当なついでているのが解ります。

「その、コネミのおじちゃんてのはさ。何をしている人なんだい？」

ノアが聞くのに、ミヤオはニヘツと笑います。

「うーんとね、コネミのおじちゃんは、魚と戦ったり、女の怪物をメツて怒ったり、いっぱい魚たべたりするんだニヤー」

「はあ？」

「ど、どんな人なんでしょう・・・？」

ノアとメルは互いに変な顔をしました。まったく、想像ができない人物像です。とりあえず、お腹がポーンと出ていて、頭がピカピカで、魚と戦ったり、女の怪物を怒ったり、魚を食べたりする人・・・いや、全く意味不明です。ノアたちには理解不能です。

とりあえず、こうして、ファルの少女ミヤオと出会い、コネミという訳のわからない保護者にミヤオを帰すという新たな目的も得て、ノア一行は更に先に進むことになるのでした・・・。

第八章 破天荒！ ファルの少女ミヤオ（後書き）

ちょっと男性色が強い話になってしまったんで・・・まあ、寛容な気持ちで読んでやって頂ければ。無理やりに引つ張ってきた水着ネタなどは完全に小説オリジナルです。ゲームの絵担当の方に、水着のノア・メル・ミヤオを描いてもらったんですが。それを活かせられなかったので、今回、小説にて出させてもらいました。あ。ミヤオは話の都合上、裸ですが。ん？ 水着の絵？ いや、残念ながら手元にはもうありません。私の記憶の片隅から引つ張りだしてきましたw

アルダークの部分も、ほんとうはそんなイベントはないのですがw 話に深みを持たせるのに・・・人間の時だった話もチラッと。いずれ、人間だった四天王の話なんかも書けたらいいですね。もちろん、番外編ということ。まあ、ご期待の声があればの話ですがw 次回に続く釣り人の海とコネミさんの話は、ゲーム中のオマケ要素だったので・・・小説にするかどうかは悩んだんですが。ま、やはりそこは忠実に。もちろん、ゲームのような脈絡のないイベントにするわけにはいかないんで苦労しますがw

というわけで、今回はコネミさんとヤマンバ洞窟にいくという訳のわからん展開になりますw あ、コネミさんは実は私の友人がモデルなんですけどね。どうでもいい話でしたw

第九章 隠居者コネミと女魔物のステラ

ミヤオの案内で、ノアたち一行は釣り人の海を出て、ちよつとした南国風の森を抜けます。そこを越えて、誰もが絶句しました。あれだけ豊かな自然があつたというのに、森を抜けた先は一面の砂漠なのです。それも、地平線の彼方まで続くような大砂漠。海を満喫し、ちよつとしたバカンス気分だったので、今からここを歩かねばならないと思うと気が重いです。

「・・・なんだよ。これ。砂・砂・砂・・・砂しかないじゃん！」
ノアが、地面の黄土色のものをつまみあげます。サラサラと風にながれてそれは飛んでいきました。

「ここだけ気候がおかしいのでしょうか？ 後ろは森なのに・・・」
メルが振り返ります。ヤシに似た木がズラツと並んで生えています。しかし、今立っている地点を境にして、その先から急に砂漠となっているのです。まるで森が切り取られてしまったかのように不自然です。

「・・・この砂漠はもともとが豊かな森林だつた。ファルが木々を伐採したせいで、この『レグー砂漠』は生まれたんだ」

レイがそう説明します。ノアもメルも眉をひそめました。この広大な砂漠を、人間の手が生み出したというのだから無理はありません。

「な、なんでこんなに木を取っちゃつたポー？」

森で生きていたポー太郎は信じられない気持ちでいました。

森は生活に必要な豊かな恵みを与えてくれるものです。それを根こそぎにしてしまうことは、そこに住まう命を奪うことに等しいことです。それどころか、自分たちが受け取れる恩恵をわざわざ減らしてしまうことになるのですから・・・。

「ファルは、テムやメリンとは比べものにならないぐらいに文化が進んでいるんだ。レムジンに行けば、その意味がわかるさ」

「レムジン、ミャー。さあ、コネミのおじちゃんところに行くニャ！」

「お、おい！」

ミャオがレイの手を取って歩き出します。どうやら、コネミという人物はこの砂漠のどこかにいるようです……。

三十分ほど黙々と歩き続けました。ノアがさすがに砂だけの地形に飽きた頃、メルとミャオが何かに気づきます。メルの耳がピーンと立ち、ミャオが鼻をピクピクと動かしました。

「……誰かいます」

メルがそう言った瞬間でした。ちょっと小高くなつた砂山に、三人の人影が現れます。

「オ・パイ!?」

それは、アホンとダラを引き連れたオ・パイでした。ノアとレイが進み出て武器を構えます。メルは口元に手を当てて青白い顔になりました。

「なぜ、アンタがこんなところに!?!?」

ノアの問いかけに、オ・パイは目を細めます。

「フン。ネズミどもめ、貴様らの計画などお見通しだ。このままスタッドに会わせるわけにはいかぬ」

オ・パイがザツザツと黄砂を巻き上げて降りてきます。

「な!?!? なんて、アタシたちがスタッドに会おうとしていることを知っているんだ!?!?」

「ククク。あの町医者が喋ってくれたよ……。貴様の命を条件に出したら、すぐに吐いてくれた」

狡猾なオ・パイのことです。きつと、ノアを助けるとか何だのと言ったのでしょうか。ノアの名前を出されて、バーボンが黙っているはずもありません。

「パイ! お前はいつたい何を企んでいる!?!? なにが目的なんだ!?!?!?」

レイが怒鳴ります。そのただならぬ雰囲気、ミヤオはちょっとだけ不安そうな顔をしました。

「レイ王子。姿が見えぬと思いきや、このような悪党どもに与しているとは・・・お父上が嘆きますぞ」

レイは唇を噛みます。オ・パイはフンと笑いました。

「バ、バーボンさんたちは！！？　バーボンさんたちは無事なんですか！！！？」

青白い顔のメルが、気力を振り絞って聞きます。どうしても、目の前にいるのが自分の記憶にある父だとは信じられません。姿形こそ父であるのに、その持つ雰囲気はまったく違うのです。

「・・・盗賊共々、牢に放り込んである。貴様らを捕らえてから、まとめて処刑だ」

オ・パイはメルを見やってそう言いました。それは、娘に向かって喋る父の言葉ではありませんでした。それでも、ノアもメルも、バーボンたちが無事であることを知って少し安堵しました。

「パイ！　俺の質問に答えろ！！　ジャスト国の大臣であるお前が、いったい何をしようとしているんだ！！？　魔神バルバトスと戦った四天王であるお前が！！」

レイの言葉に、オ・パイは顎に手を当てて考えるような仕草をしました。

「ほう。やはり、オルガノツソだけでなく、どうやらミルミ城のアルダークまで倒してしまったようだな」

「ああ！　そこで、お前の過去を見た！　英雄スタッドの前身であったお前がどうしたというんだ！？　ガラガ山道にある救いの小屋！　シーラさんにも会った！」

まるでメルを言葉で代弁するかのよう、レイはたたみかけます。それでも、オ・パイの表情は変わりません。

「救いの小屋？　ククク・・・そんなものがどうした？　私の野望はただ一つ。魔神バルバトスを復活させ、魔神の力と恐怖によってデム・ファル・メリンの三種族を支配することだ」

オ・パイの言葉に、全員が凍り付きます。なんと、オ・パイの目的は魔神バルバトスの復活だったというのです！

「な、なんだって？」

「正気か！？ や、やはり・・・魔神バルバトスの呪いを受けて・・・」

呪いという言葉に、オ・パイは不愉快そうな顔をしました。

「私は私の意思で、魔神バルバトスを使役するつもりだ。オルガノツソやアルダークのように改造されて操られているわけではない。私は魔神の力を利用してやるつもりだ」

オ・パイが拳を握りしめてニヤリと笑います。相当なまでの自信です。

「そんなことが出来ると思っているボー！？ あ、あんな恐ろしい魔神を・・・」

ボーズ太郎がブルブルと震えながら言います。カツとオ・パイの目が見開かれました。

「フン！ できると思うから言っているのだ。魔神バルバトスが復活した暁には、貴様ら下等種族は根こそぎにしてやる！！ 恐怖という恐怖を味あわせ、痛みと絶望のうちに死に行くがいいッ！！」

向けられる尋常じゃない殺気に、ボーズ太郎はレイの後ろに隠れました。長老や仲間の仇ではありますが、オ・パイの血走った目と睨み合うのはボーズ太郎には酷でした。

恐怖と、己の情けなさにブルブルと震えるボーズ太郎を見て、ノアは気の毒そうな顔をします。そして、キツとオ・パイを睨み付けました。

「なんで、そんなにアタシらやボーズ星人を憎むんだ！？ シーラさんは、アンタはとっても優しい人だって言っていた！！ それなのに、なんでだよ！？」

「それは、貴様ら・・・下等な人間が、私の娘を弄び、そしてそれをボーズ星人どもが連れ去って殺したからだ！！！！！！！！」

怒りに震え、オ・パイの殺気がさらに増します。側にいるアホン

もダラもちよつと離れ、ゴクリと喉を鳴らしました。

「殺した・・・？ なにを、言っているんだ？ ポーズ星人たちはアンタの娘を保護したんだ！！ メルメルはここにいないじゃないか！！」

ノアがメルを指さします。メルは不安そうにオ・パイを見やりました。父と娘の視線が交差します。

「・・・ふざけるな。私の娘は死んだ・・・死んだのだッ。私はその哀れな亡骸を目にしているッ！！」

オ・パイはメルを娘だとは認めませんでした。メルはショックを受けて目を丸くします。ノアもレイも驚きました。

「な、なんだって！？ シーラさんだって・・・メルが娘だって！！」

「メルはジャスト国の近くででさまよっていたんだ！ 大臣となつたお前に会うために！！ 他にメリンが俺たちの国にいるなんて考えられないだろう！！」

ノアとレイが猛抗議します。ですが、オ・パイは少し目を左右に動かしたただけでした。

「先ほどから何を世迷い言を・・・。シーラ？ メルメル？ 誰だ、それは？」

「え？」

オ・パイは額を抑え、首を横に振ります。そして、クルリと踵を返しました。

「グッ。そんなことは・・・どうでもいい。英雄スタッドの居場所が解れば貴様らは用済みだ。あとはヤツを殺すだけで魔神バルバトスの復活は完了できる。アホン、ダラ！ ネズミどもを倒し、ジャスト城に先に帰れ！」

「はいチヨ！」

「了解だべー！」

二人が返事をし、アホンが剣を、ダラは槍を構えます。オ・パイはそのまま降りてきた黄砂を登っていつてしまいました。

「ま、待って！ お、おとうさ・・・」

メルが呼びかけようと思いますが、オ・パイの姿はもう見えません。
「メル・・・」

ノアがそつとメルの肩に手を当てました。

「・・・大丈夫。ええ、大丈夫です。ごめんなさい。私、何も言えなかった・・・」

メルは胸に手を当てて、気持ちを落ち着かせようと大きく深呼吸しました。

「しかし、ということだ？ オ・パイは、まるでメルのことを知らないようだった。それどころかシーラさんも・・・」

レイが剣を納めて言います。

「・・・それは考えても解りません。今は先に進みましょう。父が魔神バルバトスの復活を企み、スタッドさんを殺そうとしているならば、何としても止めねばなりません」

メルは強い目をして、オ・パイがいなくなった後を見やりました。
「そうだね。じゃ、先に進もう！」

ノアが片手を上げて言うと、皆が「オー！」と答えます。

「ちょ！ 待つチョ！ 俺らのことを忘れるなチョ！！」

さつきからずつと戦闘態勢を堅持していたアホンが、怒りのあまり地団駄を踏みます。

「あ。アンタたちいたんだ？」

すっかり忘れていたノアが頭を掻きます。アホンが真っ赤になつて、頭から湯気を立ち上らせます。

「なんか舐められまくってムカツクチョ！」

「そうだべーな」

「やれやれ。お前達を相手にしている暇はないんだが」

レイが剣を再び抜きます。アホンとダラが深く身構えました。

「行くチョ！！」

「ふんりゃだべー」

アホンが上段構えで飛び上がります。ダラが槍を振り回しました。

「ふんぎやチヨ！」

パコンと、ダラの槍の石突がアホンの後頭部に直撃します。アホンの目が飛び出しました。

「な、なにするチヨ！」

「すまんだべー」

気を取り直し、アホンは身を低くして、剣を水平に突き出して突進します。ダラも低めの突きを繰り出しました。しかし、それはアホンの進行方向です。槍の側面が、アホンの頬を引っぱたきます。

「ほんぎやチヨ！」

ズザザと、顔を地面にこすりつけながらアホンが倒れます。

「やつぱりな・・・」

「ほんと、やる気あんのー？」

レイは呆れたように剣をしまいます。ノアはガツクリと肩を落としました。

「う、うう！ 馬鹿にするなチヨ！」

「馬鹿になんてしてないボー。アホだとは思うけどボー」

ボーズ太郎に言われ、アホンの顔がますます赤く歪みます。

「うづぐうづー！ 絶対に許さないチヨ！！！！」

アホンが立ち上がり、攻撃を続行します。しかし、再びダラによって妨害されてしまいました。息が合うコンビというのは良く聞きますが、合いすぎると問題です。二人して攻撃する方向が同じなので、どうしてもぶつかりあってしまうんです。

「ニヤハハハ！ もっとやれニヤー！！」

ミヤオがお腹をかかえて大笑いします。

「もう！ お前、何を考えているチヨ！！！！」

「すまんだべー」

「もうその台詞は聞き飽きたチヨ！！」

ついに、怒ったアホンの剣先がダラに向けられました。仲間割れです。

「アホらしー。さ、ほっというて先に行こ」

ボカスカ殴り合っている二人を尻目に、ノアたちはそそくさと、その場を後にしようとした。

「あ！ 待つチヨ！！！！ 今度、お前達を逃がしたら・・・ボスに、またまたまたお仕置きされるチヨ！！」

タンコブだらけのアホンが気づいて言います。

「そんなの知らないよ！」

こんな二人のために残ってやる義理はありません。ノアが怒ります。

と、アホンとダラの後ろから猛烈な勢いで、何かがやってくるのが見えました。土煙を上げ、何か大きなものがやってきます。

それは、大きなサソリのような生物でした。長い毒針のついた尾をフリフリと左右に振っています。それは魔物デザート・スコープ・オンでした。

「あ？」「べ？」

アホンとダラは振り向く暇ありませんでした。パコ、パコーン！ 大きなデザート・スコープ・オンの鉄に弾かれて、二人は天高く飛ばされていきます。それは、二人のつまらない漫才にツッコミを入れるかのような的確さでした。「なんでやねん」という台詞を言ってくれば完璧だったでしょう。

「クソッ！ よりによって、砂漠で一番危険な魔物だ！」

レイが叫んで剣を抜きます。アホンとダラを相手に行っていた時は全然違います。本当に真剣です。それだけ、この魔物が手強いということです。

「ミヤ？ ウィリアムだニヤー！」

ミヤオが何を思ったか、先頭に飛び出します。

「な！？」

「危ない！ ミヤオ！！！」

巨大サソリの前で、ミヤオが両手を振ります。アホンたちと同じように吹っ飛ばされると思いきや、デザート・スコープ・オンはパシパシッとまばたきしたようでした。

「チヨース！ 危ないところだったなー」

デザート・スコープオンの背中から声がします。見やると、一人の女性が顔を出しました。そして、手を軽く振ったかと思うと、ピヨンと飛び降りてきます。

それは、二十歳ぐらいの美女でした。薄紫色のシャギーヘアで、額に古びたゴーグルを付け、つなぎ姿という出で立ち。ジッパーがへそまでしか上がっていないのは、そのパツツンパツツンのはち切れんばかりのボディを収納しきれないからです。魅惑的な身体に、レイはすでに鼻血を出して倒れそうになります。

しかし、注目すべきは別にありました。その彼女は、デムでもメリンでもファルでもありません。薄緑色の肌に小さな角。赤紫色をした瞳。人間型をした魔物の特徴です。

「魔物・・・？」

ノアが警戒するのに、ミヤオが首を大きく横に振りしました。

「だいじょうぶだよ！。こっちがステラ。あっちの大きいのがウィリアム。ミヤオの友達ニヤー！」

ミヤオが紹介すると、ステラがニツと笑います。ウィリアムは挨拶の代わりに尻尾をフリフリと動かししました。

「ああ。アタイはステラだよ。このレグー砂漠を縄張りにしてる。・・・と、にしても、ミヤオ。珍しいな。お前がこんなに多くの友達を連れてくるなんて」

「ニヤハハ！ ノアとメルとレイとポーズには、釣り人の海で会ったんだよ！。コネミのおじちゃんとか行くんだニヤ」

「そう。でも、釣り人の海は、海の怪物がでるから行っちゃダメだつて、コネミから言われてるんだろ？」

「ごめんニヤー。ステラよりも強い怪物ニヤ？」

「怪物はないだろ、怪物は。でも、そうだな。アタイより強いヤツもいるかもね。だから、もう一人で行っちゃダメだぞ」

「はいニヤー！」

ミヤオの頭を撫でながら言うステラ。どうやら、ミヤオにとって

はお姉さんみたいな存在のようです。

「ま、ちょうどいいタイミングだ。コネミのここに行くなら、アタシのウィリアムに乗せて行ってやる」

ステラが親指を立てます。ウィリアムも、鉄をガチャガチャと鳴らしました。

「は、はあー。でも、アンタは魔物だろ？」

ノアがステラの顔をマジマジと見ながら言います。

「魔物だって別にいいだろ。アタイは人間が好きだしね」

救いの小屋にいた魔物たちの例もあります。ステラも、そういった類の魔物なのでしょう。ノアたちはステラの好意に甘えることにしました……。

ウィリアムは、徒歩よりも遙かに快適に進みます。ノアたちの足では間違いなく一日以上かかった道のりを、半日もかからずに踏破してしまいます。砂漠を自分の足で乗り越えずに済んで良かったと、ノアはフツツと安堵の息をつきました。

果てしなく広い黄土色の砂漠のなか、ポツンと存在するオアシスと、その側に立つ小さな建物が見えてきます。

「釣り人の湖っていう淡水湖さ。海やそこらへんの水辺じゃ見かけない珍しい魚がいるよ」

ゴーグルをしたステラが、ウィリアムのスピードを落とすために手綱を引きます。その姿はまさにライダーと呼ぶに相応しい姿でした。

オアシスから、ちょっと離れたところでウィリアムがピタッと止まります。そして、身を屈めました。ステラの指示通りにきちんと動くのです。これだけ強力そうな魔物を従順にさせて操っているステラは、かなり凄いのかもしれません。

「ミャオ。これをコネミに渡してくれ」

ステラは、ウィリアムから降りようとするとするミャオに小さな封筒を手渡します。

「いつものやつニヤー。わかったー！」

皆がウィリアムから降りる中、ステラは手綱を握ったままです。ノアは首を傾げました。

「あれ？ ステラは来ないの？」

「あ、ああ。アタイは、ちよつと急いでいて・・・」

わざわざここまで連れて来たというのに、急いでいたただなんて言うなんて、おかしいかとノアは思います。

「ま、コネミによろしく、って伝えてくれ！ また機会があったら会おう！」

そう言っつて、ステラはウィリアムと共に砂漠の彼方へと消えていきました・・・。

ミヤオに案内されるまま、建物の裏側に回ります。物置小屋には、扉が閉まらないくらい沢山の釣り竿やらバケツやらの道具が置かれています。ひっくり返った道具箱からは、ルアーがゴロゴロと転がっていました。ちよつと不気味な光景です。

皆で湖の方に向かうと、クーラーボックスを椅子がわりに、釣り糸を垂らしているデムの姿があります。ミヤオが言った特徴通りの人物。ピカピカと光る禿げあがった頭に、いったい何が詰まっているのかというぐらい、たつぶんたつぶんのお腹まわり。大きなお尻をちよつと動かしただけで、クーラボックスがミシミシというイヤな音を響かせます。

「コネミのおじちゃーんーん！」

ミヤオが飛びつきます。ですが、小柄であつても体格のよいコネミの身体はビクともしません。何事もなかったかのように、ゆっくりと振り返ります。

「おや、ミヤオ。一週間も姿が見えないから、死んだかと思いましたよ」

ニコニコと笑うコネミです。もう目が逆Uの字になっているぐらいの笑顔です。ですが、その口から放たれた言葉は棘がありました。

ノアたちは思わず顔を見合わせてしまいました。

「ニヤー！ 生きていたニヤー！ それより、おじちゃん！ 魚！ 魚！」

辛辣な言葉など気にせず、ミヤオはコネミのタップタップの二の腕にしがみついて甘えます。

「ハハハ。今釣りますからね。そこらへんに座って待っていて下さい……。おや、客ですか？」

コネミがノアたちに気づき、ペコリと頭を下げます。太陽の光がそれによって反射され、ノアたちは眩しい思いをしながらも頭を下げ返します。

「おー。ミヤオの友達！ なんかね、レムジンに行きたいんだって！」

「レムジンに？ それは珍しい……。しかし」

そうコネミが言いかけた時、地面が揺れました。グラグラグラ！ ちょっと立っているのも大変なぐらいです。慌てて、コネミは釣り竿を引き上げます。

「ボー？ この辺の悪魔……。アルダークは倒したのに、どうしてだボー？」

地震は悪魔が引き起こしている……。その話を信じているポーズ太郎は驚きます。

「ふう。最近、こういうのが多くて……。おちおち釣りもしていいられません」

コネミはリールを巻いて、竿を担ぎます。どうやら釣りを諦めたようでした。

「ま、続きは中で話しましょうか」

コネミは、自分の小屋に皆を案内しました……………。

コネミが緑茶を入れて、それぞれの前に出します。ミヤオにはミルクと小魚を出します。まるでネコのような扱いでしたが、ミヤオは喜んで小魚を頬張ります。

「・・・さて、確かレムジンに向かわれるという話でしたが」

コネミは相変わらずニコニコした顔のまま言います。

「ああ。陸路は初めてで道がわからないんです・・・。でも、驚きました。デムがレムジンの領土にいるなんて」

ミヤオの保護者であるから、てっきりファルだと思っていたのだとレイが言います。

「ハハハ。釣り好きがこうじて、魚が豊富なこんなところで生活しているわけですよ。それも、ファルから目の届かない、こんな砂漠のど真ん中ですが」

ミヤオのミルクを注ぎ足しながら言います。さっきの辛辣な言葉とは裏腹に、どうやら面倒見は良いようです。

「失礼かもしれませんが、ミヤオとはどういうご関係で？」

メルが恐る恐る尋ねます。コネミはミヤオの顔を見て、それからメルに向き直りました。

「赤の他人です。砂漠に捨てられていたのを、私が拾って、気まぐれにエサをやったら懐いたんです」

「ニヤー」

あまりに冷たい言葉に、皆が愕然としました。ミヤオだけは何も気にしていないようで笑います。

「そ、そんな言い方ないだろ！　まるでペットみたいな言いぐさじゃないか!!!」

とうとう我慢ならなくなったノアが怒鳴ります。ですが、コネミの顔色は変わりません。

「あー。すみません。あまり人と話さないせいで。悪気はないんです。ただ毒舌なだけで」

ニコニコと笑うコネミ。本当に反省してるのかどうかも怪しいです。よく見たら笑っているわけではありありませんでした。顔の形が、ただ笑っているように見えているだけなのです。端的に言えば、引きつっているわけです。こんな辺境の地で、あまりにコミュニケーションを取らないせい、顔の筋肉が強張ってしまっているだけ

なのです。決して笑っているわけではなかったのです。

「あ。そうだ。コネミのおじちゃん。ステラからまた預かったよー」
ミヤオがステラから預かった、あの封筒を取り出して渡します。

コネミはスツとそれを受け取って、チラツと裏表を見ました。

「またですか。本当に」

小さく溜息をついて、何を思ったかその封筒を開けもせずビリビリと破きます。

「あ！　なんで、見ないんだポー！？」

コネミは手紙を細々にすると、暖炉に放り込みます。もう完全に消し炭です。コネミの穏やかな見かけと違うのは、毒舌だけでなく行動もでした。

「そうそう。で、レムジンの件ですが・・・」

まるで手紙のことがなかったかのように、コネミは続けます。ノアたちはなんだか釈然としませんでした。手紙自体はコネミ宛だったものです。それをコネミがどうしようが、口出す権利はありません。

ノアは怒りを押し殺し、フーツと息を吐き出しました。ここでケンカしても、レムジンに行くための宛はないのです。ちよつと大人になったノアです。

「一応、テレポート以外では二つのルートしかありません。一つはヤマンバ洞窟という強力な魔物が徘徊するところを通るか。もしくは地下道です。いずれも、この砂漠から行けるんですがね。後者は・・・ちよつとお勧めできません」

そういえば、海で出会ったファルの老人もそんなことを言っていた。た。ノアは思いだします。こんなことなら、あの老人にテレポートで共に連れていってもらえばよかったと後悔します。

「なぜ地下道はダメなんですか？」

「地下道は・・・ほら、さっきみたい地震がいつくるかわかりませんからね。日増しにひどくなっていますし。地盤が崩れたら一巻の終わりです」

ノアは頷きます。オ・パイなんかであれば、きつと崩れ落ちる岩盤を蹴り飛ばしながら強行突破なんて真似もしてしまうのでしょうか。でも、ノアたちにそれだけの力と俊敏さはありません。

「じゃあ、ヤマンバ洞窟しかないが……ってというか、このネーミングは」

レイが口をへの字にしています。ずっと、この洞窟の名前をツッコミたかったのです。

「まあ、通称ですよ。本当は『レムジン洞窟』と、あんまりにそのまんまなんでね。ヤマンバの由来は、なぜかその洞窟に女型の魔物が集まってしまったからです。砂漠がこんなに広がってしまった、生態系が狂ったのかもですね。ときおり、この釣り人の湖にも悪さしに来るので……そのたびに懲らしめているのですが」

ミヤオが「女の怪物をメツて怒ったり……」と言ったのはこのことだったのです。

「女型の魔物が……。いくら魔物とはいえ、女に剣を向けるのは性に合わないが。仕方ないな」

レイが自分の剣をみて、ギョツとそれを握りしめます。さっきまでステラに見とれて、鼻の下を延ばしていたとは思えないほどの真面目な顔つきです。

「あー。いえ、ヤマンバ洞窟の魔物は……。それは悪魔と呼んでも差し支えないぐらいに強いのですが。本当に行かれるのですか？」

「ああ。もちろん。アタシたちは何としてもレムジンに行かなきゃいけないんだ。それに悪魔とはもう二体と戦ったことあるしね。心配ないよ」

ノアがそう言うのに、コネミは渋々と頷きます。

「はあ。そこまで仰るなら……。よろしい。私も暇ではないのですが、案内しましょう」

ヤマンバ洞窟。見た目はなんも変哲もない洞窟です。ただ女性物の香水のニオイがプーンと立ちこめていました。電車とかで、ほら。

中年女性から薫るアレです。あれを何十倍も強くした二オイです。バラなんだかラベンダーなんだか、ラフレシアなんだか。はつきりしろと言いたくなる二オイです。

口と鼻にハンカチを当てたノアたちは、武器を構えてそろそろと洞窟に入っけていきました。ミヤオとコネミは外でそれを見守ります。洞窟に入っけて一分後……。剣を杖がわりに、ヨロヨロと洞窟から出てきたレイの顔は青ざめていました。顔中にキスマークです。服も上半身を脱がされてしまいました。手形とキスマークが至る所につけられています。

「……こ、こんなに恐ろしいダンジョンは……初めて……だ」
レイはその場に倒れます。その後、レイと全く同じ状態のボーズ太郎が出てきて、やはり倒れました。

「……やはり。結婚適齢期を逃した女性は、人間でも魔物でも同じですか」

コネミは額に手を当てて首を横に振ります。まったく無傷のノアとメルが、げっそりと疲れた様子で出てきました。

「こいつら、ひప్ప返して連れてくるのはどんなに大変だったか……」

「なんで、あんなに殺気だっているんでしょう」

ノアとメルが口々に言います。

「男性型の魔物の数が極端に少ないんです。この洞窟から、私の所にわざわざ来るのも……きつと、私を狙ってのことでしょう」

「えー!?!」

ノアとメルの目に、コネミが美化されて見えました。耽美系です。パッチリお目々と長い睫、儂いボディラインに、意味なさげな手を頬に当てたポーズ。バツクには赤と白のバラの花が咲き乱れます。

「ミヤー。だから、ミヤオもコネミのおじちゃん以外は男を見たことがないミヤー」

ミヤオが笑っています。いや、笑いどころじゃないんですが……
本人は面白ければどうでもいいようです。

「私も何度もミヤオをレムジンに送り返そうとしました。ま、正直・
・邪魔だったんで。でも、こんな状態ですからね。まあ、ともか
く。腹が減ってはいいいアイデアも出ません。私がせっかく釣った
魚を食べさせるのはもったいないんですが・・・お昼にしましょう
か」

コネミが肩に担いでいたクーラーボックスを降ろします。ミヤオ
が、サーツと敷布を引きました。ノアもメルも、レイとボーズ太郎
をその上に寝かせて介抱してやります。

「良かったな。レイ。人生で、こんなにモテること・・・もうない
よ」

レイの傷の手当てをしながら、ノアが言います。

「モテたって・・・あきらかに、七十とか八十とかの老婆の魔物も
いたぞ！ 若いのなんていなかったじゃないか・・・ってか、なん
でノアだ！？ なんでメルじゃなくて、ノアが俺の手当てしてるん
だ！」

レイが、メルに膝枕してもらいながら手当を受けているボーズ
太郎を指さします。心底羨ましそうに、レイは指をくわえました。

ボーズ太郎は心安らかな天使の寝顔です。

「・・・アタシは膝枕なんて絶対にしないよ」

「ふざけるな！！ 誰も頼んでいない！！」

そんなやりとりをしている間に、コネミはクーラーボックスから
魚を取り出します。大きい。大きいです！ どうやってそんな魚を
入れていたのでしょうか。地球でいうところの、タイセイヨウクロマ
グロ級の大きさです。一本釣りで、男達が賞金目指して競ってしま
いそうなレベルです。例の男前なマグロ釣り俳優も手を叩いて賞賛
してくれそうな大物です。

ピクリとも動かず、ずるずるとクーラーボックスから出されてい
くマグロもどき。その目が、ギョロツと動きました。ビッチビッチ
跳ねます。死んだ振りをしていたのです。

「まだ息がありましたか・・・。どうせ食べられるんだから、死に

なさい」

ボグウツッ！！ コネミの強烈なボディブローがマグロもどきに叩き込まれます。マグロもどきは昇天しました。ミヤオが「魚と戦ったり・・・」と言ったのは文字通りの意味でした。

「この辺の魚は強くて・・・。ただ釣っただけでは勝ちではないのです。文字通り、生きるか死ぬか。デッド・オア・アライブ。生半可な釣り人では通用しない世界ですよ」

コネミは、これまたどこから取り出したか、巨大な出刃包丁を握ります。プロ顔負けの包丁捌き。マグロもどきの解体ショーです。

小分けにされたマグロもどきの身。刺身なんて食べたことのないノアは、恐る恐るそれを手に取ります。そして、コネミが用意してくれた醤油につけて口に放りました。

「ん、んーッ！ 何コレ！？ 旨い、旨すぎるー！」

ノアの口に芳醇で濃厚な味が広がります。味の革命です。演出効果で、劇画タッチのノアの背景に、ロケット噴射で撃ち上がる富士山が描かれてもおかしくないほどの派手なりアクションです。

ノアだけでなく、皆がマグロもどきにがっつきました。ミヤオもネコ食いです。美味しいだけでなく、量も充分です。全員の体力が完全回復しました。

「さて。お腹はふくれましたが・・・。どうしたのですかね」

「アタシとメルだけが行く？ どうやら、あそこの魔物は男にしか興味ないみたいだし」

ノアの提案に、レイもボーズ太郎も首をイヤイヤと横に振ります。「いや、きつと、男がいなければいけないで・・・侵入者は襲ってきますよ。魔物ですし」

コネミがそう言うのに、レイもボーズ太郎もホツとします。どうやら置いて行かれる心配はないようです。

「コネミのおじちゃん。ステラにお願いしたら？」

ミヤオがペロペロと手の甲を舐めながら言います。

「え？」

コネミがちょっと驚いた顔をしました。ミヤオは呑気に伸びびをします。

「ステラだったら、きっと中にいる怪物の説得してくれるミャー」
ミヤオの提案に、ノアもメルも希望を見いだします。しかし、当
のコネミは渋い顔をしていました。ああ、でも表情は変わらない
ですが・・・俯いていて、顔に影ができていたのでそう見えたので
す。

「確かに。ステラであれば・・・きっと、ヤマンバ洞窟のヤツらを
鎮められるかも知れません。しかし、私の体が目的のあの女などに
・・・」

コネミは自分の両肘を抱いてさすります。いやいや、かなり気持ち
悪いんですけど、とノアは思いました。

「し、失礼なヤツだな！！ ア、アタイは・・・ほ、ほ、ほ、本当
にお前のことが！！！」

洞窟の入り口の裏側に隠れていたステラが飛び出してきました。誰
もがびつくりしました。どうやら、ずっとノアたちの後を付けてい
た様子です。

「な、何度も、何度も・・・ラブレター出したろうが！ い、一
度も返事をもらってないけどさ！」

ステラが真っ赤になって言います。どうやら、ミヤオに渡したの
はラブレターだったようです。

「なんで、魔物のあなたが私に惚れるんです？ それに、私は隠居
して釣り生活を満喫してるのです。面倒ごとは、ミヤオ一人で充分
ですよ」

相変わらずの毒舌に、ステラはプルプルと震えます。目尻に涙が
溜まっています。

「コネミのバツキヤロオオオオオー！！」

ステラはウィリアムと共にものすごい勢いで去っていきました。
・・・

夜。腹を出して寝ているコネミを横に、ヤマンバ洞窟の前でノアたちは作戦会議をします。

「ヤマンバ洞窟・・・抜けるためには、ステラの協力が必要だ。そうだな、ミヤオ」

「ニヤー。ステラはこの辺でいちばん強い魔物ニヤ。きつと大丈夫ニヤー！」

ノアが膝をパチンと叩きます。ミヤオはゴロゴロと喉を鳴らしました。

「しかし、ステラさんは・・・どうやら、コネミさんに惚れているようですね」

「ああ。理不尽だ・・・。あんな、太った男のどこが・・・俺の方が・・・ブツブツ」

レイは口を尖らせて、人差し指同士を付き合わせます。

「でも、どうして・・・コネミと、そのステラをくつつ付ける必要があるポー？ 普通に、頼めば・・・」

この作戦の主幹を口にしたポーズ太郎を、ノアとメルがギロツと睨みます。ポーズ太郎は竦みあがりました。

「あれじゃ、ステラさんがあまりにも可哀想です！！」

「そうだ！ あそこで豚みたいに寝ているオッサンに、乙女の想いがどんなに一途か思い知らせてやらにや・・・アタシの気がおさまらん！！」

ノアは拳を握ります。いつの間にか、コネミに恋するステラを・・・スタッドに恋する自分に置き換えていたようです。恋の理由までは解りませんが、自分と同じように、かなりの年齢差というネックに加え、ステラの場合は種族の差というものもあります。困難な恋愛ほど燃えるものなのです。

「よし！ コネミとステラをくつつける作戦！ 明日より決行だ！

！！」

『オー！！！！』

『おー・・・』

女子三人の強い雄叫びと、いまいな男子二人の声、そして豚・
いや、コネミのイビキが砂漠の空に木霊しました……。

第九章 隠居者コネミと女魔物のステラ（後書き）

よーやくオ・パイの野望が明らかになりました！ ってか、もつと早くに出すつもりだったんですけどね。なんだか、タイミングが合わなくて。

女魔物ステラはオリジナルです。コネミとの話に深みをつけるために登場させました。次回、どのように冷血漢のコネミとラブラブにさせるか、ノアとメルが活躍するかと・・・てか、この話まだ続くんですか、申し訳ないです（苦笑）。ミャオがせっかく出てきたのに活躍の場がまだ少ないw はい。レムジンでは活躍してもらおう予定です。

地震の部分は・・・この時期にどうだろうかと本当に悩みました。本当は前の話でもたびたびだそうと思っていただけ。控えております。でも、十年前当時の設定のままなので。どうぞ、ご了承下さい。

第十章 ファルの大首都レムジン

搜索部隊をかって出たノアとメルの二人組が、ステラに追いついたのは夜もかなり更けた頃のことでした。正確には、縦横無尽に走らされたウイリアムが、疲れ果てて、ひっくり返えているのを見つけたわけなんですが……。それと搜索部隊が二人しかいなかったのも、熱血するノアとメルにレイもポーズ太郎もついてこれなかったせいでもあります。

昼の砂漠はこれでもかというぐらいの暑さですが、夜になるとそれが嘘だったかのように冷え込みます。

ノアたち三人は、女だけで焚き火を囲っていました。

さんざん泣きはらしたのでしょう。ステラの目は真っ赤に腫れあがっています。ノアがタオルを渡すと、目頭を抑えて再びさめざめと泣きはじめます。

「……つきしょう。コネミのバカやろ」

「ホントに好きなんです。コネミさんのことを……」

同情するかのように言うメルを、ステラはジロツと睨みます。

「なんだよ。どうせ、馬鹿にしてんだろ。あんなデブでハゲたオヤジを好きになるなんて……変だって」

「そんなことはないです！」

「んなことないよ！」

メルの否定に、ノアの言葉が重なります。立ち上がって拳を振るわせるノアに、ステラはちよつと驚いた顔をしました。

「アタシだって、猫背で冴えないオッサンを好きになったんだ！好きになるのに、容姿とか関係ないよ！」

ノアが力説するのに、メルも目を丸くします。

「ノア……？ ノアの好きな人って……もしかして、スタッドさん？」

メルの言葉に、ノアが真っ赤になります。熟れたトマト、茹でた

タコのようなです。

「な、な、な!?　だ、誰もそんなこと言っていない、ない、ないだろ!　どうして、そんなこと・・・解るのさ!？」

明らかに動揺を隠せないでいる姿に、メルはちよつと気まずそうな顔をします。

「え。その・・・ほら、ずっとノアはスタッドさんを追いかけているし。冴えない・・・と言っては失礼だとは思いますが、その、あまり目立たないというのが有名なスタッドさんの特徴だと聞いていたので。ただの私の勘だったんですけど。当たっていたんですか」

ノアはムツスリして、頭を掻きながらドサツとその場に座り込みます。

自分でもよく解らない感情を、人から直接に指摘されるのは恥ずかしいものです。でも、この気持ちは恋以外のなものでもないのだらうとノアはすでに解っていました。いえ、もしかしたら、最初からそうだったのだらうとすら思います。

「ああ!　そうだよ!　アタシが好きなのは・・・スタッドだ!　文句ある!？」

「文句だなんて・・・」
ぶつきらばうに言うノアを、メルはちよつとおかしそうに笑います。

「へえ。あの英雄スタッドを、ねえ。お前も物好きだね」
ステラもフツと笑いました。

「人のこと言えるか!　アンタこそ、あんな変なオヤジを!」
ムツとした表情でノアが言います。ノアとステラはジツと互いの顔を見合わせ、そして・・・どちらからというでもなく、ぷつと吹き出して、お腹を抱えて笑い出しました。

「ああ。でも、昔は・・・あんなヤツじゃなかったんだよ」
ステラが寂しそうに言うのに、ノアもメルも不思議そうな顔をします。

「全部、レムジンにいる元老院が原因さ」

「レムジンの元老院？」

「こんなファルの領地の外れに住んでいるコネミが、レムジンにどういう関係があるのかと、ノアは首を傾げます。

「・・・何度も、コネミはミヤオを元いた場所に戻そうとしたんだよ。でも、デムに育てられたミヤオをレムジンは受け入れなかったのさ」

「邪魔だったんじゃないの？ そう言っていたけど・・・」

「だから、本心じゃないのさ。コネミなりに距離を置いてるつもりなんだよ。まったく不器用なヤツさ」

「なんだかノアもメルも、コネミへの印象が変わってきてしまいました。」

「でも、変ですね。その話だとコネミさんはレムジンに行ったことがあるみたいに聞こえますが？ コネミさんは、ヤマンバ洞窟のせいでミヤオを帰せない」と

「不思議に思ったメルが言います。ノアも「そういえば」という顔をしました。

「は？ コネミならヤマンバ洞窟なんか何度も行き来してるさ。アタイだって、そこでコネミに会って惚れちまったんだからね」

「照れくさそうに言うステラです。しかし、ノアたちは口をへの字にして考えこみます。」

「じゃあ、どうしてレムジンに行けないような事を言ったんだろ。ミヤオが、ステラに洞窟の魔物を説得してもらおうって言い出した時も、なんかコネミさんは乗り気じゃなかったようだし」

「アタイに？ あゝ、あそこの魔物は我の強い連中さね。洞窟を出たアタイの言葉なんて聞いてくれるかどうか。だからじゃないかね？」

「ステラがそう言いますが、ノアもメルも違うような気がしていました。」

「とりあえず、戻って話をもう一度聞いてみましょう」
「メルの意見に、ステラは嫌そうな顔をしましたが、二人ともそれ

は真剣な顔だったので、やがて渋々と頷きました……。

意識を取り戻したウィリアムに乗り、ヤマンバ洞窟に戻ってみると、さつきとは状況が一変していました。

何者かが洞窟の前で争った形跡があります。レイたちの寝袋や、さつき食べた魚の残骸が飛び散っているのです。

「な、なんだよ。これ？」

ノアが啞然としてみると、砂山から滑り降りてくるレイが見えました。剣を抜いているのを見る限り戦闘があったのでしょうか。レイの後ろからは、ボーズ太郎が四つん這いでワタワタと砂をかきながら降りてきます。

「逃げろ！ まずい相手だ！」

レイが叫びます。そのレイの後ろから、何かが現れます。

ずんぐりむっくりした熊のような大きな身体。爆発したような赤いアフロ。鬼のような形相。ええ。いわゆるオバサン。典型的なオバサンです。しかもサイズは特大ですが。

「フンガー！」

巨大オバサンが拳を降り下ろします。あわや潰されそうになったボーズ太郎を、レイがスライディングして横に抱えて助けだします。

「な、なんじゃありゃ!？」

ノアが驚きながらもダガーを構えます。

「エリザベート?! なんて、あんな姿に?」

ステラがゴーグルを上げて目を細めます。どうやらステラの知り合いの魔物のようです。

巨大なオバサン・・・エリザベートは、当然ともいうべきか、同じ体格で目立つウィリアムに気づきます。

そのいきり立っている様子から、どうやら向こうはステラのごとは解っていないようです。逃げたレイたちを追うのを止め、怒号をあげてウィリアムに襲いかかります。

「チイツ！ いくよ！ ウィリアム!!」

ステラが手綱を引くと、慌ててウィリアムが戦闘態勢になります。両腕と両拳が、ガツシンと組み合います。背中にいたノアたちは、衝撃で降り落とされそうになりました。

「なんだよコレ！ 怪獣大決戦かよ？」

「ひっくり返えされる！！ 飛び降りな！」

ステラが手綱を離します。ノアはメルを抱えて、ウィリアムの背から飛びました。

「キィィィ！！！」

なんと、力負けしたウィリアムが仰向けにひっくり返されます。

ドツシーンと轟音、砂煙が巻き起こります。ガシガシとウィリアムは脚を動かしますが、起き上がれません。

「ブツホオツホ！！！」

勝ち誇った笑い声をエリザベートがあげます。

「ペツペ！ クソ、砂噛んじやつたじゃんか！ メル。大丈夫？」

ノアが砂から頭を上げます。メルも頭を左右に振りながら、「ええ」と答えました。

「砂漠でデザート・スコープオンを力で負かすなんて・・・」

レイがボーズ太郎と共に走って来ます。

「なんなんだよ、あれ！」

ノアが、腰に手を当てて高笑いをあげているエリザベートを指差します。

「俺にもわからない。ノアたちを待っていたら、ヤマンバ洞窟から出てきたんだ」

「あれはエリザベートじゃ」

「ワシらの仲間じゃ」

レイの背中から、ヒョコヒョコと二人の老婆の魔物が顔を出します。二人はまったく、そっくりの顔です。レイはサーツと青い顔をしました。

「アンタらは・・・」

ノアには二人に見覚えがありました。レムジン洞窟で襲いかかり、

レイに執拗にキスをしまくった魔物です。

「ソラ！ ラソ！」

ステラが声を上げました。ソラとラソと呼ばれた二人の老婆は目を丸くしたかと思いきや、ニタアツと笑いました。

「おお、ステラ首魁ぢゃないか！」

「洞窟を抜け出し、はて何年ぶりぞ？」

悠長な挨拶はいらないと、ステラは手刀で空を切ります。

「アタイはもう首魁じゃない。今では双子の長たる、一番の魔法の使い手のお前らが今のリーダーだろ！ 教えてくれ、なんでエリザベートがあんなになっちまったんだい！？」

双子のソラとラソが、レイを間に挟んで顔を見合わます。

「魔神バルバトス様の命令ぢゃ！」

「レムジンにあるランドレークへの門に、立ち入らせぬためぢゃ！」

甲高い声で説明するソラとラソに、ステラは怪訝な顔をします。

「魔神バルバトス？ 確かにアタイらは魔神に造られた魔物だ。でも、スタッドが魔神を封印して以来は、アタイら意識を持つ魔物は、その支配から抜け出たはずだろ！？ なぜ今更に??」

ソラとラソが、レイの背中に入れ替わって、再び顔を出します。

「魔神バルバトス様の封印は解かれつつあるのぢゃ！」

「魔神バルバトス様の力を受け、エリザベートは急激な進化を遂げたのぢゃ！」

ソラとラソは、エリザベートを指さします。

「もはやワシらの力でも止められぬ！！」

「ここにいる者ら、全てを殺すまで止まらぬ！！」

レイの肩からヒョイと折り、二人は手を上げます。そして、二人で両手を組み合ってエリザベートに向き直りました。

「おお！ エリザベート！ ここぢゃ！」

「魔神様に仇なす人間はここぢゃ！」

ソラとラソが甲高い声で、エリザベートを呼びます。

「あ！ このババア！！！」

ノアが止めようとしませんが、すでに手遅れでした。笑っていたエリザベートが、ノアたちに気づいてギロリと睨みます。そして、拳を振り回して突撃してきました。

「クソ！ 正面からやりあつては勝ち目はないぞ！」

レイは舌打ちして、レイジングファンの構えを取ります。

「おお！ エリザベー……ぐびえ！」

「こやつらを……ぶっぴい！」

ソラとラソがエリザベートに近づいて行ったのですが、大きな足に無惨にも踏みつぶされてしまいます。本当に、『全てを殺すまで……』なのです。

「ニヤーツー！！」

「ミヤオ！」

倒れているウィリアムを踏み台にして、ミヤオがエリザベートの後ろから飛びかかります。鋭い両方の爪を立て、素早い動作でエリザベートの頬を引っ掻きます。

「ブフォ！？」

「ニヤーツー！！」

鬱陶しいそうにエリザベートは頭を振ります。払ってくる攻撃を、ミヤオは巧みにかわし、ネコパンチを繰り返します。その動きは、盗賊のノアが「おお」と感嘆するほど見事なものでした。

「ミヤ！？」

連続攻撃をしかけていたミヤオですが、カんだエリザベートのアフロから触手のようなものが伸びてきます。それがスルリとミヤオの体に巻き付きました。よくわからない成分でできたヌメヌメの触手は、藻掻くミヤオにベトベトとひっついて逃れられなくします。

「今助けるぞ！ 『飛来剛刃！ 雷神の劍柱、テンペスト！！』」

レイが剣を持ったまま、その場で回転し出します。やがて金色の光りを帯びて高速になり、砲丸投げの要領で剣を放ります。ビューンと綺麗にエリザベートの頭上に飛んでいき、そこで空から雷光が剣に当たります。帯電した剣は、見事にエリザベートの頭上に突き

刺さりました。

「アングガガガ！？」

感電して、エリザベートの鼻と口から煙が吹き出ます。痺れたせいで、ミヤオをポロツと離しました。

「どうだ！ ジャスト国に代々伝わる奥義！」

「ニヤー？」

レイが落ちてきたミヤオを受け止めながらニヤリと笑います。

「グルルルル！！！」

「レイ！ まだだ油断するな！」

頭を振ってエリザベートが怒りの形相になります。それに気づいたノアが叫びました。

「な！？ ま、まだ動けるのか！？」

ミヤオを降ろしたレイが、腰から剣を抜こうとしますが・・・ありません。そうです。エリザベートの頭上に刺さったままなのです。テンペストは強力な奥義でしたが、剣を手放してしまうという弱点があったのです。

「し、しまった・・・。敵を一撃で倒せるのが前提の技だった」

「フンガガガー！！！」

「逃げるミヤー！！！」

ミヤオが、青ざめているレイを背中に抱えて走り出します。男一人担いでいるというのに、なかなか素早いステップでエリザベートの攻撃を避けます。

「ニヤニヤニヤ！ コネミのおじちゃん！ 助けてニヤー！！！」

あまりの猛攻にミヤオが悲鳴を上げます。

「コネミ？」

ステラが目を見張りました。すぐ側の砂山から、肉厚の手がポゴンと生え出ます。そして、ザバーツと砂を掻きながらコネミが姿を現しました。どうやら、エリザベートが姿を出した瞬間に隠れていたようです。

「やれやれ……。どうやら、私が戦わねばならぬようですね」
パンパンと服の砂を払い、コネミは深く嘆息します。

「久し振りにやりますか……。ふんりゃッ！」

コネミが全身に気合いを入れます。脂肪が瞬時に鋼鉄の筋肉と化しました。膨大な量の脂肪全てが筋肉となったわけですから、まるで紐でキュツと縛ったハムのようなのです。ただ顔はそのままなので、顔と身体のギャップに気持ち悪さだけは倍増でした。

「コネミのおじちゃん！」

「コネミ！」

ミヤオとステラが呼びかけます。

「どいていなさい。私がやります！」

激震の足音を響かせながら迫り来るエリザベートに、ムキムキのコネミが立ちふさがります。

「どりゃッ！」

ボヒュツという風切り音と共に繰り出されたコネミの拳が、エリザベートのスネに当たります。いわゆる弁慶の泣き所です。これにはたまらず、エリザベートも涙を流して痛がりします。まさに鬼の目にも涙……。いえ、もちろん意味が違いますが。

敵の怯んだ隙を見逃さず、倒れかかったエリザベートの爪先を掴み、ジャイアントスイングの体勢です。ましてやエリザベートとの体格ですから、まるで風力発電のプロペラの如くグルグルとものすごい迫力で回します。そして、そのまま放り投げてしまいました。ヒューンと、遙か彼方へとエリザベートは飛んでいってしまいます。
「ふう……。やれやれ」

コネミは額をタオルで拭くと、もういつもの体型に戻っていました。ノアたちは、開いた口がふさがらないような状況です。

「なんだ、何がどうなっているんだ？」

レイもボーズ太郎も、困惑した様子でコネミを見やります。コネミは素知らぬ顔で、ゴシゴシと顔を拭い、脇を拭きました。

「おい！ コネミ！ こいつらは、レムジンに行きたがっているん

だ！　なんで、通れないなんて嘘を言うんだよ！？　お前の力なら・・・普通に通れるだろうが！」

ステラが問いかけます。ノアたちも、真剣な表情でコネミを見やりました。コネミは、観念したかのようにフウと溜息を吐き出します。

魔神の力を受けたエリザベートをあしらってしまつコネミの實力は皆に解ってしまいました。いまさら、なんの言い逃れもできません。

「・・・レムジンに行つてどうするのです？　あそこは、デムが行くところではありません」

そう言つコネミの前に、メルが一步進み出ます。

「私たちは、レムジンの先ランドレークを目指しています。危機に瀕している仲間たちを助けるため、そして目覚めつつある魔神バルバトスを再度封印するため・・・スタッドさんに何としても会わねばならないのです」

さすがにこの言葉には、コネミもステラもちょっと驚いた顔をします。コネミは何かを言いかけようと口を開きますが、思いとどまつて首を横に振ります。

「滅びの都ランドレーク・・・ですか。確かに、そこに行くためには、レムジンにある移送魔法陣を使わねばなりません。ただその為には、レムジンの最高機関である元老院。そして大司教ファラーの許可が必要になるはずですよ」

「俺が直接に取り合つつもりです。俺はジャスト国の王子です。話ぐらいは聞いてもらえるでしょう」

レイが王族の証であるペンダントを出しました。しかし、コネミはそれを見ても、苦い顔で首を横に振ります。

「少し・・・昔話をしましょうか」

コネミがその場にゆっくり座ります。ノアたちも、誰も何も言わずにその場にしゃがみました。

ステラとミャオは倒れているウィリアムを起こしに行きます。ウ

イリアムが無事なのを確認して、慌てて戻ってきてから、コネミの側にちよこんと座りました。ステラの反対にはミヤオが座りました。皆が聞く準備ができたのだと見て、コネミは静かに語り出します。

「・・・英雄スタッド。彼が魔神バルバトスを封印した業績は偉大でした。彼の影響により、今までまるで見向きもされなかったデムたち。私や一部の才能のある者だけは・・・という条件はありましたが、デムはレムジンに入ることが許されたのです」

コネミもレムジンにいたのだと知って、誰もが驚きを隠せないでいます。コネミはちよつと自嘲気味に笑って続けました。

「英雄スタッド。そして名医バーボン。互いに面識はなかったでしょうが、特に秀でていた話が出るのはこの二人です」

バーボンの名前がでたのに、ノアもメルも驚いた顔をします。

「コネミさん・・・。バーボンさんを知っているのですか？」

「ええ。レムジンでは有名人ですよ。会ったことはなくとも、レムジンにいるときは噂だけは毎日のように聞きました」

懐かしむように、遠い目をしながらコネミが自分の拳をさすりま

す。

「この二人ですが、実はその持つ思想も似ているものがありました。ファルの閉鎖的な種族差別を無くすよう、彼らは奮闘したのです。

ファルとメリンとデム。この三種族が協力しあい、平和を築いていくこと・・・。」

「人は定規じゃ計れない・・・。」

ノアがバーボンの昔の決め台詞をポツリと言います。コネミはゆつくりと頷きました。

「しかし、ファルの元老院は聞き入れませんでした。『ファルとメリンは上位種族であり、デムはあくまで下位種族である・・・。突然変異で、類い希な才能を持つものがあることは認めても、全てを認めることはできない』。これが元老たちの見解でした。やがて、スタッドは自分の主張が受け入れられないと見るや、論文だけを残してレムジンから姿を消します。そして、バーボン医師は・・・最

後まで主張をやめなかったため、手酷い迫害を受けました。そして、やがては、私などもレムジンにいられなくなってしまうのです」

「コネミは今までにない、真剣な面持ちでノアたちを見回します。それでも……。それでもレムジンに行かれるというのですか？ あそこには非人道的な扱いしか待ち受けていません。それを受け入れるだけの覚悟があるのですか？」

「コネミの問いかけに、ミヤオが伸びをしながらミヤーと鳴きました。

「ミヤオは、レムジンに行ってみよう。ミヤオみたいなのが一杯いるんですよ？ ならミヤオは行くよ」

純真な目で見つめられ、コネミは眉を寄せます。

「ミヤオ……」

「ミヤオは大丈夫だよ。ミヤオはノアたちと行くニヤ」

「ミヤオは、ノアとメルスの腕をとってニツコリと笑いました。

「アタシたちは構わないけど。ミヤオはコネミと一緒にいた方が良いいんじゃない？」

「いえ。私からも願います。ミヤオをレムジンに連れて行ってやって下さい。今までは同種族から差別されるよりは私と共にいた方がよいとそう思っていました……。ですが、彼女はファルなのです。出私と必要以上に親しくしてはいけないと、わざと冷たい素振りをしていましたが……」

そう辛そうにコネミは言います。ミヤオに冷たく接していたのは、馴れ合わないためという理由があったのです。

「ミヤオ知ってるよ。コネミのおじちゃん、ミヤオがヒドイから守ってくれたミヤ！ レムジンにはミヤオの仲間がいるけれど、ミヤオにダメーってするから！ でもね、でもね！ それでも、ミヤオにはミヤオみたいな仲間がいるなら見てみたいの！」

コネミはハツとした顔をしました。ステラはフツと笑います。

「いつまでも子供じゃないのさ。ミヤオだってこのままじゃいけない。それはお前だって解ってたんだろ。レムジンには……。もしかし

の一喝です。しばらくは、ビビって悪さができないでしょう。今のうちに抜けてしまおうといい。それほど長い洞窟ではありません」

コネミの言葉に、半信半疑なノアとレイです。でも、信じる他ありません。コクリと頷きました。

「よし！ 行くよ！！」

ノアたちは拳を振り上げ、ヤマンバ洞窟へと入っていきました。……。

残されたコネミとステラは、見送っていたノアたちの背中がもう見えなくなり、真つ暗な洞窟の入り口を見やって小さく溜息をつきます。

「行っちゃったな……。じゃ、アタイも帰るか」

コネミをチラリと見て、ステラは肩を落としながら踵を返そうと瞬間です。コネミが口を開きました。

「……ミヤオがいなくなつて、魚があまりそうですね。ウィリアムなら、がつつり食べてくれそうですね」

小さな声でしたが、ステラの地獄耳は聞き逃しません。パッと明るい顔になります。

「な、なら！！」

「……あなたは、料理ぐらいできるんでしょう。手伝ってくれるなら、私の家にきなさい」

「あ、ああ！ とっておきのアタイの手料理を食わせてやるよ！」

「私はグルメですから。美味しいものをお願いしますよ」

「任せろつてんだよー」

コネミとステラは、そんなやりとりをしながら家路へと戻っていたのでした……。

計らずとも、ノアとメルの『コネミとステラをくつつける作戦！』は大成功したようです。もちろん、先に進んでいくノアもメルもそんなことを知る由もなかったわけですが……。

ヤマンバ洞窟。洞窟自体はシンプルで真つ直ぐな道のりだったの

ですが、その距離はコネミが言ったほど短いものではありませんでした。ましてや薄暗い洞窟なのでどれくらい時間が経過したかも解りにくいのです。ようやく外に出た時には、朝日が昇っていました。抜けた先は大きな岩がゴロゴロしている荒野でした。魔物に見つからなさそうな場所を探します。そして巨人が転がしてきたような大きな大きな丸い巨石の下にテントをはりました。四人はそこでちよつとだけ仮眠をとります。一昼夜、寝ずに歩いたり戦ったりしていたのですから少し休みたくなるのも仕方ありません。

ちよつと一眠りしていたメルでしたが、フツと起きあがって周囲を見回します。そして、皆から離れて座り込みました。抜けるような晴天です。そんな中、昼寝をしているのが申し訳ないような気がしていました。

「どうしたニヤ、メル？」

ヒョイツと横から顔を出され、メルはちよつと驚いた顔をします。八重歯を剥き出しにして、ミヤオがニツと笑いました。

「え、ええ。こう明るいと眠れなくて……。ミヤオも……。眠れないのですか？」

メルが微笑み返すのに、ミヤオは同じような顔を真似しようとして口をモゴモゴさせます。でも、すぐに飽きたらしく、ミヤオのいつもの目を細めた笑いに戻りました。スルリとメルの身体を回り、その隣にちよこんと座ります。

「お昼寝はあんまり好きじゃないニヤー。コネミのおじちゃんも、あんまお昼寝すると、夜に眠れなくなるからダメーって言うニヤ」

「そうですね……。そうですね。コネミさんの言うとおりですね。メルはコクリと頷きます。そして、ミヤオの顔をジッとみました。」「……。ミヤオは、コネミさんが大好きなんでしょう？」

「うん。大好き。ミヤオに魚くれるし、いろんなことをいーっっぱい教えてくれるニヤ！」

「……。そのコネミさんと、離ればなれになって、寂しくはないんですか？」

メルの問題に、ミヤオは首を傾げます。

「・・・私は・・・寂しい。好きな人と会えないのも。辛いんです・・・。本当は・・・。お母さんに、ポーズ長老さんやポーズ星人の皆に・・・バーボンさんに、会いたい・・・うっっ」

メル長い睫から、パラパラと雫が飛び散りました。天真爛漫なミヤオを見ていて、幼い頃の気持ちをメルは思い出していたのです。気丈に振る舞わなければ、涙をながしてはいけない・・・そうは思いながらも、溢れ出す気持ちは止まりません。こんなところで、昼寝をしてはいけない気がするのです。

「ミヤオ。コネミのおじちゃんと言ったよ」

ミヤオは空を指さします。メルは涙に濡れた顔をあげ、さきほどの抜けるような青空を見やりました。

「ミヤオはね。お父さんの顔もお母さんの顔も解らないニヤ。でもね、そんなお父さんやお母さんも、きつとこの空を見上げているよ、って。同じ空の下じゃ、誰も一人じゃないんだよ、って。きつとコネミのおじちゃんもステラも、同じ空を見てるニヤ。だから、ミヤオはみんなといつも一緒。メルやノアが側にいなくなっちゃっても、空がある限りは誰も一人じゃないんだニヤ」

「同じ空の下では、誰も一人じゃない・・・」

メルはポツリと呟いて、涙を拭きました。きつとミヤオはこの言葉の意味なんてわかっていないのかも知れませんが。でも、コネミがいかにもミヤオを大事にしていたのが解ります。

「・・・ありがとうございます。ミヤオ。レムジンで、仲間たちに・・・家族に会えるといいですね」

「うん　そしたら、空を見る人が増えるミヤオ！　もっともっと！　ミヤオは知らない人に会うニヤ！」

無邪気に手足をばたつかせて喜ぶミヤオに、メルも知らずうちに笑みが零れました・・・。

ファルの大首都レムジン。それは無秩序に広がる荒れ果てた地の

ど真ん中に、秩序と整然という言葉を持ってして現れました。

首都の中心にある大教会を中心に、街は正方形状に広がり、中央を大道路が十字に走っています。大きさはジャスト城と城下町あわせても足りないほど。その三倍か四倍かは軽くありそうです。

寸分狂わぬ測量を持ってして、わずかな歪みも許さずに真っ直ぐにのびる道路。合わせ鏡のように、ズ同じ形でラーツと連ねる家の壁。すべてが左右対称。完全なシンメトリー。左の屋根が赤ければ、当然に右の屋根も赤いです。左の家の芝生の長さが五センチであれば、当然、右の家の芝生の長さもきっかり五センチ。驚くことに街路樹なども、まったく同じような形のもので揃えられています。

街に入った瞬間、ノアたちは立ちくらみのようなものを感じました。あまりにも理路整然としすぎていて、塵一つのない綺麗すぎる町並みです。あまりに正確すぎて、見ているこちらが疲れてしまします。

「なんだ・・・ここ。変な感じ」

「ええ。自然が・・・感じられません」

メルは側にあつた木に手を当てます。生命力が感じられないのです。ただの作り物のようです。

「これがレグー砂漠が生まれた理由さ。これだけの人工物を生み出すには、大量の資材が必要だったんだ」

レイが言います。ノアもメルも眉を顰めました。不自然なこの都を作るために、自然を破壊するなんてどういうことでしょうか。まったくその気持ちや考えが理解できないのです。

「アタシ・・・この街は好きになれそうにない」

ノアがふて腐れたようにそう言います。

街の真ん中でそんなことをしていると、沢山の兵士が走って来ました。いずれも青いフルフェイスの兜と四角い鎧に、槍や剣で武装しています。問答無用とばかりに、その兵士たちはいきなり攻撃してきました。

「な、なにするんだよ!？」

「黙れ！ エテ公ども！ 大人しく捕縛される！！」

くぐもった声で兜の中でそう言います。表情が見えないのですし、機械的なその声は冷徹に聞こえました。ノアたちは抵抗します。

「おい！ 待て！ 俺はジャスト国の・・・王子で！ は、話を聞け！！」

王子の証を取り出す間もなく、レイも剣を抜かざるをえません。

「なんだー！ お前らー！！」

抑えつけられようと羽交い締めにされたミヤオが怒ります。爪をたててガリガリと、兜を引っ掻きました。

「ええい！ 抵抗するといふならば、容赦はせん！！」

隊長格らしき人物が、剣を高々と掲げました。

素早く逃げまわっていたノアを、それを上回るスピードで頭から抑えつけます。槍でレイのもっていた剣を叩き落とします。魔法を唱えようとしたメルとボーズ太郎の首に槍の穂先が当てられます。引っ掻いたり蹴っていたミヤオを、左右から腕をとって捕まえます。あつという間に、ノアたちはファルの兵士達に抑えつけられてしまったのです。

「・・・グッ。さすがは武闘派ファルの精鋭兵士。街の中央まで誘き寄せて畳み掛ける戦術といい。俺たちが手も足もでないとは・・・」

レイは関心したように、払われた痛む手を抑えながら言います。

「勝手な発言をするな！」

槍の石突きで首筋を打たれ、レイは気絶してドサリと倒れます。

「・・・貴様らの罪状は不法侵入と抵抗罪だ。裁可は、ファラー大司教に仰ぐ。さあ、大教会に連行しろ！」

レムジンにやってきたノアたちは、いきなり捕まってしまったのでした・・・。

ジャスト城の時のように手枷をつけさせられ、大通りを大教会に向かって一列に連れていかれます・・・。

ファルの大司教ファラー。それはノアたちにとって、大きな出会

いとなるのでした・・・。

第十章 ファルの大首都レムジン（後書き）

体調不良などが重なってしまい、UPが遅れてしまったこと申し訳ありませんでした。まあ、コメントがないので読んでくれている人がいるのかも不明ですがw 一応w

さて、ついにファルの首都が出てきました。ここでDEMとメリンとファルの差別問題について、ようやく全貌が見えてくることと思います。若者達への成長の試練だと思います。次話はそれほどお待たせせずにUPできるかと・・・まあ、頑張りますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6399u/>

Valbatous【バルバトス】

2011年10月6日03時27分発行